

成規院西吟著『正信念仏偈要解』の紹介と翻刻

伊 藤 顕 慈

一、解説

本書は「正信偈」の註釈書にして、本願寺初代能化西吟（一六〇五～一六六三）の著作となる。龍谷大学には八部が所蔵されており、冊数は諸本によって異なるが、巻数は全四巻で共通する。巻一には序文が収録されるところに、造意や題号の解釈等が述べられているが、偈前の文に対する解釈はみられない。巻二には依経段「弥陀章」・「釈迦章」、巻三には依釈段「総讀七祖」「龍樹章」・「天親章」、巻四には同「曇鸞章」・「道綽章」・「善導章」・「源信章」・「源空章」「総結勸信」の解釈がそれぞれ述べられている。

本書の成稿は承応二年（一六五三）とみられ、刊行はその奥付より明暦四年（一六五八）であることが知られる。⁽³⁾ 本書が成稿から五年後の明暦四年（一六五八）の刊行に至った背景には、「承応の閭牆」の影響があるものと思われる。⁽⁴⁾ 徳川期における「正信偈」の註釈については、本書に先立って慶安三年（一六五〇）に空誓『正信念仏偈私見聞』の成立が確認できるが、本書は本願寺能化による「正信偈」註釈の嚆矢に位置づけられる。

本書刊行の翌年、万治二年（一六五九）には、本願寺第二代能化知空が本書の註釈書として『正信念仏偈要解助

講』を成稿しており、西吟没後五〇年の節目となる正徳三年（一七一三）には、知空の実弟である性海が『正信念仏偈要解刊定記』を刊行している。また、延宝五年（一六七七）に善巧寺空吟が、享保七年（一七二二）には後の本願寺第四代能化となる法霖が学林に『正信念仏偈要解』を講じていることから、本書が本願寺派において長らく「正信偈」を学ぶにあたつての必読書に位置づけられていた実情をうかがい知ることができる。

二、西吟の生涯

本願寺の初代能化西吟は、慶長一〇年（一六〇五）、豊前小倉（現福岡県北九州市小倉）の永照寺第四代西秀の子として生まれた。幼少期はあまり学問を好まず、両親も呆れるほどであったという。中津で開かれた紀州性応寺了尊（一五八二～一六三八）の講筵への懸席が契機となり学を志した。日々『韻書』⁽⁶⁾を数十紙暗誦し、覚えては破り捨てを繰り返すことで広く経論の義に精通するに至った。後に遊学の身となり、恵日山東福寺に入り二年間禪教を学んだという。⁽⁷⁾寛永一一年（一六三四）三〇歳の時、一家衆となり内陣位へと進み、⁽⁸⁾同年九月、永照寺第五代西林の示寂に伴い小倉の自坊に戻ったとされる。自坊では宗典の研鑽や学徒を集めての講授に励み、寛永二一年（一六四四）から正保二年（一六四五）の間に豊後臼杵（現大分県臼杵市）多福寺雪窓宗崔（一五八九～一六四九）のもとで一ヶ月余り『臨濟録』をきくなどして禪教を承ったという。⁽⁹⁾なお、遊学時期や帰郷後の研鑽講授期等における西吟の具体的動向は明らかになっていない。

寛永一六年（一六三九）、京都三条銀座の信徒野村屋宗句の喜捨によって阿弥陀堂北西、茶所の西側に学寮（後の学林）が創建された。⁽¹⁰⁾同年、河内出口（現大阪府枚方市出口）光善寺准玄（一五八九～一六四八）が能化の任を拝命している。⁽¹¹⁾正保三年（一六四四）には学寮を西侍町に移転改修する話が持ち上がり、翌正保四年（一六四五）

三月一日、移転改修が開始され、同年八月下旬落成。普請前に准玄が能化職を辞して自坊に戻っていたため、学寮の落成に伴い正保四年（一六四五）九月二日、四三歳にして能化職を拜命した。⁽¹²⁾ 就任同日、学寮において『阿弥陀経』を講じ、同年、「法制七条」を定めたとされるが、その内容は現存していない。翌正保五年（一六四八）一月二三日、一度永照寺に戻り、同年八月一日、再び上洛するも年内に講義を行うことはなかった。翌慶安二年（一六四九）六月、学寮への寄進により寮舎が新たに新築された後、慶安三年（一六五〇）、慶安四年（一六五一）と講義は行われたものの、講題は明らかでない。なお、後の本願寺派第二代能化知空（一六三四―一七一八）が学寮に入ったのはちょうどこの時期である。慶安五年（一六五二）七月一日、再び学寮の移転が行われ、同年九月、興正寺南側への移転を終えている。同年一〇月三日、新たに法制十二条を定め、⁽¹⁴⁾ 同月八日、学寮において『安樂集』の講義を行った。

翌承応二年（一六五三）二月八日に月感（一六〇〇―一六七四）より提出された「謹奉訴状」を同年三月三日に受け取り、同月五日、「七箇条御伺」を記して反論するが、同月八日、月感より『七箇条証拠』一卷、『破邪明証』一卷が提出されたため、その返答書として『仮名答書』一卷、『真名答書』一卷を成稿した。「謹奉訴状」に端を発する西吟と月感の論駁の応酬は、やがて興正寺や幕府をも巻き込む騒動へと展開する。いわゆる「承応の閨牆」である。明暦元年（一六五五）七月、本願寺・興正寺の本末問題に発展していた諍論は、学寮の取り壊しをもって幕府に調停されることとなり、⁽¹⁵⁾ 万治二年（一六五九）二月の興正寺継嗣円超と良如第七子真光院との婚姻をもって終局をむかえた。

学寮の破却後は、医者屋敷を「かりや」として講談を行ったとされる。明暦元年（一六五五）一〇月下旬、仏照寺において『起信論』を講じ、翌一月上旬、自坊に戻り、翌明暦二年（一六五六）六月、京都へ帰ると本山よ

り八木藏人の邸宅に移り開講するよう命じられたが、月感の騒動以来、門末の学徒による自身の立場を非難する声を聞き及んでいたため、これを辞退したという。⁽¹⁶⁾同年八月、良如宗主の命をうけ『私記』を殿中に講じ、同年一〇月、帰路について以降、学寮における開講記録はみられない。寛文二年（一六六二）十二月二八日、継職間もない寂如宗主に『選択集』の句読を授けた後、翌寛文三年（一六六三）七月一五日、端座合掌し、西に向かい念仏をと
なえながら五九歳で示寂した。⁽¹⁷⁾

三、先行研究の整理

先行研究による本書への言及を整理すると、次の六点にまとめることができる。

- (一) 信心に理事両面を語る
 - (二) 信心と称名の関係において相成・相即を語る
 - (三) 行者の願心によって帰命を解釈する
 - (四) 本具仏性を語る
 - (五) 光明に自受用他受用の判定を施す
 - (六) 浄土を処不退の土とする
- 先ず、「(一) 信心に理事両面を語る」とは、西吟にみられる自性唯心思想に関わる問題として言及されるものであり、次の記述に依拠する言及である。⁽¹⁸⁾

「応信」とは、「信」に二門あり。一にはその理を信じ、二にはその事を信ず。その理を信ずとは、我心すなわちこれ浄土、我性すなわちこれ弥陀なりと信ずるなり。その事を信ずとは、西方は果に浄土あり、果に弥陀あ

りと信ずるなり。その理ありといえども、理を全うじて事を成ず。海印のよく万象を現するがごとし。その事ありといえども、事を全うじてこれ理なれば、万象の海印離れざるがごとし。いま当家の意は、かつて行者の理事の分を機知するに非ず。ただよく心を仏地に樹て、常によく念を法界に流せば、覚えずして真如の門に転入す。全く事即理、一步を動ぜずしてそれこれを得るのみ。 (『正信念仏偈要解』二、三九丁左・四〇丁右)

理を信ずるとの見解は自性唯心の思想的立場を出ない、あるいは混同されやすいとして問題視されており、言辞が聖道的であることは否めないと評される。⁽²¹⁾ また、藕益智旭の『仏説阿弥陀経要解』に基づくとの指摘もある。⁽²²⁾

次に、「(二) 信心と称名の関係において相成・相即を語る」とは、西吟の行信論がいわゆる能行説の立場にあるとする根拠の一つとして言及されるものであり、次の記述に依拠する言及である。⁽²³⁾

「正信念仏」に就いて解するに両義あり。一には「正信」と「念仏」となり。謂く、「正信」はこれ安心なり、「念仏」はこれ起行なり。「正信」に依るが故に「念仏」を口にす、「念仏」を口にするが故に「正信」を成ず。これ安心・起行、心行具足の次なり。二には「正信」すなわち「念仏」なり。謂く、「念仏」の義を聞きて深心にこれを領するを「正信」と云う。すなわち、これを口にすることを称名と云う。もしは心にこれを用い、もしは口にこれを唱えれば、心口、あい隔つに似たれども、その体全く別なし。いまし「正信」の心、すなわち口称に出れば、「正信」の外更に口称なし。故に「正信」すなわち「念仏」と云うなり。

(『正信念仏偈要解』一、重三丁右・左)

「正信」より「念仏」を口にし、「念仏」を口にすることで「正信」の成立をみるとして相成が語られ、念仏の義を心に領解するのが「正信」、口にするのが「称名」であるとして相即が語られる。中でも、西吟は正信の対象となる念仏の義を「称名念仏が往生の行である」と理解するため、いわゆる能行説の立場にあるとの評価に至る。⁽²⁴⁾

次に、「(三) 行者の願心によつて帰命を解釈する」とは、三業惑乱の思想的由来として言及されるものであり、次の記述に依拠する言及である。

『教行証』二(本典 行文類)に帰命を説きて云く、「本願招喚の勅命なり(本書(本典)はまず字訓を出す。しかしてこの釈を作るといへども、実は香象(法蔵)・善導の二大徳の釈にもとづくのみ)」「(二、三五)と。釈して言わく、いま行者の願心はこれ弥陀の願音、釈迦の教勅に由りて起る。故に「招喚命」と云う。譬えば鳴鶴、陰に在ればその子これに和するがごとし。ただし、功を本に推してひとえにこれを他力と云う。

〔『正信念仏偈要解』二、六丁右〕

行者の願心をもつて帰命を釈すとして、微かながら願生帰命説の淵源がみられると評される。あるいは西吟は往因として信願行の三資糧に言及するとの指摘もみられる。⁽²⁶⁾

次に、「(四) 本具仏性を語る」とは、西吟の仏性論として言及されるものであり、次の記述に依拠する言及である。⁽²⁷⁾

それ人々本来仏性ありといへども、覺に背きて塵に合して、愛河の浪に沈溺し火宅の焰に梵焼す。

〔『正信念仏偈要解』一、重三丁左〕

本具仏性の義は明確である。一方、その性に背くとして衆生の立場を明示する点には留意すべきである。詰まるところ西吟の仏性論は、法界身の仏が衆生心に遍満するとして捉えられるが、その法界身義は事仏でなく理仏にあることが指摘されている。⁽²⁸⁾

次に、「(五) 光明に自受用他受用の判定を施す」とは、西吟の仏身仏土論として言及されるものであり、次の記述に依拠する言及である。⁽²⁹⁾

およそ光明多種あり。謂く、自受用身、内、真法界を照らす、これを智光と名づく。他受用身、外、あまねく大衆を照らす、これを身光と名づく。

（『正信念仏偈要解』二、七丁右）

本書では、光明に自受用他受用の判定を施すのみであるが、知空が西吟の講義を聴記したとされる『安樂集鑰聞』に照らし合わせて考えると、西吟もまた弥陀浄土を他受用土と捉えていたと考えられることが指摘されている。

最後に、「（六）浄土を処不退の土とする」とは、西吟における往生論の問題として言及されるものであり、次の記述に依拠する言及である。

すでにかの国は大乘善根の界、処はこれ不退なり。故にかしこに生ずる者は、はじめは凡位なれども、ついに勝縁を得て仏道を成ず。故に『大経』に法蔵の願に云く、「不住正定必至滅度者不取正覚」（一、二五）と。すでにかの国土の所得の不退は、これ位行念に非ず。まさしく処不退を指す。

（『正信念仏偈要解』一、二四丁右）

往生浄土の後、先ず不退に住すとの姿勢がうかがえ、あるいは「正信偈」「成等覚証大涅槃」を釈す箇所において、「成等覚」を当益とし、往生浄土の後、等覚を成じ大涅槃を証すると解釈する点に鑑みると、往生即成仏の義があいまいであると評せざるを得ないとされる⁽³²⁾。

先行研究における本書への言及の中で、最も多くを占めるのが西谷順誓氏の指摘に始まる「（一）信心に理事両面を語る」である。この指摘により、承応の閼牆における月感の論難にも理はあるとして、西吟教学の検討の必要性が要求されたと考えられる。続く「（二）信心と称名の関係において相成・相即を語る」もまた、西谷氏の指摘に始まる。相成・相即の思想は心行不二説とも評され、西吟はこうした思想を基盤として第十七・第十八両願全一の立場を展開すると考えられる一方で、第十七・第十八両願全一については先学の評価に差異がみられる。次に「（三）

行者の願心によつて帰命を解釈する」とは、大原性実氏の指摘である。後に三業惑乱へと展開する願生帰命説の端緒が西吟にみられるとする根拠となる。次に「(四) 本具仏性を語る」とは、普賢大円氏に始まる指摘であり、「承応の闕牆」における月感の論難の所在の一つとされる。続く「(五) 光明に自受用他受用の判定を施す」も普賢氏の指摘である。知空『安樂集鑰聞』に对照させての指摘であるため、検討の余地はあるものと思われる。最後の「(六) 浄土を処不退の土とする」もまた普賢氏の指摘であり、西吟教学を考える上では非常に考慮すべきものと考えられる。

以上、先行研究による本書への言及を整理したが、最後に本書を翻刻する上でみてきた『正信念仏偈要解』の特色について付言しておく。鈴木法琛氏が西吟における「応信如来如实言」の解釈は藕益智旭『仏説阿弥陀経要解』に基づくとし、日高達善氏が西吟にみられる三資糧の思想は雲棲祿宏『浄土資糧集』を私淑するものでないかと指摘するように、⁽³³⁾ 本書には中国仏教の影響として法雲編『翻訳名義集』や延寿集『宗鏡録』、道誠集『釈氏要覧』等を下地として経論釈が引用されるという特色がみられた。管見の限り該当箇所には註を付したが、西吟はそれらのみずからの註釈であるとして孫引きとの断りを入れていない。⁽³⁴⁾ こうした特色は、先行研究によつて既に浄土異流の註釈書との関わりとして慶秀や知空にみられることが指摘されており、当時の註釈書の引用傾向であることが明らかとなっている。一方で西吟のこうした引用態度の特色は、聖道門に対する西吟の造詣の深さを物語るものであり、その教学形成への影響の検討をいま一度要求するものと考えられる。

四、書誌情報

本書の書誌情報は次の通りである。

『正信念仏偈要解』四卷四冊

〈底本〉龍谷大学蔵明暦四年刊本（請求記号133.5-151）

装訂 五針袋綴装、栗皮色表紙

寸法 縦二八×横一九・九糎

題籤 表紙左肩、「正信念仏偈要解」〔卷之一〕（卷一）、「正信念仏偈要解□」（卷二）、なし（卷三）、「正

信念仏偈要解」〔卷之四〕（卷四）

序文 「正信念仏偈要解」〔并序〕／祖意以要解名而応其索「耳」 版心書名「要解序」、四周子持ち杵無界、

半葉六行・一行一四文字

内題 「正信念仏偈要解卷一」（卷一）、「正信念仏偈要解卷二」（卷二）、「正信念仏偈要解卷三」（卷三）、「正

信念仏偈要解卷四」（卷四）

内題左下 「釈氏西吟 撰」（卷一・三・四）、「釈西吟 撰」（卷二）

版心 大黒口花口魚尾（卷一）、花口魚尾（卷二～四）

版心書名 「要解卷一（～四）（丁付）」

本文 四周子持ち杵無界（卷一～四）、半葉八行・一行一八文字（卷一）、半葉八行・一行一四文字（卷二

～四）、漢文送り仮名返り点あり、縦二一×横一五糎（卷一）、縦一六・七×横一四・七糎（卷二）、

縦一六・二×横一四・二糎（卷三・四）

尾題 なし（卷一・卷二）、「正信念仏偈要解卷三」（卷三）、「正信念仏偈要解卷之四」〔終〕（卷四）

刊記 「明暦四季仲春吉旦」／「五条橋通丁子屋」／西村九郎右衛門刊

丁数 第一冊一四丁（序文・卷二）、第二冊六五丁（卷二）、第三冊四三丁（卷三）、第四冊四八丁（卷四）、計一七〇丁

備考

天界に科段表記あり（卷二・四）、卷一冒頭に序文あり、いまは「序文」として別に内題等を記した第一冊の丁数については、序文（三丁）と卷一（一〇丁）からなる。ただし、卷一には「重三丁」があることから実際には一一丁であるため「丁数」には一四丁と記した

五、凡例

一、本文の表記は、常用漢字・現代仮名遣いで統一した。ただし、固有名詞・引用文等の特殊な場合は、この限りではない。

一、本文は延べ書きにし、通読しやすいよう文字や句読点をおぎない、明らかに誤字と思われるものはその訂正を「」内に示した。

一、本文中の引用文は書き下し、『浄土真宗聖典全書』に関しては、所在としてその下の括弧内に巻数と頁数のみを表記した。

一、典籍類および人物名に関しては、判明する限り本文註を（ ）でおぎなった。

一、本文註をつけるにあたり、訳本の特定が困難なものが多数見受けられたため、一部経典類は総称を用いた。

一、本文細註は「」でくくった。

一、本文中の漢字は、仮名に直しても意味を損なわない場合、仮名に直した。その主なものは左記の通りである。

あ行 嗟・嗚呼Ⅱああ 相Ⅱあい 中Ⅱあたり 当る・中るⅡあたる 豈Ⅱあに 普く・周く・遍く・布

く 〓 あまねく 有り 〓 あり 或は 〓 あるいは 雖も 〓 いえども 争 〓 いかでか 如何 〓 云何 〓 いかん
 乃し 〓 いまし 弥々 〓 いよいよ 所謂 〓 いわゆる 況や 〓 いわんや 転 〓 うたた 各々 〓 おのおの 自
 ずから 〓 おのずから 以 〓 おもんみる 凡そ 〓 およそ 及び 〓 および 竟んぬ 〓 おわんぬ
 是 〓 此 〓 斯 〓 之 〓 かくの 彼 〓 かしこ 且つ 〓 かつ 曾て 〓 かつて 彼の 〓 かの 彼れ 〓 かれ 蓋し 〓
 けだし 茲 〓 是 〓 此 〓 焉 〓 ここ 如し 〓 ごとし 是 〓 此 〓 斯 〓 この 此れ 〓 之れ 〓 是れ 〓 焉れ 〓 斯れ 〓
 惟れ 〓 これ

さ行
 而して 〓 しかして 加旃 〓 至若 〓 しかのみならず 而も 〓 しかも 爾なり 〓 しかなり 然るに 〓 爾るに

〓 しかるに 数々 〓 驟々 〓 屢々 〓 しばしば 姑く 〓 且く 暫く 〓 しばらく 頗る 〓 すこぶる 既に 〓 已
 に 〓 すでに 即ち 〓 則ち 〓 便ち 〓 乃ち 〓 輒ち 〓 迺ち 〓 すなわち 須 〓 すべからく 総て 〓 都て 〓 すべて
 其の 〓 その 其れ 〓 夫れ 〓 厥れ 〓 それ

た行
 唯 〓 惟 〓 維 〓 只 〓 但 〓 止 〓 ただ 忽ち 〓 たちまち 仮令 〓 縱令 〓 縱使 〓 仮饒 〓 縱え 〓 譬え 〓 たとえ 玉
 う 〓 たまう 為 〓 ため 為る 〓 たる 因に 〓 ちなみに 終に 〓 ついに 具に 〓 備に 〓 つぶさに 所 〓 と
 ころ

な行
 猶 〓 なお 莫れ 〓 勿れ 〓 なかれ 無く 〓 なく 無し 〓 莫し 〓 靡し 〓 なし 並びに 〓 並びに 〓 ならびに
 也 〓 なり 何ぞ 〓 盍ぞ 〓 那ぞ 〓 奚ぞ 〓 闔ぞ 〓 なんぞ

は行
 甚だ 〓 はなはだ 偏に 〓 単に 〓 ひとえに 一 〓 ひとたび 両 〓 ふたつ 外 〓 ほか 畧 〓 粗 〓 ほぼ
 ま行
 良に 〓 孚に 〓 苟に 〓 まことに 正しく 〓 まさしく 当に 〓 方に 〓 将に 〓 正に 〓 まさに 益々 〓 ますます
 先ず 〓 まず 亦 〓 又 〓 復 〓 また 自ら 〓 躬ら 〓 みずから 皆 〓 みな 若し 〓 もし 以て 〓 もつて 本 〓

旧〓もと 諸〓もろもろ

や行 所以〓ゆえん 漸く〓ようやく 能く〓よく 従り・自り〓より 宜しく〓よろしく

一、典籍類の略称については左記のように表記し、左記以外のものについては慣例に従う。

『浄聖全』 『浄土真宗聖典全書』

『大正』 『大正新脩大藏経』

『正統』 『正統藏経』

『浄全』 『浄土宗全書』

『本典』 『顕浄土真実教行証文類』

『略典』 『浄土文類聚鈔』

『大経』 『仏説無量寿経』

『観経』 『仏説観無量寿経』

『小経』 『仏説阿弥陀経』

『十住論』 『十住毘婆沙論』

『浄土論』 『無量寿経優婆塞提舍願生偈』

『論註』 『無量寿経優婆塞提舍願生偈註』

『選択集』 『選択本願念仏集』

『法華玄義』 『妙法蓮華経玄義』

『法華文句』 『妙法蓮華経文句』

成規院西吟著『正信念仏偈要解』翻刻

【二丁右】

正信念仏偈要解 并序

それ真実正智は、恒然として千古變なく、寂照虚徹にして湛乎として、その源を分かつたず。常にして變たり、寂にして明たり。乾坤、これがために屈伸し、万物、これがために死生す。ああ、それ茫然として出でるにもとなく、寂として入るに寂なし。それ、得て知らざる者あり、かつ得てこれを嘗むる者あり。いまし

【二丁左】

賢愚あい去り、迷悟あい隔つゆえんなり。その損益するところに至りては、あに他に因りてこれを需めんやしかるに凶頑の者は、独り己を省みること難し。この故に仏の慈愍、無言の正真をもつて半滴の大蔵を吐き、長行短偈、規にあたり矩にあたる。片言隻字、心を正

し身を潤す。ここに念仏の一教は事理互融の玄蹟、凡聖同遊の捷徑なり。まさに

【二丁右】

源委を窮てかの仏を信すべし。その仏たるや、願重く行至れり。土を西方に浄め、名を楽国に募のり、誓い六八にして阿弥陀に字す。魏々として徳声、沙界に響き、赫々として靈光、塵刹を曜す。あるいは願に托して信を厚くし、あるいは境に任じて心に覩すれば、それを旧に復して本に達せしむるなり。この故に、伶俐なる者は、妙心を宗として無漏の境を覩すれば、直下に

【二丁左】

昏沈に即して、無量仏に見照することを得るなり。愚鈍なる者は、信願を要として、思を勝縁に繋ければ、すなわち今まさに始を保つの徴、菩提に登仮すべし。けだし、また賢なる者は愚に返り、愚なる者は生にし

て共に一心に仏願を信じ、恒によく仏名を唱う。この
信行をもつて、齊しく蓮台に躡^{のぼ}るは、三經の全旨にし
て祖々の所宗なり。しかるときには、通修、道あり。
因微にして功高し。ここを

【三丁右】

もつて、二祖は唇を印度に振るいて、孜々として西化
を輔け、五祖は踵^{かかと}すを漢和に継ぎて、懋々として楽邦
を指す。すなわち鸞師大德（親鸞）、その鴻勲を續ぎ
承けて、上、仏恩を謝し、下、化他のためにこの『正
偈』（正信念仏偈）を作りて、物をしてこれを誦せしむ。
念仏はこれ良因なり。故に正信を建てることを勧む。
言に非ずんば、しかも弘まらず。故に七言をもつてす。
実に安を求むる者は、これ華屋なり。それ海に望む者
はこれ洪

【三丁左】

舟なり。ただ文言至略にして、その義趣幽邃なり。去

歳臘の下旬、一愚（西吟）、学者に向かいてこれを講
ぜんと言わば、ただこれが註を作さんことを請う。故
に固く辞することを獲ずして、みずから艱^{かえり}才を眷^{かん}み思
うに、葛藤、人を乱さんことを恐れて、直ちにその要
義を解し、章を六段に開きて、略して祖意を彰し、「要
解」の名をもつてその索^{もと}めに応ずるのみ。

【二丁右】

正信念仏偈要解卷一

釈氏西吟 撰

まさにこの偈を解するに六あり。一には造偈の意を
明かし、二には偈の主旨を明かす。三には偈の所習
を明かし、四には題号を明かす。五には撰者の徳を
明かし、六には正釈なり。

一に造偈の意を明かすと云うは、竊にこれを計り窺
うに、高祖聖人（親鸞）、外、仏祖の教言に依り、内、
宿福のために撼かされ、すでに因縁あい合して、ま
さしく菩提心を發して、心を浄土に栖しめ、専ら仏

名を唱えり。いまし信定をもつての故に、行、いよいよ長し。すなわち、行長をもつての故に、心、益々安く、信行、情、亡じて内外分かつことなく、終日の念心

徳を含むが故に、のちに

【二丁左】

終日の行業、あにその楽しみ快かざらんや。ここをもつて、深く仏祖の高恩を知り、また、あまねく同体の悲を起こして、己を外にし、法界を心にして、仏祖の言を本として、すなわちもつてこれを賛美して、衆生をして念仏の法を信ぜしめんと欲してこの正偈を出す。両をもつてこれ当れり。

二に偈の主旨を明かすとは、初文より下「無過斯」に至りては、これまずみずから仏に帰し、次にその因功・果徳、あるいは行信・証由、あるいは仏出するゆえん、あるいは能発の利益および所摂の光益、あるいは信と益とを挙げて、機に信不あれば仏の褒貶あることを説く。謂く、はじめ帰仏を標するは衆

【二丁右】

その仏徳を讃ずるは、みずから恩のためにし、兼ねて人をしてその化功を知らせて、信願を発せしめんと欲するが故なり。至り尽くせり。次に「印度」より下「高祖説」に至りて、これ略して七祖の自他の両徳を釈してのち、総じてかの済化を挙げて、緇素同心にその化導に随わんことを明かす。謂く、これは人をして今の信ずるところ、勧むるところは、これ七祖の伝法にして臆説に非ざることを知らしめて、いよいよ人信を厚からんと欲す。故に己を隠してもつて結す。祖意ここに在り。

三に偈の所習を明かすとは、『往生論』（浄土論）を見るにほぼ義あい近し。謂く、かの『偈』（浄土論偈頌）の中に於いて、初に帰依を標してすなわち往生を願じ、『無量寿経』（大経）に依りて専らかの依

【二丁左】

正功德を明かして、共にかしこに生ぜんと願じて、更に余仏の功を開かずして、しかもただこの行法を勧む。今の『偈』（浄土論 偈頌）もまたしかり。謂く、まず帰仏を顯してのち、『大本』（大經）の義に依りて、ひとえに弥陀の因果・功德・利益を明かして、ただこの行を勧む。すでに卒しい似て、しかも依論の故に、しばらくもつてかれに習うと言いてそれ可ならんか。彊牽してこれを要と為さんと欲するには非ず。また高祖（親鸞）の意、深く仏恩を念じて、ひとえに心の欲するところ、筆力の至るところに任す。なんぞ別して所習を論ぜんや。もし単名、もつてこれを執すれば、慈雲の『往生正信偈』、あるいは「念仏正信」の言あれども、今これに依るに非ず。学者これ을 思え。

四に題号を明かすとは、はじめ総じてこれを言わば、『正信』とは何の法を正信するや。謂く、

【三丁右】

念仏を正信するなり。仏、經の中に阿弥陀仏、四十願をもつて衆生を撰取すと説くを正信し、仏の光明よく諸罪を滅すと正信し、念仏すれば定めて不退を得ると正信し、念仏すれば淨土に生じて定めて三途に墮せずと正信し、念仏すればかしこに到りて無生忍を得たのち、滅度を証すと正信す。所以念仏を信ずることと勧む。この法を受け、この念を持つときは、すなわち淨土に往生すること必せり。この故に三世の諸仏諸大菩薩、大願力を具して諸善行を修し、仏境界に入り菩提を成就するも、未だこの信字より入らざるはあらざるなり。『華嚴經』に云く、「信を道元功德母と為す。信はよく

【三丁左】

諸善根を長養し、信はよく衆魔を超出し、信はよく三摩地に入ることを得。信はよく生死海を解脱し、

信よく佛菩提を成就す。ああ、今世の斎人、持戒信じて念仏を信ぜざるは、これみなみずから大利を失するなり⁽³⁵⁾（取意）と。故に『維摩經』に云く、「深信堅固なることな金剛のごとし」⁽³⁶⁾と。西方に到らんと欲せば、深信に由るを要す。まさに知るべし、淨土恒沙諸仏菩薩、尽く昔日正信の人なり。今時の行者、念仏を正信せば、すなわちかの国土に往生して、それかれと異なることなからん。ただ恨むらくは、かくのごときの義を聞きて、念仏を信ぜざるは、これあにまどはざるや。次に別してこれを言わば、「正信」と云うはすなわち深信なり。「正」は雜・助に對して言う、「信」は

【重三丁右】

疑に對して言うなり。謂く、雜行を修するに非ざる故に正なり、正助を弁ずるに非ざる故に正なり。ひとえに念仏はこれすなわち決定往生の業なりと思ひて、疑なく慮りなく、まさしく信心を建つるはこれ

深信なり。故に「正信念仏」と云う。なお就行立信と言わんか。また、「正信念仏」に就いて解するに兩義あり。一には「正信」と「念仏」となり。謂く、「正信」はこれ安心なり、「念仏」はこれ起行なり。「正信」に依るが故に「念仏」を口にす、「念仏」を口にするが故に「正信」を成ず。これ安心・起行、心行具足の次なり。二には「正信」すなわち「念仏」なり。謂く、「念仏」の義を聞きて深信にこれを領するを「正信」と云う。すなわち、これを口にすることを称名と云う。もしは心にこれを用い、もしは口にこれを唱えれば、心

【重三丁左】

口、あい隔つに似たれども、その体全く別なし。いまし「正信」の心、すなわち口称に出れば、「正信」の外更に口称なし。故に「正信」すなわち「念仏」と云うなり。けだし三義をすべ用いて「正信念仏」と云う。始より終に至るまで、句々行々、「正信」

に非ずと云うことなく、「念仏」に非ずと云うことなし。しかれども、題を立つるに宣句あり。学者これを察せよ。原ねるに、それ人々本来仏性ありといえども、覺に背きて塵に合して、愛河の浪に沈溺し火宅の焰に梵焼す。ここをもつて、法藏、昔、弘誓の本願を發して極樂の玄途を啓き、釈迦、慇に妙域の快樂を教えて六字の行法を示す。諸仏は舌を舒べて同讚して、専ら衆生の疑惑を遣る。三仏同

【四丁右】

勸すること独りこの法なるかな。もし釈迦に非ずんばこの迷蒙を引ことなく、もし弥陀に非ずんばこの正信出でることなし。けれど、念仏に於いて正信を建てずんば生死を出でるに期なく、穢身を離るに涯なからん。すべからく仏祖の開示に任せて、深く己を尅して、他力に乗じて往生を期すべし。今師（親鸞）、この『偈』（正信念仏偈）を作る正意、それここに在り。「偈」とは、梵には伽陀と云う。『名義集』

（翻訳名義集）に云く、「これには孤起と云う。『妙玄』に云く、重頌ざる者を孤起と名づく。または諷頌と曰うと。『西域記』に云く、旧には偈と曰う。梵本の略なり。あるが云く、偈は口数の義なり。唐には頌と云う」と。今この「偈」は、孤起にして重頌に通すべきなり。

五に撰者の徳を明かさば、釈の親鸞聖人、洛陽の人なり。姓は藤原、天

【四丁左】

津兒屋根の末裔なり。父は有範、母は吉光。幻釋にして父を喪し、伯父のために養われ、ようやく師に就きて經史を学ぶ。天性聰明にして顔貌温雅なり。少年に在りといえども、仏理を景暮してしばしば世典を荒て、すなわち竺墳に耽る。華を庭上に採りて供仏の戲を学び、月を樓台に覗ては禪那の思を凝らす。伯父、その宿智の撼らぐところ、誠にこれ異人なりと察す。のちに世父に随いて叡笹に登坂して、

山門の貫主、鎮和尚（慈円）に値いて、年九歳にして推髪して範宴と号す。しかしてのち、師に随いて登壇受戒し、進止機を見、語黙度にあたる。鎮（慈円）、その器宇を感じて、うたた鍾愛を加うなり。師、映雪の

【五丁右】

勞、穿壁の勤をもつて、いまし五時八教の綱目に長じ、方便の権門すなわちこれ真実の妙理なりと通じ、しかして一心三諦の妙觀に於けるや。二辺を出でるのただ中は、全くこれ不融の別教なりと曉し。いまし円教の所談は、三諦相即の故に次第に非ず。三千に一念なるは、すなわちこれ空なり。一念に三千なるは、すなわちこれ仮なり。念界融絶するはすなわちこれ中なり。中もまた中に非ざれば頓に仏地を越う。故に理はすなわち一中一切中、断はすなわち一断一切断なりと達すれば、三觀円成して、法身、素ならずしてすなわち貧子に同じきことを免るなり。

【五丁左】

あるいは智に就くときは、すなわち六即を安列し、あるいは理に随うときは、すなわち六即一

位なり。これ一に即して六、また六に即して一なり。修に就いて六即すでにあい顕るときは、すなわち仏に三身を分け、土に四種を見る。且立且癡、即立即癡、円解の妙旨、あにこれに超えんや。およそ台宗の秘蹟、美尽し善尽せり。兼ねて諸宗に涉獵して、よくその蘊奥を窮め、内外の経釈、つぶさに文理を陶く。けだし、末葉の迷倫はこれ円解の不器なりと察して、諸方の霊場に訪て、広く蒸民を済わんことを祈り、思いを六角の精舎に厚くして、告を孤夜の枕頭に得て、所懷欣然として恰も掌に握るがごとし。しかして然師（法然）、新たに専修念仏を開くことを聞きて、建仁元年、空師（法然）の室に詣して、浄利の津梁を問うて、論義甄

【六丁右】

究して日を経おわりて、ついに本宗を改めて、まさしく淨教に帰す。師弟あい共に西土の教を弘む。すなわち、その化に従うことは水の器に随うがごとし。然公（法然）、恒に言う、善信（親鸞）の智仁、その功用、うたた澆世に盛らんと成り。想うにそれ、今と果して違わず。賢者の嘉言、誠に奇なるかな。ここに山門の大衆等、自法愛染の私に罹りて、毀訾他法の思を回らし、訟を土御門の院に致せば、ついに流刑の宣旨を受けて、承元元年、空師（法然）、年七十五にして佐州に竄せられ、今師（親鸞）年三十五にして越後に遷る。のちに佐度院の御宇に於いて、黃門の範光卿をもつて、まさしく帰洛弘法の勅宣を蒙れども、

【六丁左】

辺域の群類を化せんと欲して辞して帰らず、広く諸方に遊びて常に禿頭にして、みずからを愚禿と云う。

しかしてかの地に在りて苦を濟うこと五年、のちに信樂に遊びて化を播すこと七年、また常州の山麓に移りて形を草屋に潜め、念仏の法を弘むなり。ここに役の行者の遺徒あり。のちにその名を明法房と号す。庸に高祖（親鸞）の化導の盛なることを嫉みて、身を山中に匿くして、今師（親鸞）を殺害して塞心を遂げんと欲ども、その便りを得ざれば、禪室に至りて害戮を加えんと思ひて、弓矢を提げ刀を帶し來りて、一たび温顔に向かひて、たちまちに讎結を避けて、却りて教を受けて服役と為る。今や行化ところ異なるとも、すべて五五年を経て、師（親鸞）、年六十にして

【七丁右】

洛都に帰る。朝来夕往、請に応じ化に順じて、専ら一任せず、その遊ぶところをもつてすなわち法座とす。のちに西洞院の辺に於いて、仮りに堂宇の形を為り設て、世と推し移りて一心念仏す。しかしての

ち、弘長二年仲冬二十八日、病に依りて道俗別れを執て、念仏し化し去る。春秋九十歳なり。けだし、それ今師（親鸞）、在世のとき述作するところの書、これ多し中にも『教行信証』を纂め、宗旨の龜鑑と爲して濁世の群萌に備う。謂く、教はこれ能詮、すなわち三部の宝典なり。余はこれ所詮、すなわち行信証果なり。教に依りて行を知り、行に就いて信を立て、行の初にありては信がこれ境爲り、後にありては信が

【七丁左】

これ行爲り。信に浅深ありて行に優劣あれば、感果に二土三生の異あり。故に二土を挙げてひとえに真土を教え、三種往生を建て専ら難思議の益を勧む。ここをもつて、正信正行を修さば実に証果虚しからず。迷信開悟この次を出でず。一代時教、この理を超えることなし。教に異訳あれば悉く挙げてこれを示し、行に巨益あれば広文をもつて嘆ず。信証等ま

た爾なり。誰が人を拒まんや。今この門に入るにすなわち教相あり。龍（龍樹）・道（道綽）の両徳に慣れてはしかも二行二道を建て、桐江（沢瑛）の釈義を写してはしかも横出堅出を立て、いまし機に就いて行に難易を分かち、また証に約してしかも土に淨穢を立つ。横超は他力を本として

【八丁右】

断証に拘わらず、堅出は自力に拘りて勞く断証を論ず。ここに於いて二門の興廢を察して、難聖の堅出を廢して、易淨の横超を興し、しかして行に正雜あり。その正に五種あり。これに翻じて雜もまたしかなり。けだし、正雜に就いて開發会あり。謂く、初めに念仏のために機に就いて余行を開き、次に念仏を立んがために余行を廢し、後に念仏を建てれば余行悉くこれに会す。然師（法然）はこれに就いて廢立等を言う。しばらく念仏の機のために余行を修するを雜行と言う。五種の正行の中には、第四をもつ

て正と爲し、余の四をもつて助と爲して正行を助くるなり。もし並べてこれを修する者をばすなわち雑修と云うなり。また、枉してその私に任せて、妄りに

【八丁左】

良日を挾び、その理にあたらずして、しかも吉凶を縛り、この二事を修するに於いては、すなわち雑修と云うなり。また、雑行は法に約してこれを言い、雑修は機に約してこれを言う。故にこの經に依りてよくその行を知り、その正行に順じて信を發してこれを行すれば、証を得ること空しからず。かの書、明かすところの文理広多なれども、その要を挙ぐるにこれを出でず。仏陀の正眼を得、七祖の骨髓に通ぜずんば、あに輒くこれを選ばんや。その根ざすところ深いかな。いま謹んで今師（親鸞）の行状を評するに、形、塵垢に接すれども神は冥寂に遊び、大浸、天河にいたれどもしかも濡すこと能わず。大早、

金石を流すともしかも焦すこと能わず。あに常情をもつてこれを取量らんや。まことにその跡、聖德太子と同じきなり。謂く、太子は

【九丁右】

生を刹利の種に仮て、随類応動して専ら妙法を説きて、あまねく群品を化す。法華に觀音、長者・居士・宰官等の身を現じて衆生を化すと説く。故に聖德太子、觀音の垂迹爲ることあにその証、他に求めんや。今師（親鸞）、生を婆羅門の種に受けて、凡俗に示同して、ひとえに念仏を説きて広く群生を利す。今經（大經）に弥陀、長者居士豪姓等の形と爲つて諸仏を供すと説く。⁽³⁸⁾故に今師聖人（親鸞）、その仏の化迹に非ずしてはいましこれ何人ぞや。けだし、觀音はこれ因、弥陀はこれ果なり。因にして果を尊ぶは、蓮位の靈夢、これその義なり。また、因、必ず果を成ずれば、因果不二にして、しかも妙用を播かすは救世の告命、これその義なり。

【九丁左】

また今師（親鸞）左遷ののち、専らみずから愚禿と言ふなり。今この義を詳るに謂く、僧に非ず俗に非ず、この故に禿の字をもつて姓と為す 三云々。竊にこれを考えるに多義あり。一には謂く、名を凡俗に混ざるが故に僧に非ず、光頭染衣の故に俗に非ず。二には謂く、形、塵境に交じるが故に僧に非ず、心、淨刹に栖むが故に俗に非ず。三には謂く、真宗の法は緇素に拘わらず、ひとえに弥陀を念じて淨刹に往詣するに在ることを表す。四には謂く、念心歴然の故に僧に非ず、念心不可得の故に俗に非ず。五には謂く、一法句の故に俗に非ず、二十九の故に僧に非ず。もしこの中に祖意を取らば、初義を右と為し、次義を左と為す。しかして後々は、これ行に就き信に就き

【十丁右】

所至に就き、学者思いてそれ可ならんや。強いてこ

れを知れと言ふには非ず。ただし、この門に入りて修行せんと欲する者は、体その家に在りて、髪を剪り、衣を更めて、形、塵埃に交じれども、こころをして専一ならしめ、心に僧俗を容れず、ただ弘願力に乗じてよくかの仏を信ずれば、能所をして一ならしめて、恒に二十九に遊びて全く一法句に妙たらば、非僧非俗、祖を去ること遠からず。もし信ぜざれば、すなわち僧全くこれ俗、もしこれを信ずるはすなわち俗全くこれ僧、けだしその形に屈してその真を勞わんや。真もと僧なく俗なし。妄りにこれに取滯することなかれ、その真を失することなかれ。けだし、今師（親鸞）、葆光・混垢の形、それ一旦の淺識、輒く窺い知るところに非ず。この門に入る者は、敢て他に効うことなかれ。もし

【十丁左】

よく經理を考へ合せずんば、それ必ずこの門を侮ることあらん。すでに愚禿と言へること遙に由あるを

や。けだし、今偈（正信念仏偈）はもとこれ『教行証』（本典）に出でり。別してこれを選び取りて、晨夕の勤行に備えること、ほぼ前に准じて知るべし。

【二丁右】

正信念仏偈要解卷二

釈西吟 撰

歸命無量壽如來

南無不可思議光

六に正釈の中に初の一行は、全偈の綱領にして余句を総す。故に総と云うなり。余句はすなわちこの総を別するが故に別と云うなり。これすなわち、みずから歸仏を顕し、還りて意、他を兼ねるなり。いまし異域この方の諸師、撰述あるに於いて必ず多くまづ三宝に歸して己が敬心を彪わす。これを必とするゆえんは、およそ六義あり。

【二丁左】

一には荷恩のための故に、二には加護を求むるが故に、三には信ぜしむるが故に、四には敬儀を表するが故に、五には勝を顕すが故に、六には衆生の仏法僧の念を開くが故に。すなわち今の歸仏の意に於い

てこの六義を撰せんこと可なり。いまし三宝、多種あり。知らんと思わばつぶさに諸文のごとし。ただし、いま仏宝を挙げてしかも余の二義を撰せんやいなや。答う、はなはだしかなり。撰するのゆえんは、不可思議智はこれ仏宝為り。仏に無相の理あり。これ法宝為り。徳、真俗を一にす。これ僧宝為り。すべからく出要を求むべき者は、仏祖の開示に随いて

【二丁右】

みずから三宝を敬信して他をしてまたしからしめよ。故に『涅槃經』に云く、「仏法僧あり、これを信正と名づく」⁽³⁹⁾と。謂く、真信を建つるもとなり。あにこれを信ぜざらんや。故に三宝あるをもつて、いましその要と為すなり。初めに「歸命」の両字は、これ能信心。次に「無量」等の五字は、これ所信体。能所濫ることなくして往生の因を成ず。故に「歸命無量」等と云うなり。また能は所に由りて起こり、所は能に由りて顕る。能所不二にして生仏分かつこ

となきはこれ真の帰仏にして往生の因なり。ここをもつて大師（善導）に彼此

【二丁左】

三業不相捨離の釈あり。この下に相応一念と云うもまた通ずるなり。「無量寿」とは、これ寿命無量の願に依りてすなわちこの勝報を感成するなり。仏もと身なく寿なく量なし。寿量なきに於いて長寿の願を起こす。およそ朱愚の悲しむところ、ただ短命に在り。好むところ、ただ長寿に在り。すなわちその好むところに托してこの誓願を建つ。これすなわち弥陀仏の善巧方便なり。その寿を言うときはすなわち古に亘り今に徹り、千世も尽きず万世も易からず。これいわゆる無量寿なり。經に釈迦

【三丁右】

この徳を賛じていよいよ人信を厚くするなり。およそ仏寿に三あり。法寿・報寿・応寿なり。『寿量品四疏』

（法華文句）に云く、「寿は受なり。もし法身は真如、諸法を隔てず。故に名づけて受と為す。もし報身は境智相応す。故に名づけて受と為す。もし応身は一期の報命百年断ぜず。故に名づけて受と為す。法身は如理をもつて命と為す、報身は智慧をもつて命と為す。応身は因縁をもつて命と為す」（取意）と。⁽⁴⁰⁾
いま宗家（善導）に随いて、報の寿命を言うときは、すなわち阿弥陀仏、昔の修因に酬いてすなわち妙理

【三丁左】

来現す。その智、還りて理に冥し。境として照らさずと云うことなく、処として至らずと云うことなし。境すでに無辺なれば、智また無量なり。故に境智相応する。これ「受」の義なり。相応をもつての故に尽くることなきはこれ「命」の義なり。天台（智顗）の云く（法華文句）、「実に有量なれども、無量と言ふは弥陀これなり」⁽⁴²⁾と。もししかれば、弥陀の寿命は実には有量の無量と言わんや。謂く、仏寿の無量

は機見不同なり。この故に双林に入滅して、あるいは靈山未だ散せずと見、舎那千丈をあるいは丈六の金身と見る。仏もと移らざるに、機みずから異なり。故に綽

【四丁右】

師（道綽）、「阿弥陀仏入涅槃ののちに、觀世音仏処に補する」の文を釈して曰く（安樂集）、「これはこれ報身、隱没の相を示現して滅度には非ざるなり。かの『經』（觀音授記經意）に云く、阿弥陀仏入涅槃ののち、また深厚善根の衆生ありて、還りて見ることを故のごとし」（一、五八〇）と。知んぬ、これその機に隨いて入不入を見ること、なお一月三舟の譬えのごとし。また、『大經』に説く、「たとえ十方世界の無量の衆生、みな人身を得て、悉く声聞・緣覺を成就せしめて、すべて共に集会し、思いを一心に禪して、その智力を竭して、百千

【四丁左】

万劫に於いて悉く共に推算してその寿命の長遠の数を計れども、窮尽してその限極を知ること能わず」（一、三四）と。これに常の見たところの身の無量と言わんや。知んぬ、これ無量の無量と言わんもそれ可ならんをや。「如来」とは、從來無生はこれ「如」の義、不動にしてしかも至るはこれ「来」の義、「如」の外に「来」なく、「来」の外に「如」なく、寂然不動なるをしかも分かちて「如」と為し「来」と為るなり。これはこれ法身如来なり。また言く、妙理のもとに依りてすなわち智慧を生ず。すなわちその智慧、還りて元理に契う。理智冥合して

【五丁右】

応動の用を示す。故に不二を「如」と名づけ、応現を「来」と名づく。これはこれ応身如来なり。また言く、法の如如智、如如真実の道に乗じて、来りて妙覺を成ず。理に従いては「如」と名づけ、智に従

いては「来」と名づく。これはこれ報身如来なり。実は即体即用なれば、すなわち三身別なし。しばらく体に就き、用に就くときはすなわち三身異を立つ。故に『教行証』第四（本典 証文類）に云く、「弥陀如来は如より来生して、報・応・化の種々の身を示して現じたまうなり」（二、一三三）と。いま集主（親鸞）の帰依するところは、報身如来を指すなり。「帰命」とはこれ

【五丁左】

能帰の至誠を顕すなり。天竺にはこれを「南無」と言う。翻名多種にして義釈はなはだ繁し。いま要をもつてこれを言わば、『起信疏』（起信論疏）に云く、「帰はこれ依投趣向の義、命とは諸根を総御す。一身の要なり。人の重するところ先と為せずと云うことなし。この無二の命を挙げて、もつて無上の尊に奉る。また帰命はこれ還源の義。衆生の六根、一心より起りて自源に背きて六塵に馳趣す。いま命根を

挙げて六情を総摂するものを一心に還帰す」と。前釈は事に就いて、後釈は観に約す。二

【六丁右】

義みなしかりといえども、一旦宗家（善導）に准ぜば前釈を可と為すなり。また、『止観』（摩訶止観）に「慚愧懺悔して命をもつてみずから帰す⁽⁴⁾」と云うもまた通すべきなり。まさしく自宗に准ぜば、『教行証』二（本典 行文類）に帰命を説きて云く、「本願招喚の勅命なり」本書（本典）はまず字訓を出す。しかしてこの釈を作るといえども、実は香象（法蔵）・善導の二大徳の釈にもとづくのみ」（二、三五）と。釈して言わく、いま行者の願心はこれ弥陀の願音、釈迦の教勅に由りて起こる。故に「招喚命」と云う。譬えば鳴鶴、陰に在ればその子これに和するがごとし。ただし、功を本に推してひとえにこれを他力と云う。この他力の心をもつての故に、心常に仏を念じ、

【六丁左】

口常に名を唱え、身常に仏を礼すれば、声声歩歩ただこれ阿弥陀仏にして、他想を間雑することなき者は眼目を勞せずして勝妙の地を見、脚頭を動ぜずして毘盧頂に登る。功力それただ帰命に在るのみ。あに放逸邪見にして空しく機の信施を費やさんや。人世移り易きはなお駒の却まを過ぐるがごとし。殺鬼徒に我がために待たず、すべからく心馬に策て彼岸に登るべし。「不可思議光」とは、またこれ所帰の体なり。名、『如来会』に出たり。謂く、十三の因願に酬いて無量無辺

【七丁右】

光等ありて、実に千万も数の計るところに非ず。かつて言思路絶す。故に不可思議と云うなり。およそ光明多種あり。謂く、自受用身、内、真法界を照らす、これを智光と名づく。他受用身、外、あまねく大衆を照らす、これを身光と名づく。また、常の顯

すところの光、処として放たずと云うことなきは常光これなり。あるいは眉間に放ち、あるいは頂上に於いてし、あるいは口、あるいは齒、あるいは臍、あるいは足の類は放光これなり。いま光と言うは、正意、常に在りて放および身智を兼ね。いまし光の所因にまた二義あり。一にはこれ

【七丁左】

万徳の所成、二にはこれ本願所致なり。問う、仏は万徳を具す。今ただ寿光を挙ぐることはなんぞや。謂く、四義あり。一には摂化為本の義、二には存少摂多の義、三には寂照互用の義、四には依経為本の義。初めに摂化為本の義とは、四十八願みな至要なりといえども、済苦の要、それただこれに必せり。ゆえんいかん、およそ人心の好むところ惡むところあり。謂く、智慧と長寿とは人の常に好むところなり。短命と頑愚とは人の常に惡むところなり。すべてその

【八丁右】

悪むところを祛て、その好むところに就く。故に人これを聞きて、大いに信願を起こして阿弥陀仏に乗じて、口、これをもつてし、身、これをもつてすれば、生滅の短命、覚えずしてすなわち無量寿と成り、邪見の愚魯、知らずしてすなわち大智に転入するなり。あにそれこの二徳をもつて摂化為本と言うことを得ざらんや。宗師（親鸞）、光明壽命をもつて大悲の本と為るこれなり。二に存少摂多の義とは謂く、寿光をもつて功德の多を摂す。阿弥陀仏に無量無辺の功德莊嚴等あれども、みなこの中に摂す。故に

【八丁左】

存少摂多と云う。三には寂照互用の義。謂く、真如の妙理、湛然常寂なるは、これすなわち無量寿なり。弥陀の妙智あまねく十方に至りて、境として照らさずと云うことなきは、すなわち光明の義なり。もし常寂にして智に非ずんば大虚に同じ、もし常照にし

て寂に非ずんば散乱に等し。いま寂に即してしかも照を顕し、照に即してしかも寂を示す。寂照濫ることなし。この義をもつての故に所帰の体と為す。四に依経為本の義とは、『大経』に弥陀の因願に並べて両願を誓う。また『小経』に阿弥陀の名義を説くに

【九丁右】

この二徳をもつてす。故にこれに准じてもつてこれを標す。もし分かちてしかもこれを語るときはすなわちただこれ寿光の両徳、もし統べてこれを言うときはすなわちまたこれ一阿弥陀仏のみ。

法蔵菩薩因位時 在世自在王仏所

「法蔵菩薩」已下は、別して所帰の仏徳を釈す。すでに仏の福智、甚深広大なり。愚夫の倫を輒くもつて知り難し。故に第二門頭に落て、すなわちもつて解釈を加えて、行人をして仏徳を知識して、正信を

生ぜしめんと欲するなり。以下の文の

【九丁左】

拠るところ、『無量寿經』に在り。すでに迹中のはじめ、自在王のところに随いて、まさしく発心修行す。故に「因位、仏所に在り」と云う。およそ人生にしてこれを知る者に非ず、孰かよく惑たふいなけん惑いて師に従わずんば、その惑為ることや。ついに解けじ。古の仏陀、それ人に出でることや遠し。なおかつ師に従いて、しかもこれを学ぶ。今の凡夫、それ仏地を去ることやまた遠し。しかして師に学ばんことを恥づ。ああ、その恥じるところ、これなんとなればして即疾にこれを見て他に譲ることなかれ。「法藏」とは、梵には曇摩訶迦と云う。

【十丁右】

ここにはこれを「法藏」と謂う。解するに二義あり。一には謂く、「法」は所聞の法なり。「藏」は能聞の

心なり。すなわち所聞の法をもつて、よく心に護持して失せざる故に「法藏」と云うなり。二には謂く、「法」はすなわちこれ「藏」なり。心法もとすなわち万有を含藏して、失うことなく窄きことなし。故に法即藏と云うなり。今は前義を要とすべし。「因位時」とは、はじめて色類を脱して、遙かに極樂に向かう。故に「因位時」と云う。「因位」に就いて多種あり。『悲華』（悲華經）『觀仏』（觀仏三昧海經）等に見えたり。「世自在王仏」とは謂く、これ法藏所値の仏なり。旧には

【十丁左】

楼夷亘羅と云う。ここには「世自在王」と謂う。また世饒王と云う。法に於いて自在を得ること、なお世間の王、世に於いて自在を得るがごとし。故に「世自在王」と云う。謂く、その性、業縛を離れて一切の諸法に於いて無碍にして塞ることなきなり。けだし、自在王の力に非ずんば、なんぞ法藏心を開かん

や。また、能発は所発に随う。故に「菩薩仏所に在り」と云うなり。

觀見諸仏淨土因 国土人天之善惡

菩薩すでに国中の善惡を徹見して、これを發

【十二丁右】

願のはじめと為す。あにこれに依るに非ずんば、奚して行じ、奚して得ん。善惡麁妙とは、仏の所現にして、比丘の選ぶところ、すなわち国土の因果を明かすなり。故に淨影（淨影寺慧遠）『大經疏』（無量壽經義疏）に云く、「人天善惡とは、汎く一切諸土の因を弁ず。国土麁妙とは、汎く一切諸土の果を宣ぶ」⁽⁴⁵⁾（取意）と。「觀見」とは、同訓の字なり。異あるのゆえんはなんぞや。謂く、法藏の所見、淨穢あるや。故にこれに對してしかも「觀見」と云う。また、心に就いて昇沈を見、行に就いて麁妙を觀る。故に「見」は近く、「觀」は遠きのみ。「諸仏淨土因」

とは、もし

【十二丁左】

「因」の字、当句に随うときは、すなわち「淨土の因」とは、これ無量の波羅蜜心なり。「国土人天善惡」とは、同居土の中に於いて、すなわち淨穢の混行、これを指して善惡と云うなり。もし下の句に随うときは、すなわち因とは縁なり。心因の義に非ず。これ所見の国土の善惡に因りて、すなわちまさしく弘願を發するなり。もし善惡を見ずんば、ここに正願起こし難し。垢淨善惡すでに分明なるが故に、これに由りて志し願を發す。故に天台（智顗）の『觀經疏』（觀無量壽經疏）に云く、「心に垢淨を分かちて両土の昇沈を見、行に善

【十二丁右】

惡を開きて二方の麁妙を觀る」⁽⁴⁶⁾と。問う、善惡は不二なり。なんぞ現じ、なんぞ選ぶや。答う、仏は不

二の上に於いてすなわちよく淨穢を顯現す。菩薩の意、善惡を見てこれを選ぶといえども、実は善惡不二なり。なんぞそれ小乗の一向惡を捨て善を取るがごとくならんや。故に今の果成の仏国清淨功德莊嚴は、相にしてしかも無相、無相にしてしかも相、事理・無碍・体用、隔てなし。故に元照の云く（阿弥陀經義疏）、「まことにおもんみれば、因中に無相の大願を發して、無住の妙行を修し、無得の聖果を感じず。事を点ずるに妙

【十二丁左】

理なり。相はすなわち相に非ず。故に所感の身土、実相に非ずと云うことなし」と。故にいま「無量寿」と云い、「不可思議光」と嘆ず。もし妙理・妙智に非ずんば、なんぞこの称号を蒙ることを得ん。『經』（小經）に「我がいま阿弥陀仏の不可思議の功徳を讃嘆するがごとく」（一、一〇八）と説くは、深くその実相を嘆じ、もつてその本体を指す。しかるに

輕才諷説の徒は、猥く妙經の文言を読み、その指すところを知らず。故に実に修行すること能わずして、世霧に役役として空しく黃髮を催さば、辺胎受生すらなおそれ難からんをや。

【十三丁右】

建立無上殊勝願 超發希有大弘誓

これは前の見土に因りて、我が妙願を建立すること
を明かすなり。凡夫を濟うに至りては、今願に過ぐ
ることなし。故に「無上」と云い、「殊勝」と言う
なり。また、前にすでに善惡を見て、しかも善惡分
明なり。この心に因りて願を發す。故に「無上願」
と云うなり。また、所見の土の中に於いて、三惡あ
るの麤惡の土を捨てて、三惡なきの善妙の土を取る。
この深心をもつての故に「無上願」と云うなり。因
に法藏發願位を言わば、『經』（大經）に云く、「そ
の心寂靜にして志、

【十三丁左】

所着なく、一切世間によく及ぶ者なし」(一、二三)と。いま文を釈するに二義あり。一には十向満に約す。謂く、見思を断ずるが故に「心寂靜」と云う。更に習氣を断ずるが故に「志無着」と云う。十向位満して四善根の極なるが故に「一切世間無能及者」と云う。二には地上に約す。謂く、見思を断ずるが故に「心寂靜」と云う。重ねて無明を断ずるが故に「志無着」と云う。地位に入りて地前に超えたり。故に「世間無能及者」と云う。諸師、義を取ることおのおの意樂に任す。故に位を判ずることまた不同なり。「超発」とは、

【十四丁右】

地前に超えてこの願を起こし、また超生の願を起こす。故に「超発」と云うなり。「希有」とは、正願はすなわちこれ他の所有に非ず。故に「希有」と云うなり。「大弘誓」とは、摂身摂土摂生これを統ぶ。

【十四丁左】

故に総じては四十八願を指すなり。中に於いて、善惡不二の願を建てて、最も一切凡聖に要たるが故に、別しては十八願を指して「大弘誓」と云うなり。「大」とは、大・多・勝の三義あり。謂く、願すなわち善惡の機に亘るが故に大と云うなり。謂く、数四十八の故に多と云うなり。また、六八にしてしかも

不尽の義あり。故に多と云うなり。謂く、超世願の故に勝と云うなり。広く万機を総るが故に「弘」と云うなり。「誓」とは、約誓なり。自と他とを誓約して志決定す。故に「誓」と云う。ああ、如来藏心、もとより四十八願ありといえども、無始以来、煩惱に纏縛して淨体顕れ難し。しかるに阿弥陀仏、昔、法藏心を開きて、四十八を立ててその果名を成じて、未成の者に向かいて成仏の願を顕す。今すなわちこれに依りて信願を発さずんば、たとえ累世を経るといへども、いずくんぞその妙心を顕さんや。

【十五丁右】

余経、この願ありといえども、今経のごとく委細なるなし。信これ時なり。行者これを思え。

五劫思惟之摂受

事、一旦にして成じ難し。故に具足五劫と云うなり。退子（韓愈）が『進学解』に云く、「行は思に成て随うに毀る」と。いま心ひとえに浄土の行に在り。故に「思惟」と云うなり。ただこの心ありて、他のために乱失せざるをもつての故に「摂受」と云う。「五劫」とは、梵にはつぶさに劫波と云う。ここには時分と云うなり。大劫・中劫

【十五丁左】

小劫あり。八十増減を大劫と云い、二十増減を中劫と云い、一増一減を小劫と云う。今は大劫なり。これを五にす。故に「五劫」と云う。つぶさには『俱舍』等のごとし。また、巨石劫あり、芥子劫あり。

つぶさには『大論』等のごとし。

重誓名声聞十方

六八の外に於いて、重ねて三願を起す。故に「重誓」と云うなり。「名声聞十方」とは、果名をして十方に聞こえしめんと欲す。これひとえに済苦のためにして、全く己がためにするに非ず。問う、名はこれ実の

【十六丁右】

實なり。もし虚名を求めば、なんぞ道を得んや。答う、虚名の求むることなきことを知りて名を設けば、すなわち名よく体を召す。なんぞひとえにこれを非せんや。すなわちいま仏の誓願は、己を忘れて衆生のために無我にして我を建て、無名にして名を設く。的底それなんぞ名実を論ぜんや。莊周（莊子）が実と云うは、なおこれ虚名なり。仏はこれ名実ともに遣り了れり。しかりといえども、物のために名を仮

りて、群機を引くことはこれ仏の善巧なり。なんぞ不然と為さんや。けだし、上來よりここに至るの意は謂く、はじめ二徳に歸し、還りてその徳を積すとして

【十六丁左】

因位の相を明かす。中にまず、仏に値いて土を見、次に土を見て願を起こす。後に五劫を経て行を摂受して、因行その願を満す。願満の名を弥陀と号す。この名、寿光の両徳を統ぶ。しかるに菩薩、すでに因中に於いてその名をして、十方に聞かしめんと願ず。故に三誓の終願を引きて、因位の相を結するなり。

普放無量無辺光
無礙無对光炎王
清浄歡喜智慧光
不斷難思無称光

超日月光

【十七丁右】

照塵刹

一切群生蒙光照

この三行六句は、『大經』に依りて十二光徳を挙げて、意、不可思議光を嘆ずなり。中に於いて、初の四句半は、あまねく十二光を放つことを示す。次の半句は、所照の境の多きことを明かす。後の一句は、その利益を明かす。「普放」の二字、解するに二義あり。一には謂く、放光一にあらず。故に「普放」と云う、次に「無量無辺」等と云うが故に。二には謂く、照境広多の故に

【十七丁左】

「普」と云うなり、下に「塵刹」と云うが故に。「無量」とは、仏光長として限量なきが故に。「無辺」とは、この仏の光明は処として遍せざることなきが

故に。また、二辺の患えを離れて、光、限際なきが故に。「無碍」とは、一切の物に於いて碍なきこと空のごとくなる故に。「無対」とは、余仏の光明は所対に非ざるが故に。「炎王光」とは、仏光あまねく照曜すること炎曜のごとく第一なるが故に。「清浄光」とは、仏光よく垢塵を離れ、また、この光に遇う者はよく三垢を滅するが故に。「歓喜光」とは、みずから無瞋の徳あり。よく衆

【十八丁右】

生の瞋を転ずるが故に。「智慧光」とは、仏智明了にして、よく無明の闇を破するが故に。「不斷光」とは、仏光常明にして、時として照らさずと云うことなきが故に。「難思光」とは、その光、仏を除きて測り知る者なきが故に。「無称光」とは、余乗等の堪えて説くところに非ざるが故に。「超日月光」とは、日月光、碍あるには同ぜざるが故に。いま弥陀仏、この異光を放つことは、因地に於いて永劫に

これを修して、すでに法藏心、無明の縛を出でるが故に。今の放つところは、これその智用なるが故に、十二光と言うといえども、しかも不尽の光を含む。

【十八丁左】

ここをもつて、千光万光億無量光を体にして、ただ十二と言う。故に不可思議光なり。また、十二の一を挙ぐるに、一一みな無量の一にして止むべからざるのみ。「照塵刹」とは、これ十二光の照らすところの器界の多きことを言うなり。『名義集』（翻訳名義集）に云く、「梵語にはつぶさに刹摩と云う。華には土田と云う」⁽⁴⁸⁾（取意）と。すなわち国土なり。謂く、一仏所化の境、大千世界をもつて一刹と為すなり。法華のごとく、東を照らすときはすなわち余方を説かず、万八千なるときは余国を該ねず。義おのおの取ることあり。

【十九丁右】

いま「塵刹」と言うは、十方国土、照らさずと云うことなし。日、光ありといえども、闇浮明なるときはすなわち単越礙げる、瞿耶明なるときはすなわち弗于礙げる。いま、山を徹し壁を透し、幽に通じ明に達して、よく遮障して光をして隠没せしむることなく、よく隔礙して光をして断絶せしむることなし。故に『大經』に「最尊第一なり。諸仏の光明、及ぶこと能わざるところなり」（一、三三）と云う。問う、仏の光明あまねく塵刹を照らさば、人民なんぞ現にこれを見ざるや。答う、道・相合うときはすなわち千里咫尺、心あい背くときはすなわち肝胆楚越す。譬えば医者之の瞶

【十九丁左】

光を見ざるは、これ曦光の光なきには非ざるがごとし。また、聾者の雷震を聆らざるは、これ雷震の声なきには非ざるがごとし。仏に光明ありて法界を照らすとも、衆生、罪愆ありて見ず。故に碍はこれ機

に在りて、すなわちこれ仏になし。「一切群生蒙光照」とは、光よく十方を照らす。故に光照を蒙らざる者なし。光照を蒙るをもつての故に、信を起こして念仏す。信念をもつての故に、三苦消滅して善心ここに生じて、かの仏国に往きて樂を受くること無間なり。『觀經』に「光明は、あまねく十方世界を照らし、念仏の衆生を攝取して

【二十丁右】

捨てたまわす」（一、八七）と云うも、ひとえにこの光益を明かすなり。いましこの法を信する者に於いて、誰があにこの光益に預らざらんや。「一切」とは、「切」は衆なり。謂く、一もつて万を成じ、万もつて一に歸し、衆物を総蔵する。これを「一切」と云うなり。また、その類多きに随いて「一切」と云うなり。あるが云く、「一切」は大凡なり。『群生』とは、無明煩惱に依りて衆多の生を受くるが故に。また、他縁和合してしかも生ずるが故なり。つぶさ

には、四種・十種の衆生ありとなり。

本願名号正定業

【二十丁左】

至心信樂願為因

成等覺証大涅槃

必至滅度願成就

上にはすでに光徳を積す。今は利生の次てを示す。謂く、行に就いて信を立て、信に依りて果を得、および証由を判ず。行信証と言うもまたこの次てなり。まさしく文を積するに二つ。一には総じて文を解するに二義あり。一には謂く、「本願名号」をもつて「正定之業」と為して、その名号を信解するを「至心信樂」と為す。これ報土の真因なり。

【二十丁右】

その信にみずから行を具す。信行具足するをもつて

の故に大涅槃の果を得。いまし名号は信因を生じ、また信因は行業を成す。また、行業成はすなわち信願成なり。もし名号これ正業なりといえども、よく信解せずんば正業の名号、生因と成らず。もし正業の名号なくんば、何に由りてか信解を起こさんや。故によく名号を信得するときは、すなわち信心の外名号なく、また名号の外信心なし。よくこれを心にして、心をもつてこれを口にすれば、名号・信心一にして、しかも異ならず。両願全くこれ一なり。

【二十丁左】

二には上に光明の徳を積す。その光明と今の名号とを縁と為して、信心を起こして般槃の果を得。『教行証』二（本典 行文類）に云く、「まことに知んぬ、徳号の慈父なくんば能生の因闕けなん。光明の悲母なくんば所生の縁乖きなん。能所の因縁和合すべしといえども、信心の業識に非ずんば光明土に到ることなし。真实信の業識は、これすなわち内因と為す。

光明名の父母、これすなわち外縁と為す。内外の因縁和合して報土の真身を得証す」(二、四九)と。この文勢をもつて前後に況合して、人をして脉絡骨

【二十二丁右】

鎖を知らしめんと欲す。しかれども、当段の所用に於いては、必ず初義をもつて要と為するのみ。問う、正業と云い、信因と云うは何の別ぞや。謂く、正業は外を主として信を引き、信因は内を主として行を引く。故に業と云い、因と云うなり。また、法に約し機に約して云う。また、あまねく外に約し内に約して言う。もし名号・信心あい離れざるときは、すなわち正業・信因全くこれ不二なり。およそ信あり行あれば必ず証果を得。故に次に大涅槃の果を明かすなり。もし行ありて願なくんば、その行必ず孤なり。願ありて行なくんば、その願必ず虚なり。行願

【二十二丁左】

双べ資けてまさに宝池に登る。毎に今時念仏の人を見るに、あるいは病苦のためにしかも発心し、あるいは報親のためにしかも念を挙げ、あるいは家宅を保扶せんがためにし、あるいは命を増延せんがためにす。これらに依りて願を起こすが故に、願すでに真に非ざれば、果、必ず妄を招く。たとえ一生修習するとも、すべてこれ工夫を錯り用う。命終の際、あによく往生せんや。その所願非ざるをもつての故なり。想うにそれ、念仏の者は必ず正願を発す。正願とは、人天の福報を願うに非ず。権乗の小果を願うに非ず。我一人

【二十三丁右】

浄土に往生して、菩提を得証することを願うのみに非ず。いましこれ、みずから信じ人を教えて信ぜしめて、共に浄土に生ぜんと期するは、真に大悲伝る者にして仏の真種を成ずるなり。二に別して文を釈せば、「本願名号」とは、巨名はこれ一旦にして得

るところに非ず。いまし宿願に酬いて、しかもこの果号を成ず。故に「本願名号」と云う。益、信を成じてかしこに生ずるが故に「正定業」と云うなり。「正定」とは、かの地に至りて正性決定して、更に悪趣に生ぜず。故にかの地の所得をすなわち正定と云い、また不退と云う。西土には阿毘跋

【二十三丁左】

致と云うなり。いま不退を釈するに二あり。一には不退の不同を釈す。二にはかしこに至りて不退を得るの縁を釈す。一に不退不同とは、『起信疏』（大乘起信論義記）に云く、「一には、蓮華未だ開せざるときのごとし。信行未だ満せざれば、未だ不退と名づかず。ただ、処、退縁なきをもつての故に不退と称す。二には、信位満足。已去、華開け仏を見て、十住の位に入りて、少分、法身を見ることを得て、正定位に住するなり。三には三賢位満。初住（地）⁽⁴⁹⁾に入る。以去、遍滿法身を証するを不退と名づく」と。

また、『妙宗鈔』（觀無量寿仏経疏妙宗鈔）に云く、「不退に三あり。

【二十四丁右】

もし見思を破するを位不退と名づく。すなわち永く超凡の位を失せず。塵沙を伏断するを行不退と名づく。すなわち永く菩薩の行を失せず。もし無明を破するを念不退と名づく。すなわち永く中道正念を失せず⁽⁵⁰⁾（取意）と。すでにかの国は大乘善根の界、処はこれ不退なり。故にかしこに生ずる者は、はじめは凡位なれども、ついに勝縁を得て仏道を成ず。故に『大経』に法蔵の願に云く、「不住正定必至滅度者不取正覺」（一、二五）と。すでにかの国土の所得の不退は、これ位行念に非ず。まさしく処不退を指す。故に

【二十四丁左】

『略記』（阿弥陀経略記）に云く、「阿毘跋致はこれ

処不退なり」(取意)と。二にかしこに至りて不退を得るの縁とは、天台(智顗)の云く(浄土十疑論)、「五因縁あり。故に不退を得。一には弥陀大悲願力摂持するが故に不退なり」と。いま釈して謂く、『大阿弥陀』(大阿弥陀經)の法藏の願に云く、「我が名号を聞きて帰依精進なれば、すなわち第一忍第二忍第三忍を得て、諸仏の法に於いて永く退転せず」と。譬えば、巨航に乗ずることを得れば沈溺せざるがごとし。「二には仏光常に照らすが故に菩提心増進して不退なり」(浄土十疑論)と。釈して謂く、『大阿弥陀』(大阿弥陀經)に言うがごとし。

【二十五丁右】

仏を念ずれば、この仏、光明を放ちこの人を摂受す。譬えば日月、闇途を照せば墮転墮ちざるがごとし。「三には水鳥樹林風声楽響みな苦空を説く。聞く者、常に仏法僧を念ずるの心を起こす。故に不退なり」(浄土十疑論)と。これ境縁の勝るが故なり。「四には

純諸菩薩もつて勝友と為して、外に魔邪なく内に煩惱なきが故に不退なり」(浄土十疑論)と。いま釈して謂く、『小経』に言うがごとし。もろもの上善人と同じく一処に会す。譬えば梅檀の林に入れば、身みずから香しきがごとし。「五には寿命永く仏と斉等なり」(浄土十疑論)と。いま釈して謂く、『経』(小経)に言うがごとし。

【二十五丁左】

仏および人民、寿命無辺なり。譬えば万里の途を渉るには、仮るに長日にして、ついに宝所に至るべきがごとし。また、『通贊』(阿弥陀經通贊疏)には十勝を挙げ、『群疑』(釈浄土群疑論)には三十益を明かす。勝縁すでにこれ多し。不退を得ること最もしかなり。「至心信樂願」とは、これ第十八願なり。願名すでに一に非ず。今は現文に随いて言う。「至心」とは、真実心なり。「至」は不遷の貌、「真実」とは、虚偽を揀ぶ。謂く、仏を念ずる心、虚偽ならず、遷

転せず。故に「至心」と云う。心もし遷転虚仮せばこれ妄心にして真実に非ず。「信樂」とは、

【二十六丁右】

深心なり。「信」は忍受決定なり。「樂」は欣慕して厭うことなし。謂く、念仏の法を忍受して、決定して疑なく違ふことなく、なお欣慕して厭足することなし。故に唯識の『自攷録』(成唯識論自攷)に云く、「忍は謂く、忍受なり。随順印可してしかも違逆なし。樂は謂く、欣慕なり。好尚にして厭足なし」(取意)と。問う、実心を発得することは、身子第六住を証するすらなお菩提の行業に退す。断惑の証者に非ざるよりは真実心を具し難し。具縛の凡夫、なんぞ実心を発得せんや。答う、二義あり。一には仏に約する義。謂く、仏の因

【二十六丁左】

位の願行、真実にしてこの果徳を成ず。故にその真

実をもつて衆生に施回する。本願真実の深心なり。この回向をもつてかの真願に帰するの心なるが故に真実心と云い、回向と云う。およそ当家に於いて真実と云い、深心と云い、回向と云うは、しばらく仏徳に約して言う。二には機に約する義。謂く、凡夫生得の実心をもつて、仏願の真実を信じて、虚偽なきを真実と云う。もしは仏徳に約し、もしは信機に約して、あに実心を発得すと言わざらんや。けだし、一往に随いて二義あり。再往、

【二十七丁右】

これを論ずれば、機法不二なり。なんぞ二義存らん。ただこれ一にして、しかも二の故によく機法を論ず。異にして一なる故にまた互融義あり。また、經の三心をもつて『起信』(大乘起信論)の三心に況して、しかもこれを言わば、すなわち行者虚妄なく、更に流遷なく、弥陀に随順するは、『起信』(大乘起信論)に「真心にまさしく真如を念ず」⁽⁶³⁾と云うに同じ。ま

た、行者、疑なく深心にして、恒によく万善の名号を称するは、『起信』（大乘起信論）に「深心に樂て一切のもろもろの善行を集む⁶⁴」と云うに同じ。また、行者、彼此を融するは、『起信』（大乘起信論）に「大悲心をもつて一切

【二十七丁左】

衆生の苦を拔せんと欲す⁶⁵」と云うに同じ。また、世親所立の三心をもつて經の三心に況して、しかもこれを言わば、一に眞實にして虚仮なきはこれ『論』（浄土論）の清浄心なり。⁶⁶二に深心にして疑なきはこれ安清浄心なり。⁶⁷三に一心、慈、具足せずと云うことなきは『論』（浄土論）の樂清浄心なり。⁶⁸すでに『大經』・『觀經』の三心、約してしかもこれを言わば、ただこれ行者の一心なり。故に『小經』に「一心」（一、一〇八）と云う。論主（天親）またしかなり。宗師（親鸞）の云く（本典 信文類）、「いま三心の字訓を按ずるに、眞實心にして虚仮雜わることなく、正

直心にして邪偽雜わることなく、眞知にして、疑蓋

【二十八丁右】

間雜することなし。故にこれを信樂と名づく。信樂はすなわちこれ一心なり。一心はすなわちこれ眞實信心なり。この故に論主（天親）、建めに一心と言ふなり」（二、八〇）と。「成等覺証大涅槃」とは、これは所得の果を示すなり。「等覺」とは、妙覺に望みて一等の無明ありて、覺、未だ滿せず。故に「等覺」と云う。この無明は、もし流轉のはじめには元初の一念と名づけ、もし滅滅のおわりには元本の無明と名づく。しかるに、等覺の後身に於いて金剛喻定に入りて、この無明を尽くしてまさしく覺滿を得るが故に、「成等覺証」等と云う。「大涅槃

【二十八丁左】

槃」とは、西土につぶさには摩訶槃涅槃と云う。ここには大滅度と云う。大はすなわちこれ法身、滅

はすなわち解脱、度はすなわち般若なり。『大経』(涅槃經)に云く、「涅槃の言は不生、槃の言は不滅、不生不滅を大涅槃と名づく」(取意)と。『楞伽』(楞伽經)に云く、「我が所説は、妄想識滅を名づけて涅槃と為す」⁽⁷¹⁾と。肇師(僧肇)の『涅槃論』(肇論)に云く、「秦には無為と言う。また滅度と名づく。無為とは、その虚無寂寞、妙に有為を絶するを取る。滅度とは、その大患永く滅して、四流を超度するを言う。これけだし鏡像の所帰

【二十九丁右】

称謂を絶するの幽宅なり」⁽⁷²⁾と。法華・金剛みな滅度と云う。然るに三蔵は円寂と翻す。賢首(法蔵)、釈して云く(般若波羅蜜多心経略疏)、「徳備えずと云うことなきを円と称し、障り尽くさずと云うことなきを寂と称す」⁽⁷³⁾と。また、「大」と言うは、小を揀びて「大」と云う。謂く、かれは悲智あい兼ねず。その心これ狭小なり。故にまさしく揀びて「大」と

云うなり。問う、凡夫かしこに到りて速疾に等覺を成じて、最後品を断じて妙覺を証するや。答う、これは本願の利益の次を述して未だ速疾の義を言わず。ただ具惑の常人、信仏の因縁をもつてすなわち不退の土に到れば、必ず

【二十九丁左】

三界に流転して生を受くることなきが故に、ついに畢竟成仏の果を得ることを取る。問う、「成等覺」等の一句は、見るに異訳の經に出でたり。なんぞ今經を写さざるや。謂く、文相少異にして、義趣、味あるが故なり。「必至」の下は、その証を出す。これ十一の願なり。いまし信ずといえども、また行ずといえども、もしそれ所至なくんば、信行これ徒然なり。今すでに証果空しからず。故に別してその証を出すなり。証果の功、ひとえにこの願成に依る。故に「願成就」と云うなり。

如来所以興出世
唯說弥陀本願海

【三十丁右】

五濁惡時群生海
応信如来如実言

初の一行は、『大經』に准じて仏出するゆえんを明かす。次の一行は、みずから当機に対して信受を勧む。けだし、この經と他經とを考へて、仏出の素懷を明かすに、いまし三義あり。一には他經を會してこの經に歸する義。二には彼此各立の義。三には彼此互攝の義。一に他經を會してこの經に歸する義とは、まず、今經に依りて他經を會せば、『大經』に准ずるに、はじめ菩薩の權徳に托して、すなわち己が八相を顯示することは謂く、これは諸經の會

【三十丁左】

時すでにおわりて、独りこれがために世に出でること

とを標す。のちにこの真実のために、世に興出することを説くことは謂く、これは念仏をもつてしかも真実と名づけて、その素懷と為す。故に諸經の中に多く念仏を説くとも、しかもこの經を説くに至りては、前後に於いて説くところの念仏の功能は、それただ今經に歸す。次に、他經を引きて今經に會せば、『行願品』（華嚴經 普賢行願品）に云く、「臨命終の時、ただこの願王あい捨離せず。一切の時に於いてその前に引導して、一刹那の中にすなわち極樂世界に往生することを得」と。いまし知んぬ、普賢菩薩は専ら

【三十一丁右】

念仏を教へて、すなわち己が行願、ついに西方に歸趣す。『大本』（大經）に准ずるに、菩薩衆の中に普賢をもつてその首めに列ねて、十六大士をしてみなこれに遵わしむることは、これ今經（大經）の上首にして、弥陀の行願を主ることを標す。故にはじめ

華嚴に在りて、すなわち念仏門を教うるは、のちにこの經（大經）を説く、これその先兆なり。故に華嚴（華嚴經）の念仏、ついにこの經（大經）に歸す。故に古德（元照）の云く、「普賢の十大願、ついに淨土に歸す」⁽⁷⁵⁾（取意）と。ここに知んぬ、淨土の教觀は、円頓上乘畢竟所歸のところなり。また、法華に拠るに、「藥王本地〔事〕品」（法華經 藥王菩薩本事品）に云く、

【三十一丁左】

「如來滅後にもし女人ありて、この經典を聞きて説のごとく修行して、これに於いて命終せばすなわち安樂世界に往きて、阿彌陀仏・大菩薩衆に圍繞せられて、住処は蓮華の中に生ず」⁽⁷⁶⁾（取意）と。また、「普門品」（法華經 觀世音菩薩普門品）に准ぜば、一心称名の功德および応機説法の利益を説く。その觀世音はこれ因位の相、この阿彌陀はこれ果位の徳なり。因は必ず果に歸すれば、觀音の利益、ひとえに

この經に趣く。いまし、「本地〔事〕品」（法華經 藥王菩薩本事品）の妙法修行の功、ついに極樂に歸す。故に両經に演べるところの念仏の

【三十二丁右】

徳、ついにもつてこれに歸す。故に慈雲（遵式）の云く（往生淨土決疑行願二門）、「法華の妙部は如來親しく往生を記し、華嚴の極談は普賢みずから回向を陳べる」⁽⁷⁷⁾と。また『楞嚴』五（首楞嚴經）に云く、「我、往昔恒河沙劫憶うに、仏ありて出世す。無量光と名づく。十二の如來、あい繼ぎて一劫なり。その最後の仏を超日月光と名づく。かの仏、我に念仏三昧を教う。乃至 我もと因地にして、念仏の心をもつて無生忍に入る。いま此界に於いて、念仏の人を摂して淨土に歸しむ」⁽⁷⁸⁾と。いま『大本』（大經）に准ずるに、十二の如來とは彌陀所

【三十二丁左】

具の十二光なり。⁽⁷⁾『觀經』に依るに云く、「無量寿仏、空中に住立す。觀世音・大勢至、この二大士、左右に侍立す」(一、八四)と。また云く(觀經)、「無量寿仏、分身の觀世音・大勢至、みな悉く雲のごとく極樂国土に集まりて、空中に側塞して蓮華座に坐して、妙法を演説して苦の衆生を度す」(一、九〇)と。また云く(觀經)、「無量寿仏の化身無数なり。觀世音・大勢至と常にこの行人のところに來至す」(一、九一)と。ここに知んぬ、勢至菩薩、弥陀に依りてその徳を成じて、ある時はかの空中に立ちて

【三十三丁右】

弥陀の脇士と為り、ある時は華座に坐して妙法を説きて衆生を度して仏化を輔け、ある時は常に行人を守護して捨つることなし。故にかの功の趣くところ、それただこれに在るのみ。しかのみならず、諸經の中に往生に願生淨土を説くとも、都会するところ今經に在り。これ念仏往生を説くこと、これより委細

なるなきが故に。また、独りこの經のために八相を示現する義あるが故に、しばらく当機に隨いてこれをもつて極と為して、独り出世の素懷を募る。二に彼此各立の義とは、法華・今經おのおの宗義を立つ。かれ(法華經)は

【三十三丁左】

三權すなわち一実なりと会するをもつて素懷と為す。これ(大經)は五乗をして齊しく念仏に会して、菩提の果を成ぜしむるを本懷と為す。問いて曰く、当教の中に於いて、三乗をもつて念仏に会するの義ありや。答う、『大經』に云く、「即時に無量寿仏、大光明を放ちてあまねく一切諸仏世界を照らすに、金剛圍山、須弥山王、大小の諸山、一切諸有みな同じく一色なることは、譬えば劫水、世界に弥漫すればそのなかの万物、沈没して現せず、混濇浩汗としてただ大水を見るがごとし。かの仏の

【三十四丁右】

光明もまたまたかくのごとし。声聞・菩薩、一切の光明みな悉く隠蔽して、ただ仏光の明曜顕赫たるを見る」(一、六五)と。釈して謂く、「金剛山・須弥山」とは菩薩二乗を標す。「大小諸山」とは大小の諸位を標す。「皆同一色」とは、譬えの中には「唯見大水」と云い、合の中には「二乗・菩薩、一切の光明みな隠れて、ただ仏光の明曜顕赫たるを見る」と云う。これ三乗の諸位をして悉くみな念仏の一光に会せしむることを標す。しかのみならず、法蔵みずから誓いて十方往生を願ず。何れの機がそれ漏れんや。

【三十四丁左】

下の文には(本典 正信偈)、「凡聖逆謗斉回入」と云う。すでに五乗の輩、すなわち念仏に会すれば、功夫を勞せずして己が真体を顕し、断惑を論ぜずして清涼地に臻る。けだし、互いに仏出の素懷を立つ

るが故に彼此各立と云う。三に彼此互摂の義とは、あるいはかれにこれを摂せば、法界実相を離れて淨土の依正を見ることなく、あるいはこれにかれを摂せば、弥陀の依正を離れて法界実相を見ることなし。一にしてしかも二の故に、互いに差別を論ず。二にしてしかも一の故に互摂と云う。しばらく機に随いて一異あり。まさしく

【三十五丁右】

仏に望みては異一なし。「如来所以」と言うは謂く、釈迦この經を説くを「所以」と為すなり。「興出世」とは、信と不信とに約してこれを釈せば、もし不信不行の者に於いては、弥陀の誓願なお未だ成就せざるがごとし。また、釈迦出世すれども不出世に同じ。もし信願行の者に於いては、両仏すなわちその処に出でて正覺を成じ、常に妙法を説くがごとし。故に『智度論』(大智度論)に云く、「何れのところにか三宝の名字ある。ただ無生の旨を了れば、自然に一

体、三宝常に世間に現す。もし差別の名を取らば、

【三十五丁左】

すなわち真常の理を失す。ただ一切の法自性なしとすれば、すなわち一切処、仏出世するのみ」と。⁽⁸⁰⁾「唯説」等とは、まさしく当機に約して余法を揀ぶ。故に「唯説弥陀」等と云う。また、念仏の法門は智慧を簡ばず、豪賤を言わず、遠近を論ぜず、善惡を問わず、ただ淨信を取りて念々相續すればみな悉く往生す。いましこの因、微して功高し。釈迦、これを説きて万機を化す。仏心、これに在り。故に「唯説弥陀」と言えること、実にしかなり。学者、公心にして与に試に評量せよ。「海」とは、

【三十六丁右】

念仏の功德をもって大海に喩う。解するに四あり。一にはかの永く百非を絶するは、海の甚深なるがごとし。二にはかれ万物を包むるは、海の広大なるが

ごとし。三にはかれ徳として備えずと云うことなきは、海の珍宝のごとし。四にはかれ像として現ぜざることなきは、海の影を現するがごとし。前の二は体に喩え、後の二は相に喩え、体はすなわち豎に深くしてしかも横に広し、相はすなわち徳を具して法を現す。この四義を挙げ用いるに理として尽さずと云うことなく、徳として備わらずと云うことなきのみ。「五濁」等とは、「濁」はこれ滓穢の義、食の滓穢のごとし。下惡の汚るべき、これを名づけて「濁」と為す。衆濁を分かちて

【三十六丁左】

五と為す。故に「五濁」と云うなり。一に劫濁と云うは、いまし別体なし。下の四濁に由りてもつて名を得。この劫分に衆濁交湊して昏亂駁雜す。故に如来の実言に順じてすなわち往生を願じて、しかも淨土に生ずれば、変えりて極樂國中の阿弥陀仏現在説法を顕す。しかればすなわち、清淨の時にして劫濁

に非ず。ああ、今日我が輩、なんぞ劫濁の世に安処してかの国に生ずることを求めざるや。故に濁世の衆生をして如実言を勧めしむ。二に見濁とは、身見・辺見・戒取・見

【三十七丁右】

取・邪見、この五利を体と為す 二に身見とは謂く、我我所を執じて我見の見を起こす。二に辺見とは謂く、断を執じ常を執じて、中道を失して辺傍の見を起こす。三に戒取とは謂く、非因を因と計してもろもろの苦行を修して、取著してよく戒を持つの見を起こす。四に見取とは謂く、龜を執して勝と為す。五に邪見とは謂く、豁達空に墮して因果を撥無して、邪外不正の見を起こす。この五の者、よく衆生をして生死に趣入せしむ。故に名づけて使と為す。五鈍に対するが故に利使と名づく。この諸見なお羅網のごとし、なお稠林のごとし。纏縛屈曲して出離すべからずして、真性を渾乱するが故に「濁」と云う。

いま念仏を信じてかの国土に生ずれば、返りて正見を具して見濁に非ざることを顯す。

【三十七丁左】

故にこの法を勧む。三に煩惱濁と云うは、貪瞋痴慢疑の五鈍使を体と為す 二に貪とは謂く、順情の境に遇い愛着を起こして捨離せざるが故に。二に瞋とは謂く、違情の境に遇い悲恨を起こして容忍すること能わざるが故に。三に痴とは謂く、非違順の境に於いて愚暗を起こして覺察すること能わざるが故に。四に慢とは謂く、一切衆生に於いて驕傲の心を起こして上陵ぎ下忽めて恭遜すること能わざるが故に。五に疑とは謂く、もろもろの善法に於いて猜貳心を起こして進まんと欲し退かんと欲して決定すること能わざるが故に。この五の者、またよく人をして生死に趣入せしむるが故に、名づけて使と曰う。前に較にやや重滞と為す。故に鈍使と名づく。今ましく仏を信じてかの国中に生ずれば、返りて智慧を

具して煩惱濁に非ざることを顯すが故に。四に衆生濁と云うは、

【三十八丁右】

見慢の果報を攬るを体と為す。前の所作の因、いま果報を受く。しかるに今まさしく仏を信じて極樂界中に生じて、返りてもろもろの聖衆に会すれば衆生濁に非ざることを顯すが故に。五に命濁と云うは、第八識種外色内心、互いにあい連属して、すなわち息・煖・識の三つあい持ち散せず。これを命根と為す。一たび命根を連持せざれば、すなわち連持の色心を斷散するを体と為す。しかるに滅劫にあたりて、百年を満たずして泡沫風灯のごとく、刹那も住せず最も短促と為す。故に「濁」と云うなり。また、五濁をもつて五

【三十八丁左】

陰三細六塵に配せば、劫濁をもつて色陰に配す。謂

く、空見分かつたずして妄りに空を見ながら、その実性なきを渾濁と為するが故に。次に見濁をもつて受陰に配す。次に煩惱濁をもつて想陰に配す。次に衆生濁をもつて行陰に配す。次に命濁をもつて識陰に配す。三細等に配すとは、劫濁をもつては業相に配す。謂く、無明はじめ起こりて、性、渾濁に遂うが故に。次に見濁をもつて転相現相に配す。次に煩惱濁をもつて智相相續執取計名字相に配す。次に衆生濁をもつて

【三十九丁右】

造業相に配す。次に命濁をもつて業繫苦相に配するのみ。「惡時」とは、この時に至りて十惡を造るが故に「惡時」と云う。『觀經』には「濁惡不善」（一、八一）と云う。「群生海」とは、一切衆生無始よりこのかた生死に流転して輪環無際なるを大海の広大にして辺際なきに喩う。「応信」等とは、まさしく信を勧む。謂く、時、惡世におよんで、みずから諸

縁を止めて一時坐忘して、証果を得ること希れなるが故に、如来如実の念仏を勧む。所説、実に非ずんば言わじ。それ実をもつての故にこれを勧む。いま拠るところの文、

【三十九丁左】

『如来会』に見えたり。『經』（如来会）に云く、「我が教の如実の言を信ずべし」（一、三三七）と。「如実言」とは、念仏の法を指す。謂く、念仏の法門は不変の故に「如」と云う。理に契うが故に「実」と云う。今この所説は、千聖また起これども易かること能わざるは、因果決定し審諦不虛の故なり。つぶさに五語あり『金剛經』等に出でたり。「応信」とは、「信」に二門あり。一にはその理を信じ、二にはその事を信ず。その理を信ずとは、我心すなわちこれ浄土、我性すなわちこれ弥陀なりと信ずるなり。その事を信ずとは、西方は果に浄土あり、果に弥陀ありと信ずるなり。

【四十丁右】

その理ありといえども、理を全うじて事を成ず。海印のよく万象を現するがごとし。その事ありといえども、事を全うじてこれ理なれば、万象の海印離れざるがごとし。いま当家の意は、かつて行者の理事の分を機知するに非ず。ただよく心を仏地に樹て、常によく念を法界に流せば、覺えずして真如の門に転入す。全く事即理、一步を動ぜずしてそれこれを得るのみ。

能発一念喜愛心
不断煩惱得涅槃

【四十丁左】

凡聖逆謗齊回入
如衆水入海一味

前は義を得て信を勧む。これは能発心を挙げて利益を示す。初の句は、異訳の經に依る。『如来会』に

云く、「もしかの仏名を聞きて、よく一念喜愛の心を生ず」（一、三三四）と。また『莊嚴經』に云く、「一念の信心を發して歸依瞻礼す」（一、三七九）と。「能發」とは、所發に対して言う。「發」はこれ起なり。今この能求の善心は、迷心自力に依りて起るに非ず。如來の淨心に依りて起るが故に

【四十二丁右】

「能發」と云う。「一念」とは、邪念・雜念なく、正心・專心の故に「一念」と云う。これまさしき安心なり。もし異念・昏念はこれ自力の妄心にして、しかも仏心には非ざるなり。また、「一念」は時節の極速を指す。故に「文類」三（本典 信文類）に云く、「一念とはこれは信樂開發の時剋の極促を顯す」（二、九三）と。また「一念とは信心無二の心なるが故にこれを一心と名づく」（二、九四）と。一心はすなわち清淨報土の真因なり。「喜愛」とは、適悦、内に在りて未だ身におよばざるを「喜」と云うなり。

忻慕して厭うことなきを「愛」と云うなり。重ねてこれを言わば、

【四十二丁左】

すなわち忍欲清淨にして專心不動なるはこれ信の体なり。しかして念心歷然として虧くることなきはこれ信の相なり。念心不忘にして称礼等を起こすはこれ信の用なり。また、「一念」を体にして「喜愛」あり。「喜愛」に依るが故にますます信を成ず。また、「一念」全くこれ「喜愛」なれば、すなわち体の外に「喜愛」なく、「喜愛」全くこれ「一念」なれば、すなわち相・用の外に体なく、体用相即すれば「念」「愛」別なく、体用互起すれば「念」「愛」歷然たり。また、信心を指してしかも「喜愛」と云う。また、「一念」と云う。ここをもつて引くところの文に、あるいは

【四十二丁右】

「一念喜愛の心を生ず」と云い、あるいは「一念の信心を発す」と云い、あるいは「一念とは信心無二の心なり」と云う。「不断」の下はこれ利益を明かす。この言、もと『維摩』（維摩經）に出でたり。かの「方便品」に云く、「煩惱を断ぜずしてしかも涅槃に入る」と。また鸞師（曇鸞）の云く（論註）、「凡夫人、煩惱成就するあれども、またかの浄土に生ずることを得れば、三界の繋業、畢竟じて牽かれざれば、すなわちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得」（一、四九五）と。ただし、『註論』（論註）には「分」と云う。今すなわちこれを略することは謂く、初生に約せば『註論』（論註）のごとし。終尽に約せば今の文のごとし。学者

【四十二丁左】

文に臨むときは、すなわち互いに存してしかなり。「不断煩惱」等と云うは、いま解するに二義あり。一には謂く、煩惱すなわち涅槃なるが故に、断を待ちて

のち入らず。もし必ず泥洹をもつて貴と為す。しかしてこれを取らんと欲せば、すなわちまた泥洹のために縛せらる。もし煩惱を断じて、すなわちこれ泥洹に入らざる者は、これすなわち泥洹、煩惱に異ることを見ざれば、すなわち縛なし。知んぬ、これ煩惱菩提体無二なりと体するが故なり。二には謂く、能発心の者は、まさしく機法不二なりと信じて、時々名号を唱うれば、相これ凡夫なりといえども体これ一

【四十三丁右】

味の故に、相を全うじて体に融すれば、これがために牽かれず。故に涅槃を得。相これ凡夫の故に「不断」と云う。二義の中に、初解は機解に約して云う。次の解は他力に約して当家の意を釈す。「凡聖」下は、所被の機を挙げて齊入を示す。まさしくその功を論ずるときは、すなわちただこれ一念にあり。「凡」とは、これ常なり。五欲の境に住着する無安の常人

なり。故に常と云うなり。『弥勒問経論』（弥勒菩薩所問経論）に云く、「聖人の法を遠離して、身見等に染着し、五欲に住して生を資るが故に凡夫と名づく」と。『翻訳名義集』二に云く、

【四十三丁左】

「波羅、隋には毛道と言う。謂く、行必〔心〕不定なることは、なお輕毛の風に隨いて東西するがごとし。応法師（玄庇）の云く（玄庇音義）、梵語には罽羅、ここには毛と云う。波羅、ここには愚と云う。梵音あい近し。訳人、謬りを致す。正しくは波羅必栗託佉那と言う。ここには愚異生と翻ず。愚痴闇冥して智慧あることなく、ただ我見を起こして無漏を生ぜざれば、また嬰愚凡夫と名づく。凡夫とは義訳なり。梵には波羅必利他伽闍那と言う。ここには小兒別生と云う。痴なること小兒のごとくして、聖生に同せざるをもつてなり」と。〔聖〕とは、

【四十四丁右】

正なり。謂く、見思の邪執を断じて四諦の理を見て、すなわち正念分明なるが故に正と云う。これ無漏の異名なり。もし小乗に依らば初果已上、もし大乘に拠らばあるいは初住以去無漏の真理を発するを聖人と名づく。『名義集』（翻訳名義集）に云く、「梵には阿離野と云う。ここには聖者と翻ず」と。〔逆〕とは、五逆なり。謂く、天理に違悖するなり。謂く、人と父母に於いてはまさに力を竭して、孝養してもつてその恩を報ずべし。しかるを変してこれを害す。僧の和合するときは、道業を成ずることを得て人を利益す。変して離間して

【四十四丁左】

これを破散す。諸仏如来、世間に出現して、一切衆生を度脱す。まさに恭敬供養すべきところなり。反りて支体を傷り、もつてその血を出す。羅漢は三界を出離して、世の福田と為して有情を利益す。まさ

に礼敬すべきところなり。変して殺害を加う。僧の羯磨するは、人の受戒のためなり。一心に奉事して戒法を稟受せずして、反りて悪言をもつてその行を破毀す。かくのごときらは、永く地獄に墮して出期あることなし。順背福禍、これを欽むべし。律制もつてこれを言わば、一に殺父母。『四分律』に云く、若し父

【四十五丁右】

母を殺す者は、出家して具足戒を受くることを許さざるなり「具足戒とはすなわち二百五十戒なり」。二には破和合僧とは謂く、比丘集衆して布薩を行ずる時、和作法す。もしのちに來る者はまさに随順寂黙すべし。あるいはまさに回避すべし。もしは瞋惡の心をもつてその法事を破して和合せざらしむ。これを逆罪と為す。『律』に云う。和合僧を破る者は、出家して具足戒を受くることを許さざるなり「梵語には布薩、華には淨住と言ふ」。三には出仏身血と

は謂く、仏はこれ一切衆生の慈父なり。よく衆生をして自心を悟明して苦趣を出離せしむ。

【四十五丁左】

衆生、劫を歴て供養すれども、その恩徳の万一を報ずること能わず。しかるにいわんやその身血を出すをや。もしこの事を行ずる、これを逆罪と為す。『興起行經』に云く、提婆達多、山を推して仏に擲れば、山神これを接するに、迸りて一の小石、仏の足指を傷れば、すなわち血出でることあり。この因縁をもつてのち地獄に墮す「梵語には提婆達多、華に天熟と言ふ」。四には殺阿羅漢とは、梵語には阿羅漢、華には無學と言ふ。謂く、法として學ぶべきことなし。または応供と名づく。人天の供養を受くべき故なり。衆生はすなわち、まさに供養恭敬をもつて

【四十六丁右】

福を種えるの田と為るべし。いわんや殺逆を行わん

をや。もしこの事を行ずる、これを逆罪と為す。『律』に云く、阿羅漢を殺す者は、出家して具足戒を受くることを許さざるなり。五には破羯磨僧とは、梵語には羯磨、華には作法弁事と言う。謂く、比丘、具足戒を受け、あるいは懺悔の法を行ずる時、まさに和尚、阿闍黎に依りて、羯磨の法を行じて作法成就するとき、まさに戒を得と為すべし。もし人ありて見るはまさに随順寂黙すべし。あるいはまさに回避すべし。もしは悪心をもつてその作法を破して戒を得ざらしむる。これを逆罪と為す。『律』に云く、羯磨

【四十六丁左】

磨を破せん者は、出家して具足戒を受くることを許さざるなり。和尚、梵語には鄒波遮迦、于闐国には和尚と翻じ、華には力生と言う。梵語には阿闍黎、華には軌範と言う。『謗』とは、謗法なり。『註論』(論註)に云く、「もし仏なく、仏の法なし。菩薩な

く、菩薩の法なし。かくのごときらの見、もしは心にみづから解し、もしは他に従いて受けて、その心決定するをみな誹謗正法と名づく」(一、四八三・四八四)と。『斉回入』とは、「斉」はこれ斉等なり。謂く、仏願力に乗ずれば、善惡の二機等しく淨刹に入る。故に「斉入」と云う。『玄義』(觀經疏 玄義分)に云く、「まさしく仏願に託すれば、もつて強縁と作るに由りて、五乗をして斉しく入らしむることを致す」(一、六七七)と。

【四十七丁右】

また、「斉」に総別あり。総は前解のごとし。別に二義あり。一には斉下、二には斉上。一に斉下とは謂く、淨土の教はもと凡夫に被らしむるが故に、しかもその正機とす。この故に三乗みな庸夫に斉く、願力に乗じて報土に入る。故に斉下と云う。『經』(大經)に説く、「六十七億の不退の菩薩ありて、みなかの国に往生す」(一、六七)と。また、馬鳴・龍

樹）・天（天親）、淨土に往生せんと願ず。これその義なり。齊上とは謂く、報土に得入するの機はもとこれ十地の菩薩なり。凡夫は所入の機に非ずといえども、

【四十七丁左】

仏願に由るが故に、いまし上機に齊しく報土に生ずることを得。故に『經』（小經）に「諸上善人俱会一处」（一、一〇八）と説く。「回」とは、返なり。謂く、弘願力に乗ずれば、五乗の機、娑婆の旧塵を棄去して、すなわち極楽の本家に返入す。故に「回入」と云う。また、「回」とは、転なり。謂く、謗逆の心を転化して、仏願力に乗ずれば報土に趣入す。故に「回」と云う。大師（善導）は（法事讃）、「謗法闡提回心皆往」（一、八〇八）と云う。これその義なり。「如衆」の下は、喩えを挙げて「齊入」の義を釈す。本文『註論』（論註）に見えたり。謂く、信仏の一

【四十八丁右】

念に依るが故に不斷にして至る。不斷の故に衆機共に生ず。共生をもつての故に衆水の海に入りて一味なるに譬うなり。

攝取心光常照護

已能雖破無明闇

貪愛瞋憎之雲霧

常覆真實信心天

譬如日光覆雲霧

雲霧之下明無闇

上には能発心の利益を明かし、今は心光照護の徳を釈す。初の一句は、抛るところ大師（善導）の釈に在り。云く（觀念法門）、「ただ

【四十八丁左】

阿弥陀仏を專念する衆生ありて、かの仏の心光、常にこの人を照らして、摂護して捨てたまわず」（一、

八八三」と。「攝取心光」等と云うは、まさしく利益を示す。謂く、衆生よく仏を念ずるは、すなわち仏心中に攝取せられて、三業みなこれ仏に随いて出でるが故に、衆生の三業全くこれ仏の三業にして、常に仏の心光を離れざるが故に「攝取心光」と云う。

『經』（觀經）に「念仏衆生攝取不捨」（一、八七）と云うこれなり。「已能」の下は、略して破と未破とを示す。「雖」の言は、意、兩句を兼ね。謂く、能念仏の者は生仏一体にして、しかも

【四十九丁右】

心光を離れざるが故に、惑その信体を碍えず。この故に不碍の義あり。故に「能破」と云う。しかれども、相はこれ凡夫の故に、歴縁対境してしばしば煩惱を起こして、しかも信心を覆う。故に「雖破」と云う。次の句には、「常覆」と云うなり。初学の者々のために、重ねて約してこれを言わば、体にはこれ破の義あれども、相にはこれ未破の義あり。故に「雖

破」と云う。体は他力を本としてこれを言う。相は機情に従いてこれを言う。「無明闇」とは、無智不覺にして、一切善惡の事に於いて分明ならざることなお暗夜のごとし。故に「無明闇」と云う。『起信

【四十九丁左】

疏』（大乘起信論義記）に「無明」を解するに二つ。⁸⁶
一に無体即空の義。謂く、無明の惑みな衆生の妄心に依りて、真如に違して妄境を起こす。もと空なればもと有ならざるが故に、無体即空の義と云う。二には有用成事の義。謂く、無明、自体なしといえども、よく世間出世間の一切の事業を成弁す。故に有用成事の義と云う。『仏説決定義經』に依るに云く、一に痴無明とは謂く、人、愚痴暗鈍にして明了なるところなくして、正法に於いて信を生ずること能わず。ただ邪師の教を逐て、妄りに

【五十丁右】

倒見を執ず。これを痴無明と名づく。二に迷無明とは謂く、人、昏迷不了にして、五塵等の境に惑て觀察すること能わざれば、その患え貪染の心を起こすに及ぶ。これを迷無明と名づく。三に転無明とは謂く、人、明了なるところなければ、正法に於いて邪倒の見を起こす。常を無常と計し、楽を非樂と計する等のごとき、これを転無明と名づく。この三無明をもつて当文の義を釈せば謂く、仏願力に托してまさしく信心を發して、口に唱え身に礼して畢命を期と為して、念念相續する者は仏の心光を離れざるが故に、

【五十丁左】

邪師のために乱れず、邪倒の見を起こさず。この故に三が中に於いては、しかも一と三とを除く。故に「已能破」と云う。下の句には「明無闇」と云う。しかれども、機情に第二在りて未だ除かず。故に「雖破」と云う。次の句に「常覆」と云う。これは三無

明に就いて、しばらく一義を立つ。それ、これを必とするには非ず。「貪愛」の下は、その能覆を明かす。「貪愛」は順境に随いて起こり、「瞋憎」は違境に随いて起こる。これみな無明を本として起る。故に無明はこれ体、瞋憎はこれ用。故に初には「雖破無明」と云い、後には「貪愛信心の天を覆う」と云うなり。また、貪欲に

【五十一丁右】

三種あり。一には外貪欲相。謂く、行人、定を修する時にあたつて、男に於いて女に於いて、その容貌を取りて、貪欲の心生じて、念念住せずして、もろもろの禪定を障う。これ貪欲相と名づく。二には内外貪欲相。謂く、行人、定を修する時にあたつて、欲心たちまちに生じて、あるいは他身の相を緣じ、あるいはみずから己身を緣じ、念念染着して、貪愛を起こしてもろもろの禪定を障う。これを内外貪欲相と名づく。三には偏一切處貪欲相。謂く、行人、

貪着すること前の内外の境のごとく、また一切五塵の境

【五十二丁左】

界、資生物等に於いて、みな貪愛の心を起こしてもろもろの禪定を障う。これを偏一切処貪欲相と名づく。また、瞋恚に三つ。一には非理瞋相。謂く、行人、禪定を修する時、瞋覚欬然として起こりて、是非理、他の犯不犯を問うことなく、故なくして瞋恚を發してもろもろの禪定を障う。これを非理瞋相と為す。二に順理瞋相。謂く、行人、禪定を修する時、外人、実に来りて我を悩ます。これをもつて縁と為し、瞋覚を生じて相續して息まず。また、戒を持つ人のごときは、非法の者を見ては

【五十二丁右】

瞋恚を生ず。瞋は理に順ずといえども、また禪定を障う。これを順理瞋相と為す。三には諍論瞋相。謂

く、行人、禪定を修する時、己が所解の法に着して是と為して、他の所行所説を謂つては悉くもつて非と為す。外人所説、己が情に順ぜざれば、すなわち悩覚の心生じて、瞋恨を起こしてもろもろの禪定を障う。これを諍論瞋相と為す。「常覆」の下は、かれよくこれを覆うことを明かす。故に「貪愛」はこれ能覆、「眞実」はこれ所覆。謂く、信ずといえども念ずといえども、相これ凡夫の故に、煩惱起こりて信心の天に覆う。故に

【五十二丁左】

「常覆」と云う。しかれども、仏願力をもつての故に、これがために纏牽せずして必ず報土に至ることを得。故に『玄義』（觀經疏 玄義分）に「横超斷一斷は所離に名づく」四流」（一、六五五）と云う。今は「明無闇」と云う。『淨慈要語』に云く、「具縛凡夫、念仏すと曰うといえども貪瞋未だ息まず、心、実に不淨なり。なんぞ往生と云う。曰く、これ阿弥陀仏の

願力摂受に仗るなり。那先経に云く、譬えば人ありて、大石塊その数千百をもつて大海を渡らんと欲するには、船力をもつての故にすなわち彼岸に達するがごとしと。衆生の罪はなお巨石のごとし。弥陀の願

【五十三丁右】

力はかの大船のごとし。石もと沈み易し。船に因りて渡るべし。罪本まさに墮すべし。仏に憑みて生ずることを得。かつ帶業往生の人は、必ずそれ臨命終時に正念堅凝なる者なり。この一念淨心、すなわちよろしく頓に淨邦に現すべし。いわんや平日念仏の功あるをや⁽⁸⁶⁾と。「眞実信心」とは、不妄を「眞」と曰い、不虛を「実」と曰う。もし心に余念あるはこれ妄にして眞に非ず、もし心求むるに尽虚せば実に非ず。常淨にして求むるに尽さず。故に「眞実」と云うなり。すでにこれ弥陀所修の眞実なり。

【五十三丁左】

いま「眞実」と「信心」とに就いて、解するに三義あり。一には謂く、眞実の仏願を信ずる心なるが故に「眞実信心」と云う。これは能所に約して言う。二には謂く、凡夫生得の眞実底に仏願の不思議を信ずる心なるが故に「眞実信心」と云う。これは共に行者に約して言う。三には謂く、仏体の眞実に依りて衆生の信心起こる。故に仏の眞実の外、衆生の信心なく、また衆生の信心の外、仏体の眞実なし。能所体無二なり。故に「眞実」すなわち「信心」、「信

【五十四丁右】

心」すなわち「眞実」なり。これは不二に約して、しかも言つぶさにこれを論ぜば、すなわち互具、互立、互存、互亡の四義宛然たり。学者これを察せよ。「天」とは清淨の義なり。今の眞実心は迷心自力に非ず、仏心清淨の心なり。故にこれを天に譬うるなり。「譬如」の下は、喩えを挙ぐ。謂く、譬えの中

に「覆雲霧」と言うは、これ未破の義を含む。「明無闇」と言うは、これ破の義を含む。いまし眞実の信心、その相、貪瞋のためにしばしばもつて覆うれども、その体、常明なること、譬えば世の日光、雲霧のために

【五十四丁左】

覆われるといえども、その光体恒明にして闇なきがごとし。「日光」等と云うは、「日」はこれ世闇を照らすの体なり。故にこれを眞実信心に譬う。日の光用、よく闇を除きて浄きが故に、これを清浄の天に譬う。地気は上りて雲と為りて、太虚に往来して日の曩体を覆う。故にこれを貪愛、無明に因りて起りて、眞実心を蓋うに譬う。「霧」は地気発して、天氣応ぜざれば、霧と為りて日の輝体を障う。故にこれを瞋憎、無明および貪愛に因りて起りて、信心の天に覆うに譬う。「雲霧」つぶさには博物志等のごとし。

【五十五丁右】

獲信見敬大慶喜
即横超截五惡趣
一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願
仏言廣大勝解者
是人名分陀利華

上には所照の光徳を釈す。これは獲信の勝利を嘆釈す。謂く、聞法に依りて信を建てて、疑なきが故に「獲信」と云う。心に仏境を生ずるが故に「見」と云う。心境互いに契う。故に「敬」と云う。機法不離の徳ありて、時々には礼拝・称名す。故に「大

【五十五丁左】

慶喜」と云う。慶喜の常に非ず。故に「大」と云う。拠るところの文、『大經』に在り。『經』（大經）に云く、「法を聞きてよく忘れず、見て敬い得て大きに慶ばば、すなわち我が善き親友なり」（一、四七）

と。恵遠（浄影寺慧遠）の『大経疏』（無量寿経義疏）に、今文を釈して云く、「聞法能不忘とは、弥陀仏所にして法を聞きて忘れず。見敬と言うは、弥陀仏を見、心に尊敬を生ず。得大慶とは、前の聞法見仏恭敬して善利を得ることを明かす。乃至三行、釈迦に順するを我善友と名づく」と。⁽⁸⁷⁾これは得生已後に約して釈す。問う、『経』（大経）には「聞法能不忘」（一、四七）と云う。今は「獲信」と言うは

【五十六丁右】

なんぞや。謂く、法を聞きてよく忘れざるは、これ信を獲るが故なり。故に聞に依りて信を生じ、信に依りて聞を成ず。ここをもつて「獲信」の言、「聞法能不忘」の一句を含む。『経』（大経）には「能不忘」と説き、今は「獲信」と云う。これ義を得て言を易え、いまし宗に通じて義豊かなり。また、信に依りて「見」あり。信に依りて「敬」あり、「慶」あり、「喜」あり。これは信をもつて本と為す。故

に「華嚴」（華嚴経）には「道源功德の母」と云う。⁽⁸⁸⁾また、信に依りて「見」あり。「見」に依りて「敬」あり。「敬」に依りて「慶」あり、「喜」あり。これは次第あい因りて互いにその徳を成ず。「即横」の下はこの

【五十六丁左】

上の獲信の利益を明かす。「横截」等とは、『経』（大経）に云く、「横に五惡趣を截りて、惡趣自然に閉づ」（一、五一）と。浄影（浄影寺慧遠）釈して謂く（無量寿経義疏）、「いま弥陀淨刹に約対して、娑婆五道齊しく惡趣と名づく。地獄・餓鬼・畜生は、純惡の所居なれば、名づけて惡趣と為す。娑婆は人・天雜業の所向なれば、また惡趣と名づく。もしこの方の修治断除に依らば、まず見惑を断じて、三塗の因を離れて、三塗の果を滅す。のちに修惑を断じて、人・天の因を離れて、人・天の果を絶す。これみな漸次の断除なれば、横截と名づけず。もし

【五十七丁右】

弥陀の淨國に往生することを得れば、娑婆の五道一時に頓に捨つ。故に横截と名づく⁽⁸⁸⁾と。「一切」の下は、初の一句は能聞の人を挙げ、次の一句は所聞の法を示す。「一切」の言は、十方に通ず。「善惡」の言は、因果に亘る。「凡夫」の言は、局りて惡に在れども、今は善惡に通ず。「一切」とは、『名義集』(翻訳名義集)に云く、「一はこれ普及の言、切はこれ尽際の語」(取意)と。また云く、究竟して二に非ざるを一と名づく。その性、広博なるを切と名づく。「聞信」とは、聞きてのちに信ず、信じてのち行ず。聞にあらざれば、すなわち信、何に由りてか生じ、信に非ずんば、行、何に由りてか

【五十七丁左】

起こらん。信の功は聞に在り。行の功は信に在り。まさに知るべし、聞信行を具して、淨土の資糧充足して欠くることなければ、仏心と相應す。あに嘆美

せざらんや。『文類』三(本典 信文類)に云く、「聞

とは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなき、これを聞と曰う」(二、九四)と。『唯識論』に云く、「耳根、識を発して領受するを聞と曰う」⁽⁸⁹⁾と。つぶさには四聞義あれども、今の所用に非ず。補註等に見えたり。「弘誓願」とは『法界次第』(法界次第初門)に云く、「広普の縁、これを謂て弘と爲す。みずからその心を制するを、これを名づけて誓と曰う。志求満足するが故に願と云う」⁽⁹⁰⁾と。

【五十八丁右】

これは総願に就いて言う。今は別願を指して言う。「仏言」下は、共に所嘆の言なり。「廣大勝解」とは、「廣大」の言の標するところ、「弘誓願」に在り。「勝解」の言の標するところ、「聞信」に在り。願、ただ四十八にして無量願を摂す。故に「広」と云う。化、十方を該ねるが故に「広」と云うなり。願、五三に非ず、故に「大」と云う。大と言うは今は多の義な

り」。余仏の願に超えるが故に「大」と云う「大と言うは今は勝の義なり」。余事を聞信せず、弘誓願を聞信して歓喜奉行するが故に、仏、嘆じて「勝解者」と云う。文、

【五十八丁左】

『如来会』に出でり。『宝積經』十八に云く（如来会）、
「もし善男子・善女人等、かの法中に於いて、広大勝解の者は、まさによく聴聞して大歓喜を獲、受持読誦して広く他のために説きて、常に樂て修行すべし」（一、三三五）と。けだし、信とは、印可決定の勝解をもつて因と為して生ず。「勝解」とは、決定の境に於いて印持するを性と為し、引転すべからざるを業と為す。故に『唯識』（成唯識論）に云く、「忍は謂く勝解。これすなわち信が因なり。樂欲は謂く、欲すなわちこれ信の果なり」と。⁽⁹³⁾ しかれば、いま行者に随いては「信」と云い、仏嘆に随いては「勝解」と云うことは、いまし深く

【五十九丁右】

信を讚美す。謂く、この信は、所念の法に於いて、決定の勝解をもつて因と為して生ずることを顯す。始終あい契いて義趣深長なり。「是人」等とは、この嘉譽、もと『觀經』に出でたり。『經』（觀經）に云く、「もし念仏する者は、まさを知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり」（一、九八）と。これに就いて、大師（善導）、五種の褒言を出す。知らんと思わば、『疏』（觀經疏 散善義）のごとし。⁽⁹⁴⁾ 「分陀利華」とは、ここには白蓮華と云う。謂く、弘誓願を聞信する者は、心華開發して清白の仏心を具す。故にたとえ塵縁に値いて、しばらく煩惱起こるとも、心体清淨にして

【五十九丁左】

これがために染せずして、憶念称名すること譬えば蓮華の泥中より出でて、泥のために染められず潔白清淨なるがごとし。故に「散善義」（觀經疏 散善義）

に云く、「衆生、貪瞋煩惱の中によく清淨願往生の心を生ず」（一、七七〇）と。また、念仏三昧の功德、殊勝にして、雑善をもつて比況と為することを得るに非ざるをもつて、これを分陀利華、その色純白にして余華をもつてこの対と為することを得るに非ざるに譬う。また、分陀利華の希有なるをもつて、相續念仏の者の希有なるに譬う。「分陀利」とは、叡師（僧叡）の云く（法華經）、「未だ敷かざるを屈摩

【六十丁右】

羅と名づく。まさに落ちんとするを迦摩羅と名づく。中に処して盛なる時を分陀利と名づく⁽⁹⁵⁾（取意）と。体は時を逐て遷る。名は色に随いて変ず。故に三名あり。いま「中に処して盛なる時」と言うは、これ心体二辺に落ちざることを標す。念仏の者もまたしかり。故に分陀利をもつてこれに比す。学者これを察せよ。

弥陀仏本願念仏
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯

【六十丁左】

上には聞信の者、仏のために嘉譽を蒙ることを明かす。今は変して邪見憍慢の者、信受はなだ難きことを顯すことは、これ不信の者をして、その心を改悔せしめ、また聞信の者をして、益々その心を増長せしめんと欲す。故に変顯することは、順進せしめんがための本なり。ここをもつて、今師（親鸞）の慈悲善巧、後学、その十が一を得ればそれ可なり。「弥陀仏」の下は、かの不信の法を挙げ。いま能所に約してこれを釈さば、しかも三義あり。一には謂く、弥陀仏はこれ常ならず。念仏往生の本願あるが故に「弥陀仏本願念仏」と云う。

【六十二丁右】

これは「弥陀仏」の言をもつて所釈と為し、「本願念仏」の言を能釈と為す。二には謂く、「本願」は余仏の願に非ず。弥陀の願なるが故に「弥陀仏本願」と云う。これは「本願」の言をもつて所釈と為し、「弥陀仏」の言を能釈と為す。三には謂く、「念仏」は余仏を念ずるに非ず。弥陀を念ずる念仏なるが故に「弥陀仏本願念仏」と云う。これは「念仏」の言をもつて所釈と為し、「弥陀仏本願」の言を能釈と為す。次第あい因りて、能釈所釈と為つて列言の次、意味深長なり。一旦にして

【六十二丁左】

解し難し。ああ、惜かな、卒に讀みてそれ祖意を害せんことを。いまし「念仏」に四種あり。一には称名、二には觀像、三には觀想、四には実相。称名とは、口、常に仏名を唱うるを称名と云う。觀像とは謂く、尊像を設け立てて、目を住めて觀瞻すべし。『法

華』（法華經）に云うがごとし。「起立合掌して一心に仏を觀ずれば」⁽⁹⁶⁾と。すなわち相好光明現在の仏を觀ずるなり。優填王のごとく、梅檀をもつて世尊の像を作れば、すなわち泥木金銅鑄造の六仏を觀る。故に觀像と云う。觀想とは謂く、我が心眼をもつてかの如

【六十二丁右】

來を想う。すなわち十六觀等の所説これなり。実相とは、すなわち自性天真の仏を念ずれば、生滅・有空・能所等の相なく、言説の相を離れ、名字の相を離れ、心縁の相を離る。これを実相と名づく。この四は、同じく念仏と名づくといえども、前浅く後は深し。持名は初門に在りといえども、その実は、意、無尽を含む。故に当家の意、初を取るを要と為す。「邪見」の下は、不信の機を指す。本文、『大經』に出でたり。すでに『經』（大經）には、「弊懈怠」（一、四六）と云う。今の釈には「邪見」と云つて、弊・

懈怠を除くはなんぞや。謂く、邪見をもつての

【六十二丁左】

故に、その信を弊て、還りて謗じて信ぜず。邪見をもつての故に、しばらく聞き、しばらく信ずれども、その心懈怠して還りて謗を為す。故に「邪見」の言は、弊・懈怠を含めり。「善を弊し善を退す。故に弊と云い懈怠と云う」憍慢の者、いかんがこの法を受持せざるや。かれ疑いて云く、それ成仏の法は必ず多種の功行あり。この因微果勝にして、刹那成仏すること聞きて、これを侮りて信ぜず。故に『法華』「方便品」（法華經 方便品）に云く、「舍利弗まさに知るべし、鈍根小智の人は相に着し、憍慢の者はこの法を信ずること能わず」と。⁽⁹⁷⁾すでに大乘所説の刹那

【六十三丁右】

成仏の法を聞きて、還りて誹謗を為すこと、今經に

局るに非ず。「邪見」とは、『瑜伽論』（瑜伽師地論）に云く、「邪見と言うは一切僻見して、所知の事に於いて転倒するをみな邪見と名づく。これ前業の所感なり」⁽⁹⁸⁾（取意）と。故に『法苑珠林』に云く、「ひとたび邪見の家に生ずる者は謂く、前世の邪僻、心を覆いてもろもろの妄見を起こすに因る」⁽⁹⁹⁾と。故に、今世に正信の心を見せずして邪見の家に生ずることを感ずなり。「憍慢」とは、『俱舍』（俱舍論）の頌に曰く、「憍は自法に染むに由る。慢は他に對して心をあぐ」⁽¹⁰⁰⁾と。つぶさに七慢等あり。『頌疏』（俱舍論頌疏）十九のごとし。⁽¹⁰¹⁾「惡衆生」とは、

【六十三丁左】

「邪見」「憍慢」共に法器に非ず。故にかれを指して「惡衆生」と云うなり。「信樂」の下は、まさしく難を示す。『大經』に云く、「諸仏の經道、得難く聞き難し。菩薩の勝道（法）・諸波羅密（蜜）、聞くことを得ることまた難し。善知識に遇いて、法を聞きて

よく行ずること、これまた難しと為す。もしこの經を聞きて信樂受持すること難が中の難、この難に過ぎることなし」(一、六九・七〇)と。遠公(淨影寺慧遠)釈して云く(無量壽經義疏)、「手に經卷を得るを、これを名づけて得と為す。耳に聴くを聞と曰う。また領誦すべきを、これを名づけて得と為す。耳に喰むを聞と稱す。これらみな難し。菩薩勝下はその

【六十四丁右】

行法、これを聞くこと、はなはだ難きことを明かす。善知識に遇いてよく行ずることまた難しとは、修行の難を明かす^(四)と。『若聞斯經』(一、七〇)の下は、前の三に約対して、この經中の修学、最も難きことを明かす。余義余法、処々によりしく説くべし。淨土を開顯して、人を教えて往生せしむること、独りこの一經なり。これを最も難と為す。『弥陀經義疏』(阿弥陀經義疏)に云く、「念仏の法門は、愚智を簡

ばず。豪賤を扱はず。久近を論ぜず。善惡を選ばず。ただ決誓を取りて猛信なれば、臨終の惡相なれども十念往生す。これすなわち具縛の凡愚、屠沽の下類、刹那に

【六十四丁左】

超越する成仏の法なり。謂つべし、一切世間はなはだ信じ難し^(四)と。『信樂』とは、『唯識論』(成唯識論)に云く、「いかに信と為す。実と徳と能とに於いて、深忍樂欲して心淨きを性と為す。不信を対治して善を樂うを業と為す^(四)」と。『自攷録』(成唯識論自攷)に釈して云く、「云何の下は、信を積する体用を徴出す。実徳能はすなわち所信の境、深忍樂等はすなわち因果の自性、不信はすなわち所対治、衆善を愛樂するをしかも業用と為す^(四)」と。『受持』とは、法を聞きて、心、よく領解す。故に「受」と云う。領解するが故に持ちて失せざるを「持」と云う。故に

【六十五丁右】

義寂の云く、「受とは心に領納を作す故に。持とは記を得て忘れざるが故に」⁽¹⁰⁾（取意）と。「甚以難」とは、この法を信ずる、はなはだ難きことを明かす。ただし、絶ちて念仏を信ぜざるには非ず。故に「難」と云うなり。「甚」とは、深に訓じ、尤に訓ず。また、宗師（親鸞）は（唯信鈔文意）、「甚は勝なり」（二、六八五取意）と云えり。今はよろしく尤の訓を用いるべし。「難中之難」等と云うは、上の「難」の字は、諸仏の経道と菩薩の勝法と、聞法・能行とを指す。下の「難」の字は、前の三に約対して、この経を信ずることの難きことを明かすなり。この字は直ちにこの経を指す。すなわち念仏の法なり。

【二丁右】

正信念仏偈要解卷三

釈氏西吟 撰

印度西天之論家

中夏日域之高僧

顯大聖興世正意

明如来本誓応機

これより以下の七十六句は、略して七祖弘法の勝徳を挙げて、人をして今この念仏は、

【二丁左】

祖々相承して臆説に出でざることを知識せしめて、うたた信心を生ぜんと欲す。故に下に結して、「大士・宗師、無辺の衆生を拯済す」（二、六四取意）と云い、また、己を隠して化功をかれに推って、「唯可信斯」（二、六四）等と云うなり。およそ文を分かつに三あり。一に「印度」以下の四句は、略して三朝高祖

の弘化を標す。二に「釈迦」以下の六十八句は、まさしく七祖の徳化を釈す。三に「弘経」等の四句は、これ結勸なり。はじめ、略標の中に「印度」等の四句は、列祖所生の国名を挙ぐ。次の四句は、その所勸の

【二丁右】

法の勝ることを示す。文の中に「印度」とは、『西域記』（大唐西域記）二に云く、「詳かにすれば、それ天竺の称、異議糾紛たり。旧には身毒と云う。あるいは、賢豆と曰う。いま正音に従わば、よろしく印度と云うべし。印度の人は、地に随いて国と称す。殊方異俗、遙かに総名を挙ぐ。その美むるところを語らうてこれを印度と謂う。印度とは、唐には月と言う。月に多名あり。これその一称なり。言う心は、もろもろの群生、輪廻息まず、無明長夜に司晨あることなきは、それなお白日すでに隠れて宵燭ここに継ぐるがごとし。星光の照ありといえども、あに朗

【二丁左】

月の明なるに如かんや。まことにかくの致ねに縁る。因りて月に譬う。まことにおもんみれば、その土の聖賢、軌を繼ぎて凡を導き、物を御するは月の照臨するがごとし。この義に由るが故に、これを印度と謂う。印度は種姓、強類、群がり分る。しかれども、婆羅門を特に清貴と為す。その雅称に従いて、伝えもつて俗を成じて、経界の別と云うことなく、すべて婆羅門国と謂う。もしその封壇の域、得て言つべくんば、五印度の境、周り九万余里、三垂は大海なり。北は雪山を背にして、北は広く南は狭し。形は半月のごとし。野を画ちて区分するに

【三丁右】

七千余国なり。時、特に暑熱なり。地、泉湿多く、北はいまし、山阜、軫を隠し、丘陵、渦涵なり。東はすなわち川野沃潤にして、疇墾膏腴なり。南方は草木榮茂なり。西方は土地磽确なり。これ大概な

(108)り」と。「西天之論家」とは、「西天」は五天の中の西天には非じ。しかるゆえんは、この二菩薩は南北の両天に生ずるが故に「ただし、『伝灯録』(景德伝灯録)には、龍樹は西天竺の人と云う。経および余伝には南天竺に生ずと云う。故に讃文の中にも南天に生ずるの義を用う、今はかの地、震旦より西方にあたるをもつての故に、総じて五天竺を指して「西天」と云うなり。

【三丁左】

「論家」とは、龍(龍樹)・天(天親)のおの多く論を作りて化を五天に張る。故に二大士を指して「論家」と云うなり。「中夏」とは、中国、これを諸夏と謂う。これ中国を指して「中夏」と謂う。または大夏と云うなり。「日域」とは、和国の別名なり。『纂疏』(日本書紀纂疏)に云く、「唐書伝に云く、日本国は和国の別種なり。その国、日の辺に在るをもつての故に、日本をもつて名と為す。あるいは倭国と

曰う。みずからその名、雅しからざるを悪して、改めて日本と為す。あるが曰く、日本もとは小国なり。倭国の地を併せて、その人、朝に入る者多く

【四丁右】

みずから大に矜つて、実をもつて对えず。故に中国これを疑う。一義に曰く、もとはなお始のごとし。陰陽二神、はじめて日神を生む。故に日本をもつて名と為す。また曰うは、出入をもつて始終と為す。これは日の出づるの国なり。一義に曰く、日は衆陽の宗なり。人君の表なり。故に天に二の日なく、地に二の王なし。孟子の曰わく、天の物を生ずるや。これをして一本ならしむと。その人物の生ずることみな二本ならず。いま自然の謂なり。また、和面国と云う。謂く、この方の男女、みな面を点し身を文る。

【四丁左】

故に面の字を加えてこれを呼ぶや」と。「高祖〔僧〕⁽¹⁰⁾」とは、これ五祖を尊称するの言なり。二にその所勸の法の勝ることを示す。中に「顕大聖」等とは、釈迦、念仏を説きて興世の素懷と為す。七祖、あい繼ぎて、もつてこれに軌てその教法を弘む。懷、仏心に契う。故に「顕正意」と云う。「大聖」とは、今はこれ釈迦を指して言う。解するに二義あり。一には、真諦門に約せばすなわち謂く、智は法界を照らし、慈は大于にあまねく。その悲智、広博にして三乗の上に聖たり。故に「大聖」と云うなり。二に

【五丁右】

俗諦門に約せばすなわち謂く、仏は老（老子）・孔（孔子）二教の説を一口にして、二聖の上に聖たり。故に「大聖」と云う。その故は、はじめ釈迦、神を西天に降ろし、教を法界に垂れて群品を化するに、傍らに老（老子）・孔（孔子）の両道を顕し、のちに老（老子）・孔（孔子）、生を周世に受けて、化を国

家に張りて、蒸民を教うるにおのの仏化の一途を吐く。すでに釈迦、我が弟子三聖を遣ると説き、また、列子の中に孔子、西方に聖人ありと言いて、釈迦をもつて三皇五帝の上に聖たらしむることを明かす。故に

【五丁左】

義、「大聖」と謂つべし。ただし、よろしくは初義を正と爲し、後義を傍と爲すべし。それ念仏をもつて「正意」と爲することは、仏、浄土功德莊嚴を説きてすなわち穢土の濁乱を返し、いまし弥陀の円満報身を説きて、すなわち煩惱の痴身を変ず。ここをもつて一念称名の行者は、すなわちかの国に生じて無漏身を証して、高く蓮台に登りて常に真樂を得。利益莫大なり。故にいま念仏を指してもつて「正意」と謂うのみ。「明如来」等とは、「如来」は弥陀を指す。「本誓」とは、六八の願を指す。これ法藏因中の所

【六丁右】

誓なるが故に。いま果体より指して「本誓」と云う。「明応機」とは、一々の誓願、みなよく衆機に契う。故に七祖、踵を継ぎて専らこの教法を弘む。故に「明応機」と云うなり。

釈迦如来楞伽山

為衆告命南天竺

龍樹大士出於世

悉能摧破有無見

宣説大乘無上法

【六丁左】

証歡喜地生安樂

これより以下は、二にまさしく七祖の徳化を釈するに七つ。第一に龍樹の徳化を釈する中に十二句あり。中に於いて二。一に今この六句は、『楞伽經』（楞伽

経）に依りて、龍樹の徳を明かす。この中に於いて、釈を設くるに二あり。一には所拠の文を引きて釈す。すなわち『入楞伽』（楞伽經）に云く、「大恵、汝まさに知るべし。善逝、涅槃ののちの未來世に、まさに我が法を持つ者に、南天竺⁽¹¹⁾國中に大名徳の比丘あるべし。それを号して龍樹と為す。よく有無の宗を破して

【七丁右】

世間の中に我が無上大乗の法を顯し、初歡喜を得て安樂國に往生せん⁽¹²⁾」と。いましこの文にもとづいてその道徳を嘆じて、すなわち所信・所勸、その法、常に非ざることを示して人信を厚くす。ちなみに余伝を引き、つぶさにその徳を明かさば、謂く、什（鳩摩羅什）の曰く（龍樹菩薩伝）、「本伝に云く、その母、樹の下にしてこれを生む。因りて阿周那と目づく。阿周那とは、樹の名なり。龍をもつてその道を成す。故に龍の字をもつて号して龍樹と云う⁽¹³⁾」（取

意）と。『伝灯録』（景德伝灯録）に云く、「第十四祖龍樹尊者は、西天竺國の人なり。または龍勝と名づく。はじめ

【七丁左】

毘羅尊者に於いて法を得、のち南印度に至る。かの國の人、多く福業を信ず。尊者、ために妙法を説くを聞きて、あい謂て曰く、人、福業あり。世間第一なり。徒に仏性と言えども、誰かよくこれを觀る。尊者の曰く、汝、仏性を見んと欲せば、まず、すべからく我慢を除くべし。かの人曰く、仏性に大小ありや。尊者の曰く、大に非ず小に非ず、広に非ず狭に非ず、福なく報なし。不死不生なり。かれ、理の勝るを聞きて悉く初心を廻らす。尊者、また座上に於いて自在身を現ずること満月輪のごとし。一切衆ただ法

【八丁右】

音を聞きて師相を覩ず。かの衆中に長者の子あり。迦那提婆と名づく。衆に謂て曰く、この相を識るや否や。衆の曰く、目、未だ覩ざるところ、安んじてよく弁識せん。提婆の曰く、これはこれ、尊者、仏性の体相を現じて、もって我等に示す。何をもつてかこれを知らん。けだしおもんみれば、無相三昧は、形、満月のごとし。仏性の義、廓然虚明なり。言は訖て輪相すなわち隠る。また本座に居て、偈を説きて言わく、身、円月の相を現じて、もって諸仏の体を表す。説法その形なく、用弁声色に非ず。かの衆、偈を聞きて頓に

【八丁左】

無生を悟りて、咸く出家を願じてもって解脱を求む。尊者、すなわち剃髪と為して、諸聖に命じて具を授けしむ。その国、先に外道五千人あり。大幻術を作す。衆みな宗仰す。尊者、悉くためにこれを化して三宝に帰せしむ。また大智度論・中論・十二門論

を造りてこれを世に垂る⁽¹¹⁾と。二にまさしく句を分かちて義を釈す。この中に於いて三つ。一に「釈迦」等の三句は、仏、衆に対して大士の生処を告ぐることを示す。二に「悉能」の両句は、邪を破し正を顯すことを示す。三に「証歎」の一句は、証位生土を示すなり。

【九丁右】

初文に「釈迦如来」と言うは、これ能説の仏を挙ぐ。上は別号の略なり。下はこれ通号なり。「釈迦」、つぶさには釈迦牟尼と云う。『撫華』には「能仁寂黙」と云う。寂黙の故に生死に住せず。能仁の故に涅槃に住せず。悲智兼運してこの嘉称を立つ。『発軫』に云く、「本起經には釈迦を翻じて能仁と為す。本行經には牟尼を訳して寂黙と為す。能仁はこれ姓なり、寂黙はこれ字なり。姓は慈悲の物を利するに従い、字は智慧の理に冥するに取る。利物をもつての故に涅槃に住せず、冥理をもつての

【九丁左】

故に生死に住せず」と。⁽¹⁴⁾「楞伽山」とは、これは經を説くの地なり。ここには不可往と云う。謂く、自覺聖智の究竟の境は、邪智の造るべきに非ず。故に不可往と曰う。『華嚴論』に云く、「世尊、南海摩羅耶山の頂、楞伽城中に於いて説法す。その山、高きこと五百由旬、下、大海を瞰むるに、路として上るべきなし。その城はいまし衆宝所成なり。光、日月を映す。門として入るべきなく、神通を得る者、昇往を能するに堪えたり」と。⁽¹⁵⁾これは心地の法門は、無修無証の者、まさによく

【十丁右】

昇ることを表すなり。「下、大海を瞰むる」とは、これは心海もとみずから澄淨なれども、境風に転ぜらるるに因りて、識浪すでに随動することを表す。ただ心空境寂なるときはすなわちこの識浪また起ることなし。識浪すでに息めば、物、鑑みずと云う

ことなきことは、なお大海に風なければ、日月・星辰等の象、炳然として顯現するがとし。「為衆告」等とは、仏、その徳をもつて時衆に告ぐるなり。「南天竺」とは、大士（龍樹）所生の国名なり。およそ印度に五天あり。菩薩（龍樹）、南天に出でるが故に「南天竺」と云うなり。「大士」とは、悲智兼備の称

【十丁左】

号なり。故に「大士」と云う。『釈氏要覽』に云く、「大心・大行あるをまた大士と名づく」と。⁽¹⁶⁾知んぬ、これ徳に寄て名を立つ。いまし菩薩をもつてまた「大士」と云うなり。二に「悉能」等とは、邪を摧き正を顕すことを釈す。「悉」とは、数多に従いて言う。「能」とは、智能に従いて言う。謂く、仏、般涅槃ののち、異執紛綸として、あるいは邪途に趣き、あるいは小径に奔る。この輩、千此の時に至りて、はなはだ多し。しかるに菩薩、よく理に契いてみな邪解の者を

破す。故に「悉破」と云い、「能破」と云う。「摧破」とは、これ能治の智用なり。「有無見」

【十二丁右】

とは、これ所破の邪迷なり。謂く、凡夫は鈍使の惑に依りて五蘊の色心を執じて、計して淨樂我常と為す。外道は分別に依りてすなわち五陰の上に於いて、その我を計してあるいは即蘊離蘊、断に着し常に着して六十二見を起こす。あるいは小乗は我執を破すといえども、法見を起こして真常を知らず、無常等の四を計してみずからの見解に随いておのおの已宗を立つ。分かちて二十余部と為す。互いにあい是非す。これ等の見解、有を執じ無を執じ、所詮、二見を出でず。菩薩みなよく破す。故に

【十一丁左】

「悉破有無見」と云う。「宣說大乘」等と云うは、これは能対治の法を挙ぐるなり。「大乘」とは、『宗鏡』

(宗鏡錄) 十一に云く、「大乘とは、言うところの大とはすなわち衆生の心性はよく包ねよく遍じ、至小にして内なければ一塵としてよく入ることなし、至大にして外なければ一法として含ぜずと云うことなし。言うところの乗とは、運載をもつて義と為す。よく行人を運びて直ちに薩婆若海に至る」と。また、『乘』に自他の二義あり。『唯識論』に云く、「乗はこれ出載の義なり。真如仏性に由りて福恵等の行を出す。この行に由りて

【十二丁右】

仏果を出す。仏果に由りて衆生を載出す」と。⁽¹⁸⁾長水(子璿)の云く、「当体を目と為す。包含を義と為す。運載を功と為す」(取意)と。⁽¹⁹⁾いま念仏をもつて大乘と為するもまたしかなり。その体を語るときは、すなわち不思議不可説にして三乗のよく測り知るところに非ず。豎には三際に通じて、利益、変なく横に十方を該ねて、その徳、涯なし。強いて名づけて

大と為すなり。万徳を具足して欠くことなし。これを名づけて包含と為するなり。五乗齊しく救う。これを名づけて功と為す。「無上法」とは、いま念仏を指して「無上法」と云う。いわゆる念仏はすなわちこれ阿

【十二丁左】

弥陀如来積劫の累徳、衆善の大本なれば、別に行ありて加え、更に徳ありて極むべきなきを「無上法」と云うなり。けだし菩薩みずからこの無上中道の極致を証して、すなわちこれを説き、すなわちこれを化す。故に「宣説大乘」等と云うなり。三に「証歛喜地」等とは、かの証位生土を明かす。「歛喜地」はまたは通達位と云う。謂く、無分別智を得るをもつて善く法界一真平等に達す。故に『首楞嚴』（楞嚴經）八に云く、「善く通達を得て、覺、如来に通じて、仏、境界を尽すを歛

【十三丁右】

喜地と名づく⁽¹²⁰⁾と。また、『華嚴吞海集』の意に依るに、「歛喜地」とは、障を断じ真を証す。謂く、菩薩もろもろの衆生を見るに、心、邪見に随いてみな障礙を成ず。故に大願慈心を發起して捨行を修して、内身外賤に於いて、悋惜するところなし。⁽¹²¹⁾因に由りて果を感じて、初地に登りて心に歛喜を生ず。異生性障を断じて、遍行真如を証す。これを「歛喜地」と名づく。「地」を能持に名づく。謂く、中道の地を証して、よく衆善を持つ。故に「地」と名づく。また、「地」に發生の義あり。故に溫陵（戒環）の曰く（楞嚴經要解）、「十地とは

【十三丁左】

前法を蘊積して実を成ずるに至りて一切の仏法、これに依りて發生す。故にこれを地と謂うなり⁽¹²²⁾と。「生安樂」とは、菩薩、二利のためにまさしく往生を願ず。その心、これ深重なり。「安樂」とは、『法華文

句』に云く、「身、危険なきが故に安なり。心に憂
悩なきが故に楽なり。身安んじ心楽んで、いましよ
く行に進む」⁽¹⁰⁾と。故に安樂行と名づく「つぶさには
身と口と意と誓願との四種に安樂行を立つ」。清涼（澄
観）の『華嚴疏』（大方広仏華嚴經疏）に謂く、「涅槃
樂の果を名づけて安樂と為す」⁽¹¹⁾と。この行を修する
者は、涅槃に趣くが故に安樂行と名づく。今は弥陀
仏所成の国土を

【十四丁右】

徳に約してもつて安樂と名づく。すなわち修行安心
の宅なり。故に念仏の行者、よく憶念称名すれば、
眼光落地ののち、すなわちかの国土に生じて永く身
心の悩みを離れて、自然に道に昇りて逍遙無間なり。
故に安樂と名づく。または極樂と云い、また安養と
云い、また涅槃界と云う。故にかの国を樂う者は、
現にはこれ安樂の行者なり。また、得生以後は身心
安樂にして行に進む者なり。けだし自力他力、難行

易行、修因異なりといえども、尅するところの義、
共にこれに在り。問う、一切衆生、

【十四丁左】

畢竟無生なることな虚空のごとし。菩薩、往生を
願ずるはあに無生の理に乖かざるや。答う、鸞（曇
鸞・道（道綽）両公に准ずるに、すなわち衆生無
生にして虚空のごとしと説くに二種の義あり。一に
は、凡夫人の見るところのごときは、実の衆生、実
の生死等なり。この見るところの事、畢竟じて所有
なきこと亀毛のごとく虚空のごとし。二には、いま
生と言うはこれ因縁生なり。因縁生の故にすなわち
これ仮名なり。仮名生の故にすなわちこれ無生なり。
また、長蘆（宗頤）の曰く（樂邦文類所収 蓮華勝
会録文）、「生をもつて生と為るは、常見の失すると
ころなり。

【十五丁右】

無生をもつて無生と為るは、断見の惑うところなり。生にして無生、無生にして生なるは第一義諦なり^(四)（取意）。すでに菩薩は無生にして生なれば、なんぞ願生を妨げんや。また、弥陀の浄土は縁起無性・無性縁起の故に、見生無生・無生而生ふたつながらもつて背かず。問いて曰く、上に言うところのごとく生無生を知るは、上品生の者にあたる。もししからば、下品生の人、十念に乗じて往生する者は、あに実生を取るに非ざるや。もし実生ならば、すなわち二執に堕せん。一には、恐らくは往生を得ず。

【十五丁左】

二には謂く、この相善、無生のために因と為ること能わず。答えて曰く、上にすでに「見生無生・無生而生ふたつながらもつて背かず」と云う。なんぞ弥陀の国土に於いて、凡夫の生を妨げんや。重ねて初学のために、鸞師（曇鸞）の釈を引きてその迷を解せば、すなわち三番あり。一には、「譬えば浄摩

尼珠をもつてこれを濁水に置くに、珠の威力をもつて水すなわち澄清なるがごとし。もし人、無量生死罪濁ありといえども、もし阿弥陀如来の至極無生清浄宝珠の名号を聞きて、これを濁心に投ぐれば、念々の中に

【十六丁右】

罪滅し心浄くしてすなわち往生す」（一、五〇六取意）と。二には、「浄摩尼珠のごとく、玄黄の帛をもつて裹みてこれを水に投ぐれば、水すなわち玄黄にして一ら物色のごとし。かの清浄仏土に阿弥陀仏無上宝珠の名号ありて、無量功德成就の帛をもつて裹みて、これを所往生者、心水の中に投ぐれば、あに生を転じて無生の智と為すこと能わざらんや」（一、五〇六取意）と。三には、「また氷の上に火を燃くに、火猛けきときはすなわち氷液く。氷液くときはすなわち火滅するがごとし。かの下品往生の人、法性無生を知らずといえども、ただ仏名を称する力をもつ

て

【十六丁左】

往生の意を作して、かの土に生ぜんと願すれば、すでに無生の界に至る時、見生の火、自然にして滅するなり」（一、五〇六取意）と。想うにそれ菩薩は無生而生なれば、生よく無生に契う。故に生即無生、無生即生にして、しかも二辺を出でずして中道第一義なり。また、凡夫生土の心も、かの土に到りて自然に滅して、全く菩薩とすなわち異なることなきなり。けだし眞実信心の行者は、常に仏の心中を離れざれば、相はこれ凡夫なれども、体はこれ一味なり。敢えて生無生の会を為すことなし。ただ願力の不思議

【十七丁右】

議に乗じて、常によく一心に仏の名号を唱えよ。眞宗の意ここに在り。

顯示難行陸路苦
信樂易行水道楽
憶念弥陀仏本願
自然即時入必定
唯能常称如来号
応報大悲弘誓恩

【十七丁左】

二に「顯示」等の六句は、難易を挙げてひとえに念仏を勧むることを明かす。中に三つ。一には「顯示」等の兩句は、総じて難易二道を判ずることを明かす。およそ道体幽玄なれども、門よりしてはじめて入る。その門たることこれ同じからず。あるいは崎嶇として行じ難く、紆廻にして到り難きあり。あるいは夷坦にして修し易く、直捷にして到り易きあり。これ揀択なき中に、まさしく二門の分かつところなり。本文、『十住毘婆娑』（十住論）に出でたり。「易行品」に云く、「仏法に無量の門あれば、世間の道に難あ

り易あり。陸路の歩行はすなわち苦しく、水

【十八丁右】

道の乗船はすなわち楽しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進なるあり、あるいは信の方便易行をもつて疾く阿惟越致に至るあり」(二、四〇八)と。「顕示」とは、『華嚴疏』(大方広仏華嚴經疏)に云く、「顕はすなわち顕露、示はすなわち曉示なり」と。謂く、この菩薩、論を造りて自力の修法、陸路を行くがごとく、労苦にして進み難きことを顕露曉示す。故に「顕示」等と云う。「信楽」等とは、「信」は謂く、忍許、「楽」は謂く、愛樂なり。いまし菩薩、人をして他力の念仏は水路の乗船のごとく進み易きことを忍許愛樂せしむ。故に「信

【十八丁左】

楽易行」等と云うなり。すでに我が宗に於いて、二

門の教相を立つること、源これにもとづくのみ。二に「憶念弥陀」の両句は、これ上の易行に就いて、別して専念の利益を明かす。すなわち『同論』(十住論)に云く、「無量寿仏・世自在王仏(乃至その余仏あり)この諸仏世尊、現在十方清浄世界にみな称名憶念す。阿弥陀仏の本願もかくのごとし。もし人、我を念じて、称名してみずから帰せば、すなわち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得る。この故に常に憶念すべし」(一、四一三―四一五)と。「憶念弥

【十九丁右】

陀」等とは謂く、弥陀の願力摂受を聞き得て、すなわち願生の心を発して虚疑なき者は、心ただかれに在りて一体にして離れず。これを「憶念」と謂う。これ正しき真実の信心なり。故に『文類』三(本典信文類)に云く、「一念はすなわちこれ専心、専心はすなわちこれ深心なり。乃至憶念はすなわちこれ

真実の一心なり」(二、九五)等と。また、「憶念」を解するに二義あり。一には謂く、能求者の機法一体・能所不二なりと信知して、時にあたりて称名し、時にあたりて礼拝す。これ機法不離の故に常に憶念の行者なり。二には

【十九丁左】

謂く、よく仏の名号を聞信して、心縁をもつて事々に歴て、行住座臥・前念後念、ただこの一念のみにして第二念なく、貪瞋煩惱のために雑乱せられざるは、これ相續念仏の故に常憶念の行者なり。二義の中に於いて、もし当家に依らば、初義をもつて必ず要と為せよ。「自然即」等と云うは、上には真因を明かし、今はその益を明かす。修因・利益・義趣、最もしかり。「自然」とは、仏を憶念する者はみずからこれを計せざれども、仏願力に因りておのずから必定に入る。故に「自然」と云うなり。また、

【二十丁右】

因を修するにみずからその益を得、これ因果自然の義なり。「即時」と云うは、二義あり。一には謂く、仏願力を聞きてよくこれを信ずる者は、念刻時日を隔てずして、すなわち定聚に入るが故に「即時」と云うなり。二には謂く、憶念の心すなわちこれ不退心の故に「即時入必定」と云う。今は初義に依るべし。「必定」とは、正定なり。または不退と云う。もしはじめに約せば、すなわちこれ信心不退なり。すなわち此土の益なり。故に『經』(大經)に「即得往生住不退転」(一、四三)と云う。もし後に約せば、すなわちこれ処不退なり。いまし彼土の益なり。故に

【二十丁左】

『經』(小經)に「衆生生者皆是阿毘跋致」(一、一〇七)と云う。三に「唯能常称」等の両句は、報恩を示す。謂く、上に憶念に由りて正定に入ること

明かす。故にこれに至りて仏恩を念報すべきことを示す。譬えば微功ある匹夫、期せざるに官禄を受けて榮えなば国家に富み、忠義、命を願わざるがごとし。今は薄地の凡属、一念の淨信をもつてすなわち不退位に臻ること、これ仏願の所為なり。たとえ身命を捨つれども、あにそれ窮まりあらんや。故に身よくこれを礼し、口よくこれを唱え、心よくこれを念じて、三業の間かつて

【二十一丁右】

己を容れざれば、念声自然にして刹那も離れざれば、念々声々ただこれ阿弥陀仏の念声にして妄心自力の称念に非ず。いま深信行者、覚えずしてこの益を蒙る。謂つべし、他力の不思議なりと。「応報大悲」等と云うは、問うて曰く、上のごとく常に仏名を称すれば、すなわち弘誓の恩を報ずるにあたるはなんぞや。答えて曰く、阿弥陀仏もと度生の願を起こしたまう。すなわちその仏心、衆生の心に入れども、

本に背き己に随いて曠劫遷転す。しかるにいま、師訓に托してすなわちかの願益を聞けば、その

【二十二丁左】

仏心より信受の心を発し、信に由りてまたこれを行ず。すなわちその信行、仏懷に契う。故に「応報大悲弘誓恩」と云うなり。「大悲」とは、阿弥陀仏に無辺の智慧ありて、無辺の衆生を哀れみたまう。故に小および中悲を揀びて大悲と云う。つぶさには慈悲と云う。すなわち抜苦与樂を義と為す。よく信行を具足する者は、かの国土に到りて、娑婆苦累、一時に頓に截つは仏悲の致すところ。故に抜苦と云う。『經』（大經）に「横截五惡趣惡趣自然閉」（一、五一）と云う。また、永く二辺の患いを離れて、鎮

【二十二丁右】

に真常の樂を受くるは仏慈の致すところ。故に与樂と云う。『小經』には、「但受諸樂故名極樂」（一、

一〇五」と云う。いまし阿弥陀仏、あまねく能信の者に向かいて、広くこの巨益を施す。故に「大悲」と云うなり。「弘誓恩」とは、いま信心を起こすそのもとを尋窮すれば、仏願に由りて起これり。末をもつて源を推して「弘誓恩」と云うなり。

天親菩薩造論說
歸命無碍光如來
依修多羅顯真実

【二十二丁左】

光闡横超大誓願

これより第二に、世親の徳化を明かすに十二句あり。中に三つ。一に「天」等の両句は、大士の造論歸仏を明かす。二に「依修」等の両句は、真実横超の徳を顯すことを釈すなり。初に造論歸仏を明かす中に、「天親菩薩」は、唐には世親と言ふ。旧には婆藪盤

豆と曰う。訳して天親と曰う。一切有部を説くに於いて出家受業す。もとは北印度よりこれに至るなり。時に無著菩薩、その門人に命じて往きて迎

【二十三丁右】

候せしむ。この伽藍に至りて、遇て会見る無著の弟子、戸牖の外に止めて、夜分ののち『十地經』を誦す。世親、聞き已みて感悟し追悔す。甚深妙法は昔未だ聞かざるところ、毀謗の愆、源、舌より発す。舌は罪のもとなり。いま宜しく断除すべし。すなわち鋸刀を執じて、まさにみずから舌を断たんとす。いまし見えて、無著、住立して告げて曰く、「それ大乘の教えは、至真の理なり。諸仏の讃えるところ、衆聖の宗とするところ、吾、汝を誨えんと欲する。しかるにいま、みずから悟れり。悟りそれ時なり」と。何れの善がこれにしかん。諸仏の聖教、断じて

【二十三丁左】

舌を悔に非ず。昔は舌をもつて大乘を毀り、今は舌をもつて大乘を讃じて過を補はば、断よりはなお善と為せん。口を杜じ言を絶して、その理、安くにか在らん。この語を作し、已みてたちまちにまた見ず。世親、命を承けて遂に舌を断ぜず。かつ無著に詣して、大乘を諍受す。ここに於いて精を研き、思いを覃じて大乘論を製ることおよそ百余部、ならびに盛りに宣行す。また『天親伝』（婆敷槃豆法師伝）に云く、「北天竺三丈夫国に国師婆羅門あり。姓は憍尸迦三子あり。同じく婆敷槃豆と名づく。訳して天親と云う。第三子、出家して

【二十四丁右】

羅漢を得。別名は北憐持。長子はこれ菩薩なり。また、出家してのちに欲を離れて、大乘空を得。阿僧伽と名づく。訳して無著と為す。兄弟、すでに別名あり。故に法師、ただ婆敷槃頭と称す。乃至天竺および余の辺土、大小乗を学する人、悉く法師『天親』

の所造をもつて学本と為す。異部および外道論師、法師の名を聞きて畏伏せずということなし。阿綸闍国に於いて命を捨つ。年終八十なり。迹は凡地に居すといえども、理実には思議難きなり⁽¹²⁶⁾（取意と。「菩薩」は肇（僧肇）の曰く（注維摩詰經）、「正

【二十四丁左】

音には菩提薩埵と云う。菩提は仏道の名なり。薩埵、秦には大心衆生と言う。大心ありて仏道に入るを菩提薩埵と名づく。正名の訳なければなり⁽¹²⁷⁾と。また、開士とも云う。または、始士と云う。荆溪（湛然）、釈して云く、「心、はじめて開く故に、はじめて発心する故に」と。また、菩提はこれ自行、薩埵はこれ化他。みずから仏道を修して他を化するが故に。法蔵の云く（般若波羅蜜多心経略疏）、「菩提、ここにはこれを覺と謂う。薩埵、ここには衆生と曰う。智をもつて上、菩提を求して、悲を用いて下、衆生を救うが故に⁽¹²⁸⁾」⁽¹²⁹⁾と。問う、この菩薩はこれ何れの位

なりや。答う、『伝』には

【二十五丁右】

「十向満位」と云う。これ四善根の極にして、初地に隣近するなり。しかれども、菩薩の行位、機に臨み、時に随いて、あるいは高位を隠して下位を示し、あるいは直ちに当位を示す。実に思議し難きなり。「造論」とは、菩薩の所造すこぶる多し。しかれども、いま『往生論』（浄土論）を指して「造論」と云うなり。「帰命無碍光」等とは、すなわちかの『論』（浄土論）に云く、「世尊我一心に尽十方無礙光如来に帰命して安楽国に生ぜんと願ず。我修多羅に依りて眞実功德相を顕す」（一、四三三）と。「無碍光」とは、この

【二十五丁左】

一を挙げて余光を摂す。その徳為ること山を徹し、壁を透け幽に通じ、冥に達して遮障して、光をして

隠没せしむることなく、隔碍して光をすることをして断絶せしむることなし。故に「無碍光」と云うなり。「如来」とは、「如」はこれ寂なり、境なり。「来」はこれ照なり、智なり。故に境智相応し、寂照同時なるはこれ「如来」の義なり。つぶさには前釈のごとし。「帰命」と言は、南山（道宣）の云く（釈門帰敬儀）、「あるいは我礼と言ひ、あるいは帰礼と言ふ。帰はまた我がこれ本情なり。礼はこれ敬いの宗致なり」と^⑩。我が徳は薄く、前境は尊高なるに由るが故に、かれを礼敬するなり。また、信

【二十六丁右】

および智に由るが故に、かれを敬う信の故に、邪に非ず智の故に敬を興す。鸞師（曇鸞）の『註論』（論註）に拠るに曰く、「帰命はすなわこれ礼拝門なり。尽十方無碍光如来はすなわこれ讃嘆門なり。天親菩薩すでに往生を願ず。あに礼せざるべけんや。故に知んぬ、帰命はすなわこれ礼拝なり。しかるに

礼拝はただこれ恭敬にして、必ずしも帰命ならず。帰命は必ずこれ礼拝なり。もしこれをもつて推せば、帰命を重しと為す。偈は己心を申ぶ。よろしく帰命と言ふべし。論は偈の義を解して汎く礼拝を談ず」(一、四五二・四五三)と。「無碍光如来はこれ讃嘆」とは、無碍

【二十六丁左】

光はこれかの仏の名義なり。口業をもつてかの名義を申ぶ。故に讃嘆に属するなり。問う、帰命はすなわちこれ礼拝の体、礼拝はこれすなわち帰命の用なり。いまし体に依りて用を起せば、用全く体を離れず。しからば鸞師(曇鸞)通局の釈、いかんが会せんや。答う、心に帰依ある者は、身、必ず礼拝を行ず。これ体より用を起せば真の礼拝なり。故に帰命は礼拝に通ず。もしまた内に帰依なき者は、外に一旦礼を行ずとも、用全く体に通ぜざれば、これ真の礼拝に非ず。故に釈に通局あり。二に「依修

【二十七丁右】

多羅」の下は、真実横超の徳を示す。「修多羅」とは、天竺の語なり。これには契経と云う。または法本と云う。それ大乘の実説はよく実相の理に契いて、またよく衆生の機に契う。故に契経と云う。また、仏の直説、よく一切の理を成じ、一切の言のもとと成り、一切法のもとと成り、一切行のもとと成る。故に法本と云う。つぶさに五種の翻不翻あり。『天台玄義』のごとし。「真実」とは、「真」は偽妄を揀び、「実」は虚仮を揀ぶ。謂く、浄土の功德莊嚴は真実智恵より起こり、すなわち法

【二十七丁左】

性に契いて二諦に順ず。故に虚仮ならず。また、信者をして必ず寂靜の土に入らしむること偽妄ならず。この義をもつての故に真実功德と云う。故に『註論』(論註)に云く、「真実功德とは、菩薩智恵清浄の業より莊嚴仏事を起こすは、法性に依り清浄の相に入

る。この法、転倒ならず、虚偽ならざるを名づけて
眞実功德と爲す。いかんが転倒ならず、法性に依り
二諦に順ずるが故に。いかんが虚偽ならず、衆生を
摂して畢竟浄に入るが故に」(一、四五五取意)と。
故に知んぬ、弥陀所成の徳を指して眞実功德と言
なり。

【二十八丁右】

「光闡横超」等とは、「光」は広なり、「闡」は暢なり。
謂く、かの『論』(浄土論)の中に広く浄土の莊嚴
功德および衆生得生の因行得果、みなこれ仏の因地
所誓修行成就より起こることを暢ぶ。故に「光闡」
等と云うなり。「横」は豎に対して言う。「超」は迂
に対して言う。この言、『論』(浄土論)文になしと
いへども、所拠の『大經』の中に「超発無上殊勝之
願」(一、一二三)と云う。あるいは「超世願」(一、
三〇)と云う。あるいは「横截五惡趣」(一、五一)
と云う。故に『論』(浄土論)のもとづくところに

譲りてかく云うのみ。「大弘誓〔誓願〕」とは、四十
八願なり。

【二十八丁左】

およそ自力の断惡所離を論ずるときは、すなわち見
を断じ思を断じて、三惡を離れ三界を離る。故に豎
断漸離にしてすなわちこれ横超に非ず。しかるに弥
陀の所願に乗じて、ただ信仏の因縁をもつて、娑婆
の五道、一時に頓に超ゆ。故に「横超大弘誓〔誓願〕」
と云うなり。

広由本願力回向
為度群生彰一心
歸入功德大宝海

【二十九丁右】

必獲入大会衆数
得至蓮華藏世界

即証真如法性身

遊煩惱林現神通

入生死藺示応化

三に「広由」等の八句は、他力回向に約して五門の義を挙ぐ。中に二つ。一に「広由」等の両句は、総じて論主（天親）に約して回向のもとを示す。二に「帰入」の下は、別して入出の五門の

【二十九丁左】

義を示す。初に「広由本願」等とは、およそそろそろの衆生のために、仏もと誓願を發して二種の回向を成ず。この回向力に因りて、論主（天親）また化他のために己が一心を彰わすこと、もと仏願に因りて起こる。故に「広由」等と云う。この下、文に（正信偈）、「往還回向由他力」（二、六三）と云うこれなり。「本願力」と言うは、「力」はこれ力用なり。謂く、仏、種々の身相神通説法を現じて、広く一切衆生を救うの力用あることは、みな昔の誓願より起

こる。譬えば、阿修羅の琴は鼓者なしといえども、
音曲自

【三十丁右】

然なるがごとし。故に「本願力」と云うなり。「回向」とは、義、往還二種に亘る。故に次に「為度群生彰一心」と云う。また、次に五門の義を出す中に、初の四句はこれ往相の義、後の二句はこれ還相の義。これはその標文なり。故によりしく二回向に亘るべし。また一義あり。学者これを察せよ。およそ当家に於いて、衆生不回向の義を立つることは謂く、衆生の願心、そのもとを窮求すれば、仏願に由りて起こり、その信に由りて行ず。故に信行共にこれ他力回向なり。いまし拠るところは、『註論』（論註）の利

【三十丁左】

行満足の章に在り。また、恵遠（浄影寺慧遠）の『大

乗義章』九に三種の回向を立つる中の第三の義、また通ずべし。「為度群生」等とは、上の四字は化他の大悲門、これ還相回向なり。下の三字は自信の智慧門、これ往相回向なり。謂く、菩薩は化他のために一心を彰す。故に『論』（浄土論）に「我一心」（一、四三三）と云うなり。もし凡夫に約せば、一心を彰すを先と為し、度衆生を後と為す。けどまた実をもつてこれを言わば、凡夫、浄土に生ぜんと欲するは、いましこれ自樂のために非ず、得生以後、

【三十一丁右】

生死海に入りてまさしく衆生を利せんがための故に、実は局分すべからざるのみ。問う、なんが故ぞ化他のために一心を顕すや。答う、二義あり。一には謂く、みずから一心を彰すことは、まさしく人をして我がごとくまた一心に仏を信ぜしめんと欲するが故に「為度群生」等と云うなり。二には謂く、菩薩、浄土に生ぜんと欲するは、忍力を成就して衆生を化

さんがための故に「為度」等と云うなり。「一心」とは、総じてこれを言えば、心性は周遍虚徹靈通す。これを散ずればすなわち万事に応じ、これを歛ればすなわち一念と成る。この故にもしは悪、もしは善、もしは聖、もしは

【三十二丁左】

凡、みなこの心に由らずということなき故に一心なり。これは心体周遍して万有を含蔵するを言う。しかれども今の所用に非ず。別してこれを言わば、「一心」とは深くかの仏を信じて、他想間雑なきの一心なり。故に鸞師（曇鸞）の云く（論註）、「無碍光如来を念じて安樂に生ぜんと願じて、心々相續して他想間雑なし」（一、四五二）と。知んぬこれ善惡渾雑の一心に非ず。ただこれ他力清浄の仏心なり。二に「帰入」の下は、別して『論』（浄土論）の出入の五門の意を明かすに五つ。一に「帰入」等の一句は、これは入の第一の近

【三十二丁右】

門の義にあたる。鸞師（曇鸞）の云く（論註）、「はじめて浄土に至るはこれ近相なり。謂く、大乘正定の聚に入りて阿耨多羅三藐三菩提に近づくなり」（一、五二四）と。故にこの句をもつて近門に属すとなり。「帰入」とは謂く、まさにまさしく真仏に帰入し、はじめて真土に趣入するの義あるべし。しかれども今はよろしく真土に至入するの義を用うべきなり。「功德大宝海」とは、すでにかの国土は宝功德を具足せざると云うことなきことは、譬えば大海の甚深広大にして無窮の徳を具足するがごとし。故に極樂を指して「功德大宝海」と云う。ここをもつて『論』（浄土論）に

【三十二丁左】

浄土の莊嚴を説きて云く、「もろもろの珍宝の性を備えて妙莊嚴を具す」（一、四三三取意）と。故に真実功德をもつてすなわち仏国土に属するなり。ま

た、仏身に約せば謂く、仏もと無量の功德を具すること大海の甚深にしてもろもろの珍宝を備えるがごとし。故に仏徳を讃じて「功德大宝海」と云うなり。すでに身土不二なり。不二をもつての故に土に約し身に約してなんの過ちがあらんや。二に「必獲」等とは、これは入の第二の入大会衆門の義にあたる。鸞師（曇鸞）の云く（論註）、「浄土に入りおわりてすなわち如来大会の数に入る」（一、五二四取意）と。故に信行を具足する

【三十三丁右】

者は、命終の時の国に至りて、清浄海衆の大会に入りて、恒に法を聞きて快樂無窮なり。故に『小經』に「諸上善人俱会一处」（一、一〇八）と云う。また、『大阿弥陀經』の大会説法分に云く、「仏の言わく、阿弥陀仏、もろもろの菩薩・声聞および天世人のために、大教を広宣し妙法を敷演する時、みな次序をもつて七宝講堂に大会す。仏、はじめもろもろの菩

薩・声聞および諸天世人のために説法すれば、欣然悦適して心に解悟を得ずと云うこと、おのおのその

【三十三丁左】

質に随いてしかも所得あり⁽¹¹⁾と。すでにかの国土の講堂は、もろもろの聖衆会るところなるが故に「大会」と云うなり。三に「得至」等とは、これは入第三の宅門の義にあたる。『註論』(論註)に云く、「衆数に入りおわりて修行安心の宅に至る」(一、五二四取意)と。謂く、人、安養世界に至りて衆会に入りてのち、質を蓮苞の内に安宅して自在無碍なることは、世の宅に依りて出入自在なるがごとし。故に「蓮華藏世界」に入るをもつてすなわち宅門に属するなり。「蓮華藏世界」とは、『華嚴』(華嚴經)第八に云く、「その時、普賢菩薩また

【三十四丁右】

大衆に告げて言わく、もろもろの仏子、この華藏莊

嚴世界海はこれ毘盧遮那如来、往昔、世界海微塵数劫に於いて菩薩の行を修する時、一々劫の中に世界海微塵数の仏に親近する時、一々の仏の淨修するところの世界海微塵数大願の嚴淨するところ⁽¹²⁾等と。『綱要』(大方広仏華嚴經疏)第八に云く、「蓮華含子のところ、これを目して藏と曰う。いま刹種および刹大蓮華のためにこれ含藏するところなり。故に華藏と云う⁽¹³⁾」と。すでに『經』は華藏所成の因を説き、『註』は

【三十四丁左】

華藏の義を明かす。いま「蓮華世界」とは、いまし極樂の別名なり。また、華藏世界の中に二十重の世界あり。けだし華藏と極樂と土これ一体なり。故に極樂を挙ぐるときはすなわち二十重の世界宛然たり。また、二十重を挙ぐるときはすなわち一々みな極樂歴然たり。しかるゆえんは、華藏世界のごとくんば略して二因あり。一には衆生に約す。謂く、如来藏

識はすなわちこれ香海、または法性海なり。無住のもとに依りてこれを風輪と謂う。または妄想の風に依りてこれを風輪と謂う。この海

【三十五丁右】

中に於いて因果相恒沙の性徳あるは、すなわちこれ正因の華なり。世出世間の未来の果法は、みな悉く含摂するが故に名づけて蔵と為す。もし法性をもつて海と為するときはすなわち、心はすなわちこれ花なり。含蔵またしかり。二に諸仏に約せば謂く、大願の風をもつて大悲海を持て、無辺の行華を生じて二利を含蔵せり。染浄の果法、重畳無碍なり。故に所感の利相、かたちかくのごとし。重々なるゆえんは、みなこれ凡聖の心、真如の性の故なり。いま弥陀に約してこれを言わば、はじめ性徳に約せば、香海とは

【三十五丁左】

法蔵性徳の蔵識海なり。次に修証に約せば、法蔵菩薩すでに六八の願風をもつて大慈悲海を持ち、無辺の行を修して心蓮華を開敷して、身土莊嚴重畳無碍なる故に、法蔵所成の極樂をもつて「蓮華蔵世界」と名づく。故に『大經』にその開發の国を説きて云く、阿弥陀仏刹は「衆宝蓮華周遍世界」（一、四一取意）と。けだし名因これ異なれども体性これ一の故に、互いに挙ぐるにすなわちその徳あり。また、『論』（浄土論）の意に拠りて、蓮華をもつて極樂に況して

【三十六丁右】

これを言わば、今この世界は大蓮華を依止と為す。謂く、蓮華は泥水の中に在りといえども泥水のために汚されざること、なおかの国に凡夫生ずれどもその塵のために染められざるのごとし。また、蓮華の性みずから開發するは、なお一切のかしこに至る者、心華を開くのごとし。また、蓮華、群蜂のために採

らる、なお極楽、衆生のために用いらるるがごとし。
また、蓮華に香淨柔軟可愛の四徳あるは、なお極楽
に常楽我淨の四徳あるがごとし。また、蓮華は衆華
の中に最勝なることは、なお安養は仏国

【三十六丁左】

中に超勝独妙なるがごとし。かくのごとく蓮華に衆
徳を備うる。なおかの国に万徳を含むがごとし。故
に「蓮華蔵世界」と云うなり。「世界」とは、『金剛
經註』(金剛般若波羅蜜經註解)に准ずるに謂く、
性中塵勞なきはすなわちこれ仏世界なり。心中に塵
勞あるはすなわちこれ衆生世界なり。故に今この穢
土は、衆生所生の塵世界なり。しかるに阿弥陀仏修
行所感の眞実報土は、無相にして相、相にして無相
なり。故に知んぬ、応用無方功德万差なるはすなわ
ちこれ世界の義なり。問う、蓮華蔵世

【三十七丁右】

界は上地の菩薩所入の土なり。いかんが乱想の凡夫
かの土に入ることを得んや。答う、もし尋常の所談
に依らば、実に謫むるところのごとし。しかれども、
この極楽は別願酬因の報土なり。故にまさしく仏願
に托する者は、仏力に乗じてすなわち至ることを得。
譬えば鳳闕殿裏、匹夫の行を禁ずれども、勅に就い
て趣入すれば、貴賤を選ぶことなきがごとし。すで
に極楽國中に於いて、なんぞ凡夫の得入を妨げんや。
四に「即証眞如」等とは、これは入の第四の屋門の
義にあたる。『註論』(論註)に云く、「宅に入りお
わりて、まさに修行

【三十七丁左】

趣〔所居〕の屋寓に生ずべし」(一、五二四取意)と。
謂く、質を蓮苞中に安托してのち、まさに眞如幽止
の理を証すべし。故に眞如を証するをもつて屋門に
属す。「即」と言うは二義あり。一に即とは即疾の
義なり。謂く、宅に入る者、眞如を証することこれ

縁、安立

即疾の故に「即証」と云う。二に即とは体不離の義なり。謂く、宅〔屋〕体すなわちこれ真如なるが故に「即証」と云うなり。「証」とは、これ能証無分別智なり。「真如法性」とは、所証寂滅の理なり。謂く、理智冥合し、始本あい契うが故に、次の句に応化の用を示す。

【三十八丁右】

ただし、証位応化よろしく分満に亘るべし。「真如法性」とは、一理異名なれども、徳に就いて名を立つ。謂く、「真如」、万法と成るが故に諸法平等なり。その性、変易なきが故に、「真如」を呼んで「法性」と云うなり。「法性」、諸法に遍ずるとき、体、虚妄を離れ、性、変改なき故に「法性」を呼んで「真如」と云う。故に『起信論疏』（大乘起信論義記）に云く、「真如と言うは、これは法性、染浄に遍ずる時、変易なき義を明かす。真とは、体、偽妄に非ず。如とは、性、改異なし」⁽¹³⁾と。つぶさに離言依言、不変随

【三十八丁左】

非安立の二種の真如あり。『起信』（大乘起信論）および『演義鈔』（大方広仏華嚴經隨疏演義鈔）に出たり。「法性」とは、『地持』一に云く、「法はすなわち軌則の義、性は不改の義なり」⁽¹⁴⁾と。謂く、一切の法性、改易なくみな軌則して修すべき故に法性と名づく。法性に二あり。一には実法性。謂く、一実の理、虚妄の相を離れ、本性平等にして変易あることなし。一切諸仏、この法性を軌としてこれを修して、正覺を成ぜずと云うことなし。これを実法性と名づく。二に事法性。謂く、世間種々の諸法はみな理に依りて施設

【三十九丁右】

建立す。いわゆる地水火風五陰等の法は、俗の所知所見に随いて、事に属すといえども、実は法性の理

を外れず。これを事法性と名づく。「身」と言うは、積聚の義なり。『聞持記』（阿弥陀經義疏聞持記）に云く、「この土の陰滅して、かの国の陰生ず。一念神識かの蓮胎に托して、前の所修の白法を攬じて性と為する。淨業の身なるが故に法性淨身と云う。この法性身は、位を摂することやや広し。凡聖および初後の心を該ぬ。今これはしばらく穢を去りて淨に生じ、父母の胞胎を仮らざるに望みて尽く

【三十九丁左】

法性淨身の所摂に属するなり」と。五に「遊煩惱」等の二句は、これ出の第五の園林遊戲地門の義にあたる。『註論』（論註）に云く、「修行成就しおわりて、まさに教化地に至るべし。教化地とはすなわちこれ菩薩自娛樂地なり。この故に出門を園林遊戲地門と称す」（一、五二四）と。「遊」と言うは遊戲なり。遊戲に二義あり。一には自在の義。菩薩、衆生を度すること譬えば、獅子、鹿を搏るに所為難からざる

がごときは遊戲に似たり。二に無度無所の義。菩薩、衆生畢竟

【四十丁右】

所有なしと観じて、無量の衆生を度すといえども、實に一衆生として滅度を得る者なきに度衆生と示すは遊戲に似たり。「煩惱林」とは、「林」は平土に藁木あるを「林」と云う。知んぬ、これ衆生平等の心地、内、無明の薫に因り、外、境界の縁に依りてしばしば煩惱を生ずること林のごとし。故に「煩惱林」と云う。しかるに衆生はここに逼悩す、仏は還りてここに遊戲す。故に「遊林」と云うなり。「現神通」とは、「現」は示現なり。謂く、不動の地より利生のために仮に通を現す。故に「現」と云うなり。「神

【四十丁左】

通」とは、『周易』に曰く、「陰陽不測これを神と謂う。寂然不動感して遂に通る」と。『瓔珞經』に云く、

「神は天心に名づく。通は恵性に名づく。天然の恵、徹照無碍なるが故に神通と云う」と。⁽¹³⁸⁾「入生死園」等と云うは、「煩惱林」はこれ生死のためにその本因を示し、「生死園」はこれ煩惱のためにその果地を示す。謂く、衆生、煩惱に由りて業を作る。業に由りて六道生死す。故に娑婆を指して「生死園」と云う。「園」はこれ林園なり。これ衆生愁苦のところなり。しかるに仏、還りて

【四十二丁右】

化導を行ずるの地なり。「示応化」とは、縁に随いて身を現じ、機に応じて法を説くのみ。上來、五念門義、文に随いて略解することかくのごとし。重ねてもつてこれを積せば二あり。一には五門修行成就の名を列釈す。二には五門成就を列釈す。はじめ五門修行成就の名を列釈すとは謂く、一に礼拝門、これは身業なり。二に讃嘆門、これは口業なり。三に作願門、これは意業なり。四に觀察門、これは智業

なり。五に回向門、これは方便智業なり。この五種業和合するときは、すなわち

【四十二丁左】

往生浄土の法門に随順して自在の業成就するなり。後に五門成就を列釈すとは謂く、一に近門、二に大会衆門、三に宅門、四に屋門、五に園林遊化地門なり。この五種門の中に、初の四種門は入の功德を成就し、第五門は出の功德を成就す。いかんが前の五念門に依りて近門等を成ずるや。謂く、一には一心に身をもつて阿弥陀仏を礼拝して、もつて信を助けてかの国に生ず。故に安樂世界に生ずることを得。これを入の第一門と名づく。これは一

【四十二丁右】

心礼仏の行をもつて近門を成ずるなり。二に一心に口をもつてかの仏を讃歎し、名義に随順して如来の名を称す。如来の光明智相に依りて修行するが故に

大会衆の数に入ることを得。これを入の第二門と名づく。これは仏の名義に依りて、讃嘆して大会衆門を成ずるなり。三に一心をもつて専念作願して、寂靜の行を修するが故に蓮華藏世界に入ることを得。これ入の第三門と名づく。これは意業をもつて寂靜の行を修して入の第三の宅門を成ずるなり。四に智恵をもつて専念觀察して、觀行を修行するが

【四十二丁左】

故にかのところに到ることを得て種々の法味樂を受用す。これを入の第四門と名づく。これは觀察の行をもつて第四の屋門を成ずるなり。第五に回向心をもつて一切衆生の苦を憐哀觀察するが故に、かしこに於いて大慈悲をもつて一切衆生の苦を觀じて応化身を示し、生死の園、煩惱の林中に回入し、神通に遊戲して教化地に至る。本願力の回向をもつての故にこれを出の第五門と名づく。これは方便智業回向心をもつての故に第五の園林遊化地門を成ずるなり。

この

【四十三丁右】

故に前の五念門の修行、後の五門の功德を成就するなり。けだし成就の功は五念門に在り。いまし五念の修行非ずんば五門の功德成じ難し。五徳成ぜずんば行その益なし。故にこの五門の徳を略示して、意、五修行を勧む。五修行の体は名号を出でず。また、他力の一心を出でず。故に論主（天親）、度生のためにはじめ一心を顯し、のち五門をもつて衆生を勧むることを明かすなり。

正信念仏偈要解卷三

【二丁右】

正信念仏偈要解卷四

釈氏西吟撰

本師曇鸞梁天子
常向鸞処菩薩礼
三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦
天親菩薩論註解
報土因果顯誓願

【二丁左】

往還回向由他力
正定之因唯信心
惑染凡夫信心発
証知生死即涅槃
必至無量光明土
諸有衆生皆普化

これより第三に鸞師（曇鸞）の徳化を釈するに十二

句あり。文を分かつに三あり。はじめ「本師」等の
両句は、世主、師を尊ぶことを釈す。

【二丁右】

次に「三藏」等の両句は、外術を棄てて淨教に歸する
ことを釈す。後に「天親」等の八句は、師（曇鸞）、
土の因果の義を顯すことを伸ぶ。はじめ世主、師を
尊ぶ中に「本師」と言うは、その人を尊ぶの言なり。
「曇鸞」とは、『続高祖（僧）伝』七に云く、「釈の
曇鸞、あるいは鸞と為る。未だその氏を詳らかにせ
ず。雁門の人なり。家は五台山に近し。神迹靈怪、
民の聴くを逸る。時に未だ志学ならざるにて、すな
わち往きて尋ぬ。つぶさに遺蹤を覲て、心神歓悦し
て、すなわち出家して内外の経籍、つぶさに文理を
^{みか}陶く。四論の仏性に於いて

【二丁左】

いよいよ窮め研くところなり。『大集經』を読むに、

恨みらくはその詞義、深密にしてもって開悟し難し。因りて注解す。文言、過半すなわち氣疾を感じ、権りに筆功を停めて、あまねく医療を行う。行きて汾州秦陵の故墟に至りて、城の東門に入りて、上、青霄を望むに、たちまち天門洞かに開くを見るに、六欲の階位、上下重複、歴然として齊しく観る。これに由りて疾愈ゆ。前作を継がんと欲するに、顧みて言いて曰く、命これ危脆、その常を定めず。本草の諸経、つぶさに正治を明かす。長年の神仙、往生間出す。心願の指すところ、

【三丁右】

この法を修習して果尅すでおわりて、まさに仏教を崇めんはまた善からざらんやと。江南の陶隱居と云う者、方術の帰するところ広博弘贍にして海内の宗重すと承けて、遂に往きてこれに従う。すでに梁朝に達す。時、大通の中なり。いまし名を通じて云く、北国の虜僧曇鸞、故に來りて奉調すと。時に所

司、細作を為さんことを疑いて推勘すれども、異詞あることなし。事をもつて奏聞す。帝の曰く、これ国を覘る者に非ず。重雲殿に引入すべし。仍りて千の迷道に従うと。帝、まず殿隅に於いて、却きて繩床に坐して、衣るに袈裟をもつてし、覆うに

【三丁左】

納帽をもつてす。鸞（曇鸞）、殿前に至りて顧て望むに、承対する者なし。高座を施張して、上に几扨を安ずることありて、まさに殿中に在り。傍らに余座なきを見て、徑に往きてこれに昇りて、仏性の義を堅つ。三たび帝に命じて曰く、大檀越。仏性の義深し。略已標叙す。疑あらば問いを賜えと。帝、納帽を却け、すなわちもつて数閑往復す。因りて曰く、今日、晩に向わんとす。明けなばすべからくあい見るべしと。鸞（曇鸞）、座より下りて、仍りて前んで直ちに詰曲重沓二十余門を出すに一も錯誤なし。帝、極めて嘆訝して曰く、この千の迷道、從來、

旧時往還

【四丁右】

疑阻す。いかんぞひとたび度して遂にいまし迷なからんと。明旦、太極殿に引入す。帝、階を降りて札接して、由来するところを問う。鸞（曇鸞）の曰く、仏法を学ばんと欲すれども、年命促減することを恨む。故に來りて遠く陶隱居に造りて、もろもろの仙術を求むと。帝の曰く、これ世を傲どり遁隱する者なり。このごろしばしば徴せども任に就かず。往きてこれに造ると。鸞（曇鸞）、尋ねて書を致し問を通す。陶、いまし答えて曰く、去る月、耳に音声を聞き、この辰、眼に文字を受く。まさに頂礼歳積むに由りて故に真応をして來儀せしむ。まさにしかり。

藤蒲を整払し、花水を具陳して、襟を端し

【四丁左】

思いを歛め、警錫を鈴聆すと。仙所に届るにおよび

て、接対欣然としてすなわち仙方十卷をもつて用いて遠意に酬う。還りて浙江に至るに、鮑郎子神と云う者あり。一鼓して浪を涌せば、七日にしてすなわち止む。まさに波はじめに値いて由りて度すことを得るなし。鸞（曇鸞）すなわち廟所に往きて、情をもつて祈告す。必ず請うところのごとくならば、まさにために廟を起こすべしと。須臾に神すなわち形を見わす。状、二十ばかりのごとき、來りて鸞（曇鸞）に告げて曰く、もし度らんと欲わば、明旦まさに得べし。願わくは言を食らざらんことをと。明晨に至るにおよんで、濤、なお鼓怒す。纔かに船裏に入れば、怙然として安靜なり。期に依りて

【五丁右】

帝に達し、つぶさに由縁を述す。勅ありて江神のために更に靈廟を起こす。因りてすなわち辞して魏境に還る。名山に往きて方に依りて修治せんと欲し、行きて洛下に至るに、中国の三蔵菩提留支（菩提流

支)に逢う。鸞(曇鸞)、往きて啓して曰く、仏法の中にすこぶる長生不死の法、此土の仙經に勝る者ありやと。留支(菩提流支)、地に唾して曰く、これ何の言ぞや。あい比するに非ざるなり。この方の何れのところにか長生不死の法ある。たとえ長年を得て少時に死せざれども、ついに更に三有に輪廻するのみと。すなわち、觀經をもつてこれに授けて曰く、これ大仙の方なり。

【五丁左】

これに依りて修行せば、まさに生死を解脱することを得べしと。鸞(曇鸞)、尋ねて頂受し、齋つところの仙方、ならびに火これを焼き、みずから他郡を行化して流靡弘広す。魏主、これを重んじて号して神鸞と爲す。勅を下して并州の大寺に住せしむ。晩にまた移りて汾州の北山石壁玄中寺に住す。時に介山の陰たに往きて徒を聚して業を蒸にす。いま鸞公巖と号するはこれなり。魏の興和四年をもつて疾に

因りて平遥山寺に卒す。春秋六十有七なり。終日に至るに臨みて、幡花幢益、高く院宇に映ず。香氣

【六丁右】

蓬勃して、音声繁鬧なり。寺に預登する者、ならびに同じくこれを囑る。事をもつて上聞す。勅してすなわち汾西泰陵の文谷に葬す。磚塔を營建してならびにために碑を立つ。今ならびに存す。しかるに鸞(曇鸞)、神宇高遠にして、機変方なく、言晤思わず動じて事と会す。心を調え氣を練り、病に對して縁を識る。名は魏都に滿つ。用いて方軌と爲す。因りて調氣論を出す。また、著作王邵を文に隨いてこれを注す。また、礼浄土十二偈を撰じて、龍樹の偈後を續ぎ、また、安樂集兩卷を撰じて等しく

【六丁左】

世に広流す。仍りてみずから号して有魏玄簡大士と爲すと云う⁽¹⁸⁾と。「梁天子」とは、「梁」は代の名な

り。「天子」とは、徳、天地を兼ねるを天子と云うなり。『白虎通』に云く、「天を父とし地を母とす。故に天子と云う」と。いま「天子」と言うは、梁の高祖を指すなり。『綱鑑玉衡』に云く、「高祖武帝、諱は衍、字は叔達、蘭陵の人なり。姓は蕭氏、齊に仕えて梁公に封せらる。爵に進みて王と為りて、竟に齊を代つ。在位四十八年、崩寿八十、修陵に葬す」と。「常向」等とは、帝すでに厚く仏乗を信ず。この故に

【七丁右】

師に値いて道を問いて深く滋味を得。ここをもつて師を尊びて、常に所居に向かいて、礼して菩薩と云うなり。迦才の『論』（浄土論）に云く、「梁の天子蕭王は常に北に向かいて曇鸞菩薩と礼す」と、これなり。次に「三藏流支」等とは、外術を捨てて浄教に帰することを釈す。この両句の文、前に引くところの『僧伝』（続高僧伝）および『仏祖統紀』に見

えたり。「三藏」とは、通称なり。「流支」とは、別号なり。謂く、経律論に達する人を通じて三藏と云うなり。法師よくこれに通徹す。故に「三藏」と云うなり。「流支」とは、『続高僧伝』に云く、「菩

【七丁左】

提流支は、魏には道希と云う。北天竺の人なり。あまねく三藏に通じ、妙に総持に入る。志、弘法に在り。広く視聴を流う。遂に道を挟んで宵に征いて遠く葱左に莅む。魏の永平の初をもつて来りて東夏に遊ぶ。宣武皇帝、勅を下して引勞す。供擬殷華にして、これを永平寧大寺に処しめ、四事まさに七百梵僧を給んとす。勅して流支をもつて訳経の元匠と為すなり」と。「浄教」とは、総じて往生浄土を説くの教なり。別しては『観無量寿経』（観経）を指す。故に『統紀』（仏祖統紀）に云く、「すなわち授かるに

【八丁右】

観経をもつてす。曰く、よくこれを称するときはすなわち三界にまた生ずることなし。六道また転ずることなし⁽¹²⁾と。「焚焼」等と云うは、流支の言下に直ちに浄教を悟りて、すなわち仙教を焼きてはじめ浄土に帰す。あにこれを焚くことの速やかなるはこれを悟ることの深きに非ずや。故に「焚焼仙教〔経〕」等と云う。すなわち『統紀』（仏祖統紀）に云く、「師（曇鸞）、その語を承けて遂に仙教を焚毀して、昼夜専ら観経を誦し、三福業を修して九品を観想す⁽¹³⁾」と、これなり。けだし仙経の説くところ、嗜欲を治して簡潔にして神を安じ、恒に山林に居いて塵境のために乱れず。これをもつて術本と為す。あに

【八丁左】

これを離れて別にその道あらんや。『抱朴子』に云く、「仙を求むる者は、要す忠孝・和順・仁信をもつて本と為すべし。もし徳、修せずしてただ方術を務め

ば、ついに長ずること得ず」と。また、唐の代宗、純陀に随いて留年の道を求む。陀（純陀）の曰く（宋高僧伝）、「心神、静を好むとも、いま塵境のために汨めば、これなんぞ冥寂に従わんや。もし簡静を離れて、外に留年を望まんと欲するは、木に登りて芙蓉を采るがごとし。それ得べけんや⁽¹⁴⁾」と。すでにあるいは忠孝・和順・仁信を本と為すと云い、あるいは簡静を要と為すと言う。しかれども、形体に屈してもつてこれを修して未だ真

【九丁右】

覺を得ず。また迷途に落ち、枉げて輪廻を受く。『淨土資糧』（淨土資糧全集）二に云く、「世人、僊を学ぶ者、万に一を得ず。たとえこれを得るともまた輪廻を免れず。形神に着するがために捨て去ること能わざるなり。かつ形神とは、いまし真性中の所現の妄想にして真覺と為るに非ず。仏家の生死自如にして拘るところなきがごとくには非ず。数百年來、僊

を学ぶ者、あにただ千万なれども、ついにみな死亡して下土に埋む。長生を求めんと欲せば浄土しくなし。浄土に到る者は寿命無量にして千古

【九丁左】

改めず。万古変ぜず。それ長生の大と為す。この法門を修することを知らずして神僊を学ぶは、あに惑わざらんや⁽¹⁶⁾（取意）と。流支（菩提流志）の授けたるところ、鸞師（曇鸞）の焼くところ、それあに宜ならざらんや。後に「天親」等の八句は、師（曇鸞）、土の因果の義を明かすことを釈す。この中に於いて二つ。一に「天親菩薩」等の両句は、総標なり。文に「論註解」と云うは、鸞師（曇鸞）、天親の『往生論』（浄土論）の義を註解するが故に、「論註解」と云うなり。「報土」とは、これ法蔵菩薩の酬因感果の土なり。故に善導（観経疏 玄義分）、「問いて曰く、弥陀浄国は

【十丁右】

はたこれ報なりやこれ化なりや。答えて曰く、これ報にして化に非ず。いかんが知ることを得る。大乘同性經に説くがごとし。西方安樂の阿弥陀仏はこれ報仏・報土なり」（一、六七四）と。『教行証』五（本典 真仏土文類）に『不空羼索神變真言經』を引きて言わく、「汝、まさに生ずべきところは、これ阿弥陀仏清浄報土なり。蓮華化生して常に諸仏を見、もろもろの法忍を証す」（二、一五八・一五九）と。すでに両經の指南、はなはだもつて分明なり。しかるに浄影（浄影寺慧遠）、天台（智顗）、元照等は、弥陀の土をもつて同居土に約す。これ所見の不同なり。皂

【十丁左】

白を諍うに由なし。ただすべからくは、真宗行者は京師今家の指すところの義に憑るべし。『因果顯誓願』と云うは、解するに二義あり。一には謂く、「報土因」

と云うは、これなんぞ法蔵菩薩の願心修行の未だ成ぜざるところなり。「報土果」と云うは、これなんぞ法蔵菩薩の願心修行、すなわち尅成するところ故に因果共に一願心に在り。ここをもつてかの『註論』（論註）に仏土莊嚴を積する時、上には仏の因位に約してこれを説き、下にはその果体に約してこれを積す。故に「註解因果顕誓願」と云うなり。二には謂く、

【十一丁右】

衆生得生の因は第十八の願より起る。また、衆生得生の果は第十一の願より発る。故に鸞師（曇鸞）の『註論』（論註）に、「信仏の因縁を土因と為るはこれ第十八の願にもとづく。また、正定涅槃を土果と為るはこれ第十一の願に依る」（取意）と。故に「註解報土因果顕誓願」と云うなり。ここをもつて下に二種の回向を明かす中に、往相はこれ報土所入の因相なり。還相はこれ報土生後の果相なり。故にこ

に在りて下の二回向の

【十一丁左】

意を総標するなり。二に別して二回向を積するに二。一に「往還」等の一句は、回向は自力に非ざること。を積す。「往」とは、往相回向。至心信樂の願に依りて成ずるなり。「還」とは、還相回向。一生補処の願に依りて成ずるなり。仏、この二徳をもつて衆生に回施するが故に、いま信心を獲得してすなわち淨土に往生するは、これ往相回向、第十八の願より起る。しかしてのち、生死に還りてあまねく衆生を済化するは、これ還相回向、第二十二の願より起る。故に『教行証』（本典 証文類）に云く、

【十二丁右】

「もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来清淨願心の回向成就するところに非ざることあることなし」（二、一三七）と。すでに因果共に願力回向に

依ると言う。故に「往還回向由他力」と云うなり。二回向義、つぶさには「註論」(論註)等のごとし。二に「正定之因」等の四句は、往相回向の意を釈す。この中に於いて三。一に「正定」の一句は、定因を指す。「唯」とは、余を簡ぶの言なり。謂く、弥陀の所願、釈迦の指南、すなわち信心をもつて別して定因と為す。故に「唯信心」と云うなり。『註論』(論註)に云く、

【十二丁左】

「信仏の因縁をもつて浄土に生ぜんと願じて仏願力に乗ずれば、かの清浄土に往生することを得れば、仏力住持してすなわち大乘正定の聚に入る」(一、四四九)と。いまし仏祖の指すところ、みな専ら信心に在り。今その勧むるところの委源、浅からず。眼を余行に転ぜず、足を他途に踐まず。一心に仏を信じて常によく念仏せば、千万もみな往生すべきのみ。二に「惑染」等の兩句は、発心証知を釈す。「惑

染」等と云うは、仏すでに善惡を簡はず。しかれども、重きを挙ぐに信知を示すことまことに由あり。よくこれ을 思え。「惑」とは、惑障

【十三丁右】

なり。「染」とは、染着なり。「惑」に二あり。『釈籤』(法華玄義釈籤)に云く、一には「理惑」⁽⁴⁷⁾と。謂く、根本無明の惑よく中道の理を障覆して、顕発すること能わざるを理惑と名づく。二に「事惑」⁽⁴⁸⁾と。謂く、塵沙の惑よく化導を障うるときはすなわち俗諦の法を覆い、見思の惑よく空寂を阻つときはすなわち真諦の法を覆うはこれ事惑なり。また、現行種子の二惑あり。『華嚴疏』(大方広仏華嚴經疏)⁽⁴⁹⁾のごとし。想うにそれ凡夫は、無明の惑に依りて中道の理に迷いてのち、六識、六塵に染着して貪恚煩惱を起こして、鎮えにもろもろの善法を障う。

【十三丁左】

故に「惑染凡夫」と云うなり。「証知生死」等と云うは、涅槃生死もとすなわち一心なり。もしこれに迷うときはすなわち、涅槃すなわちこれ生死、なお水に即して波を現するがごとし。もしこれを悟るときはすなわち、生死すなわちこれ涅槃、なお波に即して水を現するがごとし。あに生死涅槃それ別体あらんや。しかるに他は自心に向かいてまさしくこの理を証して見性成仏す。今家はしからず。まさしく宗門に約してこれを言わば、二義あり。一には仏力に約す。謂く、仏もと凡夫往生の願あり。故に専ら心を仏地に樹て、恒に

【十四丁右】

念を宝海に流せば、仏力住持して自然に煩惱を転じて菩提を成じ、生死を転じて涅槃を得えしむ。すなわちこの密益を指して「証知」等と云うなり。まさを知るべし、自己に向かいて生死即涅槃を証知せよと言うには非ざるなり。二には信解に約す。謂く、

一切衆生、仏願力を聞きて生死の凡夫かの国土に到ればすなわち涅槃を得と信知する。これを「証知」と云うなり。本文、「註論」（論註）下に出でたり。云く、「無碍とは生死すなわちこれ涅槃なりと証知する」（一、五二七）等と。ただし、文はこれを写すといえども、義はまた不齊なり。三に

【十四丁左】

「必至」の一句は、往相の意を結す。「必至」等と云うは、上には能入の信知を明かし、ここには所入の土益を示す。謂く、国益を聞きて信知を發し、信知に依りて国益を得。能入所入、互いにあい依りて、義、最もしかり。「必至」とは、「必」は決定の言なり。「至」とは到なり。信心を發す者は、決定してかれに到るが故に「必至」と云うなり。「無量光明土」とは、報仏所居の土なり。報土は智慧を体と為す。謂く、弥陀因中に於いて光明無量を誓いて、願、すでに成ずれば、釈迦、讚嘆して

【十五丁右】

無量無辺と云うなり。すなわちこの智体所現の土なるが故に「無量光明土」と云う。また、無量光明は理智の異称なり。謂く、実相は無量なれば、体と呼んで無量と云い、用を呼んで光明と云う。ただし今の所用に非ず。もし体用相即してこれを言わば、すなわち体すでにこれ無量なれば智また無量なるが故に、ひとえに光明の徳を呼んで無量光明と云う。故に「無量光明土」と云うなり。この文、『平等覺經』に出でたり。云く、「必ず無量光明土に至りて無数の仏を供養す」(一、二四一)と、これなり。宗師(親鸞)

【十五丁左】

また云く、「土はまたこれ無量光明土なり」(二、一五五)と。三に「諸有」の一句は、還相の義を結す。「諸有」とは、所化の境、広多なるが故に「諸有」等と云うなり。「衆生」とは、処々に生を受くるを

衆生と云う。あるいは衆縁和合して生ずる故に、あるいは真妄共に聚まるが故に衆と曰う。有に非ずして有に似たるを生と曰うなり。化、一方に非ず、広く十方を化す。故に「皆普化」と云う。「化」とは、転なり。悪を転じて善と為し、凡を転じて聖と為し、穢を転じて淨と為るを転化と云うなり。けだし無量光明土に至れば悲智満足す。すなわち

【十六丁右】

悲あるをもつての故に。化他のために三界に出づ。すなわち智あるをもつての故に。これがために汚染せざるなり。

道綽決聖道難証
唯明淨土可通入
万善自力貶勤修
円満徳号勸専称
三不三信誨慍懃

像末法滅同悲引

【十六丁左】

一生造惡値弘誓

至安養界証妙果

これより第四に道綽徳化を明かす中に八句あり。その中に於いて、初に「道綽」等の両句は、師（道綽）、二道の難易を判ずることを示す。次の六句は、余善を斥けて、まさしく念仏を勧むることを釈す。初に二道の難易を示す中に「道綽」とは、并州汶水の人なり。十四にして出家し、經論を習學し、晩に瓊禪師に事えて禪を學ぶ。また、志を神鸞（曇鸞）の淨土に篤くす。僧ありて定中に綽（道綽）の数

【十七丁右】

珠、七宝の大山のごとくなるを見、平居して衆のために『無量壽經』（大經）を講ず。まさに二百遍をせんとす。人、おのおの珠数を指り口常（つまぐ）に仏号を称

す。ある時は散席の響き林谷に弥つ。六時の礼敬、初より廢缺せず。念仏、日に七万をもつて限りと爲す。貞觀二年四月八日、帰寂す。聞きて赴く者、山寺に満つ。化仏、空に在りて天花下散すと見るか。「決聖道」等と云うは、およそ聖道の修行は直ちに心源を悟りて穢に処して淨を見、凡に即して聖を見るを聖道と云うなり。その教え数あり。共に

【十七丁左】

もつて修し難し。故に「聖道難証」と云うなり。その旨、『安樂集』に見えたり。「唯明」等と云うは、専ら他途を簡びて、ひとえに念仏を勧むるを「唯明」等と云うなり。『安樂集』に「ただ淨土の一門のみありて通入すべき路なり」（一、六一二）と云うこれなり。問う、念仏はなんぞこれ通入の法なりや。謂く、弥陀に弘濟の願あり。故に衆生、能求の志ありて、ひとえに願力に乗じて一心念仏すれば、捨命以後速やかに蓮台に躋ることはなお水路、航に乗ず

れば、人を簡はずしてその功をもつてその処に到るがごとし。これあに通入

【十八丁右】

の法に非ずや。次に「万善」等の六句は、余善を斥けてまさしく念仏を勧むることを釈するに二つ。一に余善を斥く。文に「万善」等と云うは、四諦六度の行を指して「万善」と云うなり。およそこれらの行法、如実に勤修して倦厭なくんば成仏すべしといえども、しかれども生死の凡夫、迷心、境を遂げて頭出頭没してつぶさに輪転を歴て、かつて一念奮励して出離を求願することなく、またその忻厭を遮りて証果成じ難し。ここをもつて不堪の機に対していまし綽公、余善を修することを斥く。すなわち『安樂集』に云く、

【十八丁左】

「もしここに於いて進趣せんと欲せば、勝果階い難し」

(一、五七五)と。故に「貶勤修」と云うなり。二に「円満」の下は、専念仏を勧むることを釈す。この中に於いて三つ。一に「円満」の一句は、まさしく専念を勧むることを釈す。「円満徳号」等と云うは、四字の洪名は万善の所成なる故に、善、円かならざることなく、徳として満たずと云うことなし。内に具して外待つことなきをもつて「円満徳号」と云うなり。『經』(大經)に讀じて「無上功德」(一、六九)と云う。その利益、はなはだ深広なり。故に専称を勧むるなり。二に「三不」の一句は、信不を誨ることを釈す。謂く、上に専念を勧むることを顕すが故に、

【十九丁右】

ここに於いて仏に就いて信不あることを誨りて、像末の機を悲引することを釈すなり。「三不」等と云うは、『安樂集』上に云く、「一には信心淳からず、若存若亡の故に。二には信心一ならず、決定なきが

故に。三には信心相続せず、謂く、余念間つ故に。たがいにあい収撰す。もしよく相続せばすなわちこれ一心なり。ただよく一心なれば、すなわちこれ淳心なり。この三心を具してもし生ぜずは、この処あることなし」(一、六〇六)と。この文中に初より「収撰す」に至るまでは「三不」を明かす。「もしよく」の下は「三信」を勧む。故に「三不三

【十九丁左】

信」と云うなり。いまし「三不」の義、心境時に約してこれを言わば、一には謂く、心弱の故に行不行あり。これは心弱に約して言う。二には謂く、信一ならざる故に行一准ならず。これは境多に約して言う。三には謂く、信相続せざる故に行に退転あり。これは時に約して言う。また二義あり。一には挙一撰余の義。謂く、もし信心淳からざるときはすなわち信心一ならず、もし信心淳からざるときは信心相続せず。また、もし信心一ならざればすなわち信心

淳からず、もし信心一ならざればすなわち信心

【二十丁右】

相続せず。また、もし信心相続せざるときはすなわち信心一ならず、もし信心相続せざるときはすなわち信心淳からず。これ互いに一を挙げて余を撰するなり。二に順逆展転相成の義。謂く、順に上より下に至り、逆に下より上に至りて、互いに展転してあい成ずるなり。その義知るべし。「誨慰勸」とは、解するに二義あり。一には謂く、この釈もと鸞師(曇鸞)の『註論』(論註)に出でたり。しかるに綽公(道綽)、この釈を引きて人を勧む。これ教化の丁寧なる故に「誨慰勸」と云うなり。二には謂く、かの『集』(安樂集)に云く、「若能相続」(一、六〇六)の下は

【二十丁左】

新たに三信を建てて人を誨うることを、これ『註論』(論

註）より委曲なる故に「誨慰勸」と云うなり。「像末」等とは、師（道綽）の悲引を挙ぐ。「像末」とは、時の変衰を言うなり。「法滅」とは、正軌の滅を言うなり。「像末」とは、如来、世を去りて、教法、世に住するにいまし三時の不同あり。一に正法の時とは、正はなお証のごとし。謂く、如来滅後五百年の間、その教を稟けて、すなわちこれを行じてよく証果を得。これを正法の時と云うなり。二に像法の時とは、像は似なり。謂く、如来滅後一千年の間、教あり

【二十一丁右】

行あり。正法の時に似たり。しかれども証果なき、これを像法の時と云うなり。三に末法の時とは、二時すでに過ぎて万年の間、教法、世に垂れて修行証果の者あることなし。これを末法の時と云うなり。三時の年数、異説すこぶる多し。つづさに『末法灯明記』のごとし。「同悲引」とは、「同」はこれ同等

なり。「悲」はこれ悲哀なり。「引」はこれ引導なり。謂く、道綽禪師、生をこの時に受けて等しく二時の衆生を悲哀して、すなわちこれを引導するに念仏をもつてす。故に「同悲引」と云うなり。また、

【二十一丁左】

同体の悲を起こして、すなわち念仏をもつてこれを引導す。故に「同」と云うなり。三に「一生」等の両句は、これ機法の勝益を明かすなり。「一生造悪」はこれその悪機、「弘誓」はこれその法なり。「安養証果」は、これその勝益なり。謂く、尽形造悪の者も弘誓願に値えば、かの仏力をもつて浄土に往生してすなわち証果を得。その利益、余善に超えたり。あに勝益に非ずや。故に『安樂集』に云く、「たとえ一形悪を造れども、ただよく心を繫けて専精に常によく念仏すれば、一切の諸障自然に消除して定め

【二十二丁右】

往生を得」(一、六一三)と。「一生」、または一形と云うなり。それ形あれば生あり、生あれば形あり。『集』(安樂集)の中に一形と云い、また一生と云うなり。「値」とは、聞きて信ずるを今は「値」と云う。もし信ぜずんばなお値わざるがごとし。「安養」とは、これ心身安穩の地なり。義寂の云く、「心を安んじ身を養うを安養と云うなり」と。⁽⁹⁾「妙果」とは、滅度を指すなり。謂く、信心の行者かの国に往生すれば、大患永く去りて塵縁染むことなく、寂靜湛然として生に非ず滅に非ず、言語道斷、心行所滅す。故に涅槃の果を

【二十二丁左】

号して「妙果」と云うなり。

善導独明仏正意

矜哀定散与逆惡

光明名号顯因縁

開入本願大智海

行者正受金剛心

慶喜一念相應後

与韋提等獲三忍

【二十三丁右】

即証法性之常樂

これより第五に善導の徳化を釈するにすなわち八句あり。中に於いて三あり。一に「善導」等の一句は、師(善導)、仏意に達することを釈す。二に「矜哀」等の三句は、その由を明かす。三に「行者」以下の四句は、行者の修因得益を明かすことを釈す。一に師(善導)、仏の正意に達することを明かす中に「善導」とは、姓は朱、臨溜の人なり。少して出家して大蔵に入りて、手に信てまかせ巻を採るに『觀無量壽經』(觀經)を得。いまし専ら十六の妙觀を修し、および廬山に往きて遠公(廬山寺慧遠)の

【二十三丁左】

遺跡を觀て、豁然として思いを増し、跡を終南に遁れて數載、宝閣瑤池を觀ること宛然として目の前に在り。^(四)貞觀年中に西河の綽禪師九品道場を見て、喜びて曰く、これ真に入仏の津要なり。余の行業を修するに迂僻にして成じ難し。ただこの法門のみ速やかに生死を超えん。ここに於いて勤篤精苦し昼夜礼誦す。四衆を激發して毎に室に入り、互跪念仏す。力竭るに非ざれば休まず、出でるときはすなわち人のために淨土を演説す。三十余年、しばらくも眠らず、好食を厨に送り、粗惡自奉す。およそ

【二十四丁右】

觀施あれば用いて『弥陀經』を写すこと十万卷、書くところの淨土の変相三百余、廢る伽藍および墮たる堵塔を見てはみな悉く营造し、燃灯続明す。三衣瓶鉢、人をして持たしめず。行くときは衆と共にせず、世事を談ずることを恐れるなり。その化に従う

者、はなはだ衆し。『弥陀經』を誦すること十万より五十万遍〔卷〕に至る者あり。念仏日課万声より十万声に至る者あり。念仏三昧を得、淨土に往生する者、よく紀述することなし。ある人問う、念仏して淨土に生ずるや。師（善導）の曰く、汝が所念のごとく汝が

【二十四丁左】

所願を遂げん。いましみずから念ずること一声すれば、一光明ありてその口より出づ。十より百に至れば、光もまたかくのごとし。その『勸世偈』に曰く、漸々雞皮鶴髪し、看々行步龍鍾す。たとえ金玉、堂に満つともあに衰殘病苦を免れんや。汝に任す、千般の快樂も無常ついにこれ到来す。惟徑路^{ひぢり}の修行あり。ただ阿弥陀仏を念ず。たちまちに人に謂て曰く、この身は厭うべし。吾まさに西歸せんとすと。いまし柳樹に登り、西に向かいて祝して曰く、願わくは、仏、我を接し、菩薩、我を助け、我をして正

念を失せず

【二十五丁右】

浄土に往生せしめたまへと。言はおわりて身を投じて逝しぬ。高宗皇帝、その事を知り、寺額を賜て光明と曰うと云うのみ。⁽⁸⁾「独明仏正意」とは、善導、証を二土の仏に乞いて、古今の義を指定して、新たに『観經義疏』（観經疏）を制して、定散の諸機をして自力の迷心を翻し、浄土に生ずるの因縁を顕して、本願の智慧海に開入せしむること、殆ど釈迦の密旨を開顕し、また弥陀の願意を吐露すること、すこぶる他師に独歩するを「独明」と云うなり。故に「矜哀」等の三句は、仏の正意に明なるゆえんを積すなり。

【二十五丁左】

けだし両仏の意を開顯することは、まず釈迦の密旨を開顯することを言わば、釈迦、はじめ韋提の請に応じ

て定散の諸善を説くといえども、仏の本意はまさしく念仏に在り。故にのちに定散の二法を閣きて選びて念仏をもって阿難に付属す。大師（善導）、この蹟旨を覚知して、上來「雖説」等の釈を設けることは、符を釈迦仏に合す。故に釈迦の密旨を開顕すと云うなり。次に弥陀の願意を露すことを言わば、阿彌陀仏すでに余行をもって往生の業と為さず、ただ念仏をもってすなわち

【二十六丁右】

正業と為す。ここをもって大師（善導）、余善を廢して雜行と名づけ、嫌いて「万不一生」と云う。念仏をもって正業と名づく。嘆じて「千無一失」と云うことは、券を弥陀仏に合す。故に弥陀の願意を吐露すと云うなり。二に「矜哀」の下はその由を明かす。謂く、仏の正意に明なる由なり。この中に於いて三つ。「矜哀定散」等の一句は、その所哀の機類を挙ぐ。「矜哀」とは、これ師（善導）の悲心を指

すなり。「定散逆惡」とは、所哀の機品を顯すなり。「定散」とは、「玄義」（觀經疏 玄義分）に云く、「定はすなわち慮りを息めてもつて心を凝らす。

【二十六丁左】

散はすなわち惡を廢してもつて善を修す」（一、六五七）と。謂く、「息慮凝心」とは十三の定機、「廢惡修善」とは三福九品の散機なり。ただし、散機に於いて二種あり。一に善人、二に惡人なり。善人と言ふは三福および上六品の機なり。惡人と言ふは下三品すなわち五逆十惡の機なり。総じて『觀經』十六觀の機を挙げて「定散逆惡」と云うなり。問う、何故ぞ逆惡の機に雷同して定散の機を哀愍するや。答えて曰く、定散の機類は本願の正機に非ず。故に

【二十七丁右】

迦、はじめ誘引のためにしばらく三輩の諸善を説く

といえども、のちにはすなわち三類の善品を廢してもつて念仏に歸して、三輩共に「一向專念無量寿仏」と説く。『觀經』またしかり。この故に大師（善導、定散の諸機をして他力の一心を勧めてすなわち往生を得せしむ。故に「玄義」（觀經疏 玄義分）に云く、「まさしく仏願に託すればもつて強縁と作るに由りて、五乗をして齊しく入らしむることを致す」（一、六七七）と。これあにかの機を矜哀するに非ずや。二に「光明」等の一句は、正意の法を顯す。謂く、「光明名号」は一切衆生、淨土に生ずるの因

【二十七丁左】

縁なるが故に兩仏の正意ここに在り。故に正意の法と云う。いまし仏の光明はこれ縁なり、仏の名号はこれ因なり。すなわち光明の縁に依りて仏の名号を信ず。故に光明はこれ縁たり、名号はこれ信因なり。また、光明の摂益を聞きてすなわち仏の名号を信ずるが故に、光明はこれ名号を信ずる縁なり、名号は

これ正定の因たり。故に光明名号をもって浄土に生ずるの因縁たることを顕すなり。『礼讃』（往生礼讃）に云く、「光明名号をもって十方を摂化す。ただ信心をして求

【二十八丁右】

念せしむは、上に一形を尽くし下十声等に至るまで、仏願力をもって往生を得ること易し」（一、九一五）と。また、内外因縁に約してこれを言わば、光明名号をもって外縁と爲し、真実の業識を内因と爲してかの国に往生す。この旨、『教行証』（本典）に見えたり。三に「開入」等の一句は、正意に開入せしむることを釈す。謂く、大師（善導）、光明名号はこれ浄土に生ずるの因縁なることを開顕して、衆生をして本願の智海に入らしむることを釈すなり。「本願大智海」とは、善導の『礼讃』（往生礼讃）に「弥陀智願海は深広にして涯底なし」（一、九二四）と云うこれなり。ただし、

【二十八丁左】

「本願大智海」の言は、互いに綺えてその義を成ず。謂く、「本願」はいまし常の願に非ず。「大智」を成ずるの「本願」なるが故に。また、「大智」はすなわち常の智に非ず。大願所成の智なるが故に「本願大智」と云うなり。「大智海」とは、かの仏すでに昔因に酬いて尅成するところの智慧は、いまし三乗の測り知るところに非ず。故にこれを大海の深広に譬えて「大智海」と云う。『經』（大經）に「如来の智慧海は深広にして涯底なし。二乗の測るところに非ず。ただ仏のみ独り明了なり」（一、四六）と云うこれなり。三に「行者」以下の四句は、

【二十九丁右】

修因得益を明かす。この中に於いて二。一に「行者」等の両句は、修因を明かす。文に「正受」と言うは、『妙宗鈔』（観無量寿仏経疏妙宗鈔）に云く、「邪倒を離れて所縁を領納す。故に正受と名づく」と。⁽¹³⁾『円

覚略疏」(大方広円覚修多羅了義経略疏)に云く、「諸受を受けざるを名づけて正受と為す」⁽⁵⁾と。今は謂く、「正」とは、修雑に対するなり。「受」とは、受決不動なり。謂く、雑行の念を超え雑修の念を離れて、他力仏智を受決す。その心、動ぜざることなお金剛のごとし。故に「正受金剛心」と云うなり。「金剛」とは、『集註』(金剛般若波羅蜜經註解)に云く、「金剛は金中精堅なる

【二十九丁左】

者なり。剛、金中に生じて百鍊すれども消せず。この堅利を取りてよく万物を断壊す⁽⁶⁾(取意)と。五金みなこれを金と謂う。およそただ金と言うは鉄と謂うなり。いまし体用を分かちてこれを言わば、『略疏』に云く、「その体、最も堅にして、物、壊すること能わず。その用、最も利にしてよく一切の物を壊す」と。すなわちこの信心、また体用を具すること、いわんや知るべし。また、「金剛心」に一往再

往の義あり。謂く、一往は行者に約し、再往は仏徳に約するのみ。「慶喜一念」等とは、「慶喜」は心身の悦子を顕すなり。「一念」とは、

【三十丁右】

これに信行の一念ありといえども、今はよろしく行の一念なるべし。ゆえんは何となれば、上の「正受金剛心」はまさしく安心を明かす。故にこれはよろしく行の一念に属すべし。弥勒付属の文に云く(大經)、「それかの仏の名号を聞くことを得ることありて歡喜踊躍して乃至一念せん」(一、六九)と。今師(親鸞)、この一念を指して行の一念と云うなり。けだし「正受」以下の二句、付属の文とその義あい同じ。故に行の一念に属すべし。また、信心無二なる、これを「一念」と云うもまた通すべきなり。「相應」とは、いま「慶

【三十丁左】

「喜一念」は、全く金剛の信心より起れば信心の外、更に行なければ信行一体にして、すなわちあい離れざるを「一念相應」と云う。また、金剛心を受得して、心身に悦予を發して仏心と相應して、能所即一なるを「一念相應」と云うなり。二に「与韋提」の両句は、初後の得益を明かす。謂く、初に「与韋提」の一句は、これ初益なり。謂く、信心歡喜してはじめて三忍を獲るが故にこれ初益なり。「韋提」つぶさには韋提希と云う。『法華疏』（法華文句）に云く、「これには思惟と翻す⁽¹⁶⁾」と。『同記』（法華文句記）に「思勝⁽¹⁷⁾」と云うなり。

【三十一丁右】

「等」とは、二義あり。一には斉等、二には平等。斉はすなわち多法を總收す。平はすなわち一体無差なり。謂く、「忍」に喜悟信あれども、信心歡喜の者はかれと等しく得る。また、三忍ただ一信心にして差別なきを名づけて平等と為し、また斉等と為す。

「三忍」と云うは、一には喜忍。謂く、仏の威力をもつて心に淨土の快樂を見て、歡喜して無生を得。故に名づけて喜忍と為す。故に『經』（觀經）に云く、「仏力をもつての故に乃至かの国土の極妙の樂事を見て、心に歡喜するが故に、時に応じてすなわち無生

【三十一丁左】

法忍を得ん」（一、八一）と。二に悟忍とは謂く、心にかの世界の広長の相および仏身、ならびに二菩薩の相を見て、歡喜の信心を生じて廓然として仏智を大悟するを名づけて悟忍と為す。故に『經』（觀經）に云く、「時に応じてすなわち極樂世界の広長の相を見、仏身および二菩薩を見ることを得て、心に歡喜を生じて未曾有なりと歎じて廓然大悟して無生忍を得」（一、九八）と。三に信忍とは、すでに二忍を得るはこれすなわち信心成就の故に名づけて信忍と為するなり。問う、韋提所得の忍は、これ何の位ぞや。答う、あるが

【三十二丁右】

云く、初地無生。あるが云く、十信無生。もし宗家（善導）に准ぜば、十信と言うべし。故に「序分義」（觀經疏 序分義）に云く、「十信の中の忍にして、解行已上の忍には非ず」（一、七一七）と。後に「即証」の一句は、後益を示す。謂く、はじめ三忍を獲て、のち法性の四徳を得るが故にこれは後益なり。「法性」等と云うは、「玄義」（觀經疏 玄義分）に云く、「この穢身を捨ててすなわちかの法性の常樂を証す」（一、六五七）と。今の拠るところこれなり。「法性」とは、凡聖所具の妙理なり。故に『所胎經』（菩薩從兜術天降神母胎說広普經）に説く、「法性は大海のごとし。是非ありと説かず。凡

【三十二丁左】

夫賢聖人平等にして高下なし⁽¹⁸⁾」と。つぶさには前釈のごとし。「常樂」とは、四徳の中に二を挙げて余を摂するなり。二の生死なきを「常」と為し、二辺

を受けざるを「樂」と名づく。いまし「法性」はこれその総体、「常樂」はこれその別用なり。もしこれに迷うときはすなわち四徳を転じて四倒と為す。もしこれを悟るときはすなわち四倒を転じて四徳と為す。その体これ一なれども、迷悟に由りてその名異なり。しかるに一念称名の行者は、現には韋提と等しく三忍を得、のちかの国に詣して永く四倒を転じて常樂我淨を得ること、その利益

【三十三丁右】

浅からず。行者よくこれを思え。問う、「即証」の言は現証に約するに似たるいかん。答う、本文すでに穢身を捨てもつてのちすなわちこれを証すと云う。今文、なんぞ現証に約さん。ただかの国に到れば、即速にこれを証するを「即証」と云う。もしまた現証に約せば二義あり。後者これを察せよ。

源信広開一代教

偏婦安養

勸一切

【三十三丁左】

専雜執心判淺深
報化二土正弁立
極重惡人唯称仏
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲無倦常照我

これより第六に信師（源信）の徳化を明かすに二。
一に「源信」の一句は、師（源信）の藏經を見るこ
とを釈す。二に「偏婦」の下は、自行化

【三十四丁右】

他を明かす。初に師（源信）の藏經を見ることを釈
する中に「源信」とは、和州葛木郡の人なり。父は
正親と名づく。母は清氏。父母、郡の高尾寺に詣し

て子を求む。母夢みらく、一僧、一顆の玉をもつて
これに与うと。すなわち妊むことあり。信（源信）、
幼い時、夢みらく、高尾寺に藏あり。藏中に数鏡あ
り。あるいは大、あるいは小、あるいは明、あるいは
暗。一沙門、暗小鏡を取りて信（源信）に付す。
信（源信）の曰く、この小暗鏡、何の用かあらん。
大明の者を得んと欲す。沙門の曰く、ただこの鏡を
もつて横川に至りて瑩磨せよと。覺めて大いに怪し
む。また、

【三十四丁左】

横川は何れのところなることを知らず。のちに叡山
に上がりて、慈恵に事えてはじめて夢事を思ひて、
精を励まして修学す。天性聰明にして頭蜜の教を究
む。五種法師、四種三昧、薫練せずと云うことなし。
壮歳を過ぎて栄名を忌む。屏きて横川に居て、専ら
著述をもつて己が任と為す。いわゆる『一乗要決』『往
生要集』『阿弥陀経略記』等これなり。見に世に行

わる。しかしてのち、寛仁元年六月十日、弟子をして所疑を問わしむれば、専ら西方往生を期してすなわち定印を結びて端坐遷化する。寿七

【三十五丁右】

十六の時、天楽、空に響き、奇香、四に散す。山中の草木みな西に靡く。つぶさには『元亨釈書』のごとし。「広開」等とは、信（源信）すでに一切経を開闢す。故に「広開一代教」と云うなり。二に「偏帰」等の下は、自行化他を明かす。中に於いて二あり。一に「偏帰」等とは、これ師（源信）の自行を示す。謂く、信師（源信）、諸土の中に於いてひとえに心を安養に栖まして、諸行の中に於いて専ら行を六字に唱うを「偏帰安養」と云う。故に『要集』（往生要集）の序に云く、「顕蜜事理の業因、その行これ多けれども、

【三十五丁左】

利智精進の人は未だ難と為さず。予がごときの頑魯の者、あにあえてせんや」（一、一〇一三）と。二に「勸一切」の三句半は、化他を明かす。中に於いて三。一に「勸一切」とは、広く勸むるなり。謂く、念仏の法門は智愚を簡はず、貴賤を論ぜず。願は諸機に逗じ、益は衆類を該ぬ。ここをもつて諸経論の中に往生極楽を説くの要文を採録して『往生要集』を造りて広く厭離穢土欣求浄土の旨を勸むるを「勸一切」と云う。すなわち、『要集』（往生要集）の序に、「往生極楽の教行は、濁世末

【三十六丁右】

代の目足なり。道俗貴賤、たれか帰せざらん者をや」（一、一〇一三）と云うこれなり。二に「專雑」の下は、その法を出す。この中に於いて二。一に「專雑」の二句は、二執を判じてその所趣を弁ずることを釈す。謂く、「專雑」は能行の粹雑、「二土」は所至の浅深なり。「専」とは純一無雑の義。謂く、願

生浄土のために一心に純ら念仏を修して、余行を雑えざるが故に純一無雜と云うなり。「雑」とは渾修不牢の義なり。謂く、念仏に渾して余行を修して、その心堅牢ならざる故に渾修不

【三十六丁左】

牢と云うなり。「執心」とは、広く「専雑」および「浅深」「報化」に通ずるなり。「浅深」とは、「浅」は雑修および化土に亘るなり。「深」とは専修および報土に亘るなり。謂く、専修執心の者はよく仏願に契いて報土に生ずるは、これすなわち得の故に「判深」と云うなり。雑修執心の者は仏誓にあたられれば化土に生ず。これすなわち失の故に「判浅」と云うなり。「報化」とは、「報」はこれ阿弥陀仏修因感果の土なり。すなわち専修の者、いましこれに生ずるなり。「化」とは仏しばらく機のために仮立してしかも実

【三十七丁右】

土に非ず。すなわち、辺地懈慢の土なり。雑修の者いましこれに生ずるなり。つづきには『経』および『群疑』（釈浄土群疑論）『要集』（往生要集）等に出でたり。「正弁立」とは、かの『集』（往生要集）中に、行に専雑を弁じ、土に報化を立てて、まさしく専雑の得失を明かす。故に「正弁立」と云うなり。二に「極重」の一句は、重きを挙げてこれを勧むなり。謂く、重きを挙げてこれを勧むるときは、すなわち軽き者その中に在り。「極重」等とは、五逆の罪人を指すなり。いまし念仏功德は、よく極障を除滅するに堪えたり。ここをもつて称仏を勧む。『選択集』に云く、「下品下生はこれ五逆

【三十七丁左】

重罪の人なり。よく重罪を滅するに堪えたり。故に極悪最下の人のためには極善最上の法を説く」（一、一三〇四取意）と。ただし、今文の拠るところは、

まさしく『要集』（往生要集）に在り。三に「我亦在彼」の下は、己に約して光益を示すに三つ。一に「我亦」の一句は、摂益を示す。『要集』（往生要集）に云く、「一々の光明、あまねく十方世界の念仏の衆生を照らして、摂取して捨てたまわず。我またかの摂取の中に在りて、煩惱に眼を障えられて、見ることも能わずといえども、大悲倦むことなくして、常に我が身を照らしたまう」（一、一一〇八）と。「我亦」とは、人を兼ねて己を挙ぐるを「我亦」と云うなり。

【三十八丁右】

「摂取」とは、かの光の中に在りてあい離れざるを「摂取」と云うなり。二に「煩惱」の一句は、その咎を示すなり。「煩惱」はこれ能障。「眼」はこれすなわち所障。「雖」の言、義、両句を兼ね。謂く、煩惱すでに障えて仏光を見ざれども、如来よく見るが故に「雖」と云うなり。また、大悲無倦にして常に行

者を照らすは、義、凡夫これを見るに等し。故に「雖」と云うなり。「煩惱」と云うは、二種あり。『智度論』（大智度論）に云く、一に「内着煩惱^(四)」と。謂く、身見辺見等の諸煩惱、内心に於いて了せずして執着を起す。故に

【三十八丁左】

内着煩惱と名づく。二に「外着煩惱^(四)」と。謂く、貪瞋痴等の煩惱、外境に於いて了せずして貪着を起す。故に外着煩惱と名づく。つぶさに根本随眠等あり。『瑜伽地論』（瑜伽師地論）および『華嚴疏』（大方広仏華嚴経疏^(四)）のごとし。三に「大悲」の一句は、光の恒照を示す。「大悲」とは、三縁の中に無縁の悲なり。無縁最も勝るが故に「大悲」と云うなり。『仏性論』に云く、「悲とはしばらく救いて真に救うこと能わず^(四)。大悲とはよく永く救済して恒に捨離せず^(四)」と。故に万徳の中に如来ただ大悲を用いて力と為す。いま

【三十九丁右】

倦まずして常にこれを照らすは、ただ大悲ある故に
「大悲」等と云うなり。

本師源空明仏教

憐愍善惡凡夫人

真宗教証興片州

選択本願弘惡世

還來生死輪轉家

決以疑情為所止

速入寂靜無為樂

【三十九丁左】

必以信心為能入

これより第七に空師（源空）の徳化を明かすに八句あり。この中に於いて文を分かつに四あり。初の一句は智徳を示し、次の一句はその悲徳を示し、後の二句は二徳の用を釈し、四にはその所勸を述す。は

【四十丁右】

じめ「本師源空」の一句は、智徳を嘆ずとは謂く、師（源空）、仏教に達するはこれ智あるが故。故にこの一句は、その智徳を嘆ずるなり。「本師」とは、前釈のごとし。「源空」とは、法の諱、俗姓は漆氏、作州の稲岡の人なり。父は時国、母は秦氏。

父母に子なし。いまし仏神に禱り、母、夢みらく、剃刀を吞むと。覚めてのち夫に語る。夫の曰く、もし汝、有身せば糴染の人ならんと。因りて孕む。夢事を感思して、母、葷腥を茹わず。長承二年四月七日に生ず。頭、圩にして稜あり、眼、黄にして光あり。宗族これを異とす。四・五歳に至りて起居挙止動すれば西方に向かう。菩提寺觀覺これを聞きて、乞い得て弟子と為す。性善にして習学す。覺（觀覺）、嘆じて曰く、この器兒、なんぞ草沢に居すべきやと。ついに延暦寺の源光に与う。光（源光）の曰く、この

【四十丁左】

童子、駿驥なり。吾が朽索の韁はだすところに非ず。すなわち功德院の皇円に授け、落髮受戒せしむ。三・四年を歴て台教を通徹す。また、黒谷の睿空に詣して蜜乗および大乘律を稟く。およそ大藏、経律、他宗の章疏、検閲せざと云うことなし。空（源空）、教義に於いて所得あるをもつて、その所蘊を質さんと欲して、蔵俊に謁して唯識を述し、慶雅に至りて花嚴を演ぶ。二師共に師承に踰えたりと嘆ず。これに因りて俊（蔵俊）は供物を贈り、雅（慶雅）は章疏を寓す。空（源空）、恒に曰く、我、書を読むこと三遍すればその義おのずから彰れて

【四十一丁右】

勞苦せざるのみと。また、八宗の外、仏心宗に涉り、すなわち九宗の教相に於いてはなはだ幽致を得。晩に信師（源信）の『往生要集』を見てはば所業を棄つ。のち導師（善導）の『観経義』（観経疏）を見

て浄土専念の宗を倡う。承安四年、黒谷を出でて洛東吉水に盛りに専修念仏および円頓戒を弘む。縑素靡然として風に向かう。嘉応帝召して宮に入れて受戒す。藤の相国兼実、浄土の義を延問う。空（源空）、『選択集』を述してこれに呈す。顕真、静嚴、明遍等みな

【四十二丁左】

空（源空）に従いて専念の道を問う。空（源空）、法華三昧を修すれば、白象、道場に現ず。また、華嚴を読む几案の下に異しき小蛇あり。これ華嚴護神なり。その徒信空、怖異して払い去る。翼日、蛇またここに在り。またこれを避く。その夜、信空夢みらく、我はこれ華嚴の護神なり。畏れることなかれ。しかしてのち、蛇、几下に蟠る。經（華嚴）竟わりて蛇来らず。皇太后上西門院の請に依りて、空（源空）、七日説戒すれば門屏の上に一蛇あり。七日の間、屈盤して動ぜず。空（源空）、藤の相公に謁して

【四十二丁右】

聆談す。しかして相国、庭に下り空（源空）の背から拝して左右に語りて曰く、空公（源空）の頭上に円光を現す。子等これを見るやと。対して曰く、見ずと。これより相国、ますます敬重を加う。建久九年正月一日、一七日念仏を修す。第二日に水想観成ず。第七日に地想観の中に瑠璃地現す。二月一七日、これを修す間、水想、地想、宝樹、宝地、宮殿等現す。正治二年二月の間、地想等の五観を修して、意に随いて顕現す。元久三

【四十二丁左】

年正月四日、弥陀、観音自在、大勢至の三像、室中に現す。五日、三像また現す。建永二年春二月、讃州に竄ぜられ、居すること五稔、吾、謫に因らずんばいかでか専修の道を海裔に布かんや。また、我が一化の幸いなり。建暦元年、詔追あつて都城に赴く。同じき二年正月に大谷に居し、心、常ならず。その

徒、弥陀の像をもつてその床頭に安す。しばらく臨終の助標と為り、空（源空）の曰く、この像の外に別に見るところありやと。諸弟子の曰く、なしと。空（源空）の

【四十三丁右】

曰く、我十余年来、荐りに極楽界の相および仏菩薩真身を視る。今また、仏、来ると。二十五日の朝、高く仏号を唱う。諸徒、助和す。久しくしてみな音声囀る。空（源空）独り衰えず。午の時に至りて、頭北面西にして、「光明遍照」の文を誦して、春秋八十にして逝す。「明仏教」とは謂く、然師（法然）、五五年を歴て広く藏経を覽て、一切経の中に於いて選んで浄土の一経を資けて、踵を古に継ぎて浄土宗を建てて、濁世道俗をして専修念仏を行ぜしむるは、

【四十三丁左】

あにこれ二尊の玄底を窺い得るに非ずや。故に「明

仏教」と云うなり。二に「憐愍」の一句は、その悲徳を示す。謂く、悲心深重の故によく凡夫人を哀憐す。三に「真宗」の下は、二徳の用を釈す。この中に於いて二。一に「真宗」の一句は、その智用を釈す。謂く、片州に教証を興すること、いまし智に非ずんばなんぞ堪えん。智徳、興教に及ぶはすなわちこれその用なり。「真宗」とは、総じてこれ仏教の名なり。故に『圭峯疏』（孟蘭盆經疏）に云く、「まことに真宗未だ至らざるに由りて周孔にしばらく心を繋けしむ⁽¹⁶⁾」と。これその証なり。別してはこれ当

【四十四丁右】

宗の略名、すなわち念仏法を指す。故に大師（善導）の云く（觀經疏 散善義）、「真宗値い匠し」（一、七九三）と。『五会讚』（五会法事讚）また同じ。言うところの「真」とは、これ真実なり。すなわち法蔵菩薩真実願樂の成ずるところの果名なり。故に念仏を指して真実と名づくるなり。『經』（大經）に「分

別顯示真実之際」（一、一八）と云う。また（大經）、「恵以真実之利」（一、一九）と云う。すなわち両処の真実、共に念仏を指すなり。「宗」とは、『弘決』（止観輔行伝弘決）に云く、「宗は尊なり、主なり、元なり、頂なり⁽¹⁶⁾」と。今この『經』（大經）に尊たり、主たり、元たり、頂たるは念仏に非ずんばなんぞや。故に『玄義』（觀經疏 玄義分）に

【四十四丁左】

「念仏三昧を宗と為す」（一、六六〇）と。およそ諸經おのの宗あり。華嚴の法界、大品の空恵、維摩の不思議解脱、法華の一仏乗、涅槃の常住仏性、みなこれを宗とし、これを要とすのみ。つぶさには宗趣と云う。故に法蔵の云く（般若波羅蜜多心經略疏）、「言の貴ぶところを宗と云う、宗の歸するところを趣と云う⁽¹⁶⁾」と。これに五対あり。『円覚疏』（大方広円覚修多羅了義經略疏）および『起信論疏』（大乘起信論義記⁽¹⁶⁾）のごとし。この五対をもって浄土の經

に況してこれを言わんも可ならんをや。株宏の『弥陀経疏鈔』(阿弥陀経疏鈔⁽¹⁰⁾)にかれを用いてこれを釈す。もし況してこれを言わば、よく宗に契いて

【四十五丁右】

言うべし。「教証」とは、「教」はこれ能詮、三部の妙典なり。「証」はこれ所証、往生涅槃なり。「興」は、これ起なり。「片州」とは、日域なり。謂く、空師(法然)、日域に於いて念仏往生の義を興起す。故に「教証興片州」と云うなり。二に「選択」の一句は、その悲用を釈す。謂く、惡世の弘法は悲に非ずんばなんぞ堪えん、悲徳、弘教に及ぶはすなわちこれ用なり。「選択本願」とは、「選択」は取捨を義と為す。謂く、法蔵菩薩、諸土の中に於いて、国土の麁惡を選り捨てて、国土の

【四十五丁左】

善妙を択取してもつて本願と為す。みづから六度を

行じてすなわち本願を成す。故に「選択本願」と云う。この『経』(大経)には「撰取」(一、二三)と説き、『大阿弥陀』(大阿弥陀経)には「選択」(一、一二七)と云う。その言異にしてその義一なり。四に「還来」の下は、所勧を述するに二。「還来」の両句は、生死の因果を述す。「還来」とは、往きてまた来るを「還来」と云うなり。謂く、六道の間、善惡の業に依りて往きてまた還り、還りてしかもまた往くを「還来」と云う。すべて六道を指して「生死家」と云うなり。これ苦果の地なり。「決」とは決定なり。「疑

【四十六丁右】

情」とは孤疑の情識なり。「所止」とは、所為を示すなり。謂く、生死輪転の家には決定するにこれ疑情の止むるところ、故に「疑情」はこれ因なり。「生死」はこれ果なり。故に果家を挙げてもつてその因を示す。二に「速入」の両句は、浄土の因果を述す。

謂く、無為の樂はこれ所得の果地、眞実信心はこれ能入の因なり。故にその果地を挙げて、その修因を示すなり。「寂靜」と云い、「無為」と云うは、共にこれ淨土の徳なり。またこれ涅槃の別名なり。故に『法事讃』に

【四十六丁左】

云く、「極樂無為涅槃界」(一、八四三)と。今の本文には、「涅槃城」(一、一二九八)と云う。総じてこれ弥陀の淨土を徳に寄せて名を立つ。「寂靜」とは、「寂」は体、有無を絶して法界に周遍し、「靜」とは中、妄染なく、相、生滅に非ず。また、極樂世界は寂体即照の故に諸莊嚴を建立す。照用即体の故に寂滅を損なわず。故にかの土の徳を指して「寂靜」と云うなり。「無為」とは、これ分別心の作為するところに非ず。故に「無為」と云う。これ自然眞常の樂を号して「無為樂」と云うなり。

【四十七丁右】

弘經大士宗師等
拯濟無辺極濁惡
道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

二に「弘經」等の四句は、結勸なり。中に於いて二。一に「弘經」等の二句は、総じて七祖の徳を結すなり。「道俗」の両句は、時衆を挙げて勸む。「弘經」等とは、「弘經」の言、「太」「大」「土」と「宗師」とに亘る。謂く、七祖、踵を継いで淨教を布演し

【四十七丁左】

仏化を輔弼す。故に「弘經」と云うなり。「大士」の言は、龍(龍樹)・天(天親)の二祖を指す。『集解』(四教義集解)の上に云く、「大士とは大にして小に非ず。士とは事なり。運心廣大にしてよく仏事を建つ。故に大士と云う」^(四)と。また、上士と云う。あるいは声聞を呼んで大士と云う。あるいは菩薩を

呼んで大士と云う。あるいは仏を呼んでまた大士と云うなり。「宗師」の言は、鸞（曇鸞）・綽（道綽）・導（善導）・信（源信）・空（法然）の五祖を指す。すなわち、これを尊称して「宗師」と云うなり。「等」とは、もし斉等の義に依らば、等しく「大士」と「宗師」とを用いて「等」と云うなり。もし平等の

を挙げて勸む。「道俗」とは、縑素なり。総じて四部衆を摂するなり。「時衆」とは、在世および後來に通ずるなり。「唯可」等とは、己を隠して説くを七祖に推して「唯可」等と云うなり。

【四十八丁左】

【四十八丁右】

の義に依らば、二祖と五祖と差心を存せず。道俗を済救するが故に「等」と云うなり。「拯済」等とは、賢愚選ぶことなく広く救うを「拯済」と云うなり。「無辺」とは、際限なきなり。「極濁悪」とは、悪人を挙げて善人を摂す。二に「道俗」等の両句は、時衆

正信念仏偈要解卷之四 終

明暦四季仲春吉旦
五条橋通丁子屋
西村九郎右衛門刊

※本稿は、一般財団法人本願寺派教学助成財団よりいただいた、「令和二年度教学研究資金助成」の助成金交付により遂行した研究の一部である。この場をかりて深く御礼申し上げます。

註

- (1) いまは刊行年の異なる『首書正信偈要解』を含む。
- (2) 祐俊『学寮造立事付以後法論次第』「承応二年、永照寺西吟所作之正信偈ノ抄、已年夏ヨリ板ニオコシ、其年ノ暮ニ出来申、ハヤ二百部余リスリ立申候由候へ共、若其中ニ法流ニ違背ナト在之テハトテ、于今不被出候」(『龍谷大学三百五十年史』史料編一、四一)の記述、及び玄智『三卷本浄土真宗教典志』「正信念仏偈」(中略)：要解四卷 承応二年癸巳。西吟照黙作」(『真宗全書』七四、二三三・二三四頁)の記述に依る。なお、『学林沿革志』の明暦二年の事蹟の項には、「此冬西吟前年著ス所ノ正信偈要解板成ル。本山其或ハ宗義ニ違フ所アルヲ慮リ、未タ發行ヲ許サス」(『学林沿革志』一三丁右・左)とあり、『正信念仏偈要解』の成稿を明暦元年(一六五五)としている。
- (3) 龍谷大学蔵刊本『正信念仏偈要解』巻四の刊記に「明暦四季仲春吉旦／五条橋通丁子屋／西村九郎右衛門刊」とある。
- (4) 【脚注2】の祐俊『学寮造立事付以後法論次第』の記述に依る。なお、鈴木法琛『真宗学史』には、「祐俊の記に『正信偈要解』は承応二年已に二百部ばかりは上梓したれども…(中略)…恐慮して公然世に出さず、明暦三年まで七年間延期して世に出せりといふ」(『新編真宗全書』教義編二〇所収、五二三頁)とある。ここにいう「明暦三年」及び「七年間延期」は誤りとみるべきである。
- (5) 玄智『大谷本願寺通紀』巻三「五年四月。命御堂衆善巧寺空吟…(中略)…開講学林。統領衆。空吟講正信偈要解」(『真宗全書』六八、六四頁上)の記述に依る。
- (6) 『大谷本願寺通紀』以降には「韻書」とあるが、『龍谷講主伝』には「韻略」とある。よって、ここにいう『韻書』とは『礼部韻略』「一〇三七」を指すと考えられる。
- (7) 禅教を学んだ場所や時期は、諸誌の記述に若干の差異がみられる。
宗朗『龍谷講主伝』「登恵日山学禅教二年」(『真宗全書』六六、四一四頁)
玄智『大谷本願寺通紀』巻八「後居州恵日山。学禅三年」(『真宗全書』六八、一八五頁)
海藏『浄土真宗僧宝伝』巻二「公恵日山学禅教二年」(『真宗全書』六六、四四五頁)

龍護『清流紀談』巻上「東福寺に入て禪教を学ぶ」（『真宗叢書』史伝編一〇、三二六頁）

未詳『古徳事蹟伝』「東福寺に入て禪教を学ぶ」（『真宗全書』六六、三三八頁）

- (8) 『大谷本願寺通紀』に「寛永十一年二月。進内陣位」（『真宗全書』六八、一八五頁）とある。いまは了尊の筆記とされる『西光寺古記』「少弐号西吟／寛永十一甲戌二月十日御一家に召、同二月廿八日内陣へ出仕、于時三十才」（『西光寺古記』三三七頁）の記述に依った。

- (9) 西吟と雪窓宗崔の関係については、多くの指摘がある一方で、交渉の時期は必ずしも明確でない。若干の考察を三浦真証氏が『西吟教学の研究―近世初期教学の課題』（二〇一一）の中で試みている。この点について筆者の私見を述べておきたい。『破邪問答』『謹奉訴状』には、「此の八九年ほど已前に、豊後の雪窓と申す禪僧処へ、罷り越へ、一箇月あまり禪法を承り候」（『真宗全書』五〇、四三頁）とある。この記述に従えば、承応二年（一六五三）より八・九年ほど前、すなわち寛永二年（一六四四）から正保二年（一六四五）の頃に両者の接点があったと考えられる。当時既に京都妙心寺の第一座であった雪窓宗崔は、寛永二年（一六四四）から正保二年（一六四五）にかけて一度豊後臼杵の多福寺に帰郷していることから、この時期に二者間の交渉があったと考えるのが穏当である。

- (10) 学林の創建時期については、諸誌の記述に若干の差異がみられる。

祐俊『学寮造立事付以後法論次第』（寛永十六年己卯、学寮初造立）（『龍谷大学三百五十年史』史料編一、三頁）

宗朗『龍谷講主伝』（寛永十六年、野村氏法名宗句者、創建学費于本山。冬十一月落）（『真宗全書』六六、四一四頁）

玄智『大谷本願寺通紀』巻三「十二月京三条銀座宗句捐貲創学費於茶所西〔本堂西北〕」（『真宗全書』六八、五七頁）

玄智『大谷本願寺通紀』巻八「寛永十六年十一月、本山創建学費」（『真宗全書』六八、一八五頁）

海蔵『浄土真宗僧宝伝』巻二「寛永十六年、野村氏法名宗句者、創建学費于本山。冬十一月成」（『真宗全書』六六、四四五頁）

龍護『清流紀談』巻上「寛永六年本山学校ヲ創建シ」（『真宗叢書』史伝編一〇、三一六頁）

未詳『古徳事蹟伝』「寛永六年、本山学校ヲ創建シ」（『真宗全書』六六、三六八頁）

なお、『清流紀談』及び『古徳事蹟伝』は、学林を寛永六年（一六二九）の創建とするが、これは誤りである。

(11) 准玄の名前及び能化就任時期については、諸誌の記述に若干の差異がみられる。

祐俊『学寮造立事付以後法論次第』「寛永十七年庚辰、出口光善寺、四月十五日より和讃初」（『龍谷大学三百年史』史料編一、三頁）

宗朗『龍谷講主伝』「寛永十六年…（中略）…明年三月十日修仏事。法主親臨会。時河州出口光善寺准勝領衆」（『真宗全書』六六、四一四頁）

玄智『大谷本願寺通紀』卷三「明年十一月十四日、慶讃講堂、宗主修之。…（中略）…始置講主称能化職。…（中略）…河内出口光善寺准玄任之…（中略）…明年夏講和讃」（『真宗全書』六八、五七頁）

玄智『大谷本願寺通紀』卷八「寛永十六年十一月、本山創建学覺。良宗主以圓雅有学業。擢為講主。称曰能化」（『真宗全書』六八、一八五頁）

海蔵『浄土真宗僧宝伝』「寛永十六年…（中略）…明年三月十日修法会。法主親臨会。時河州出口光善寺准勝領衆」（『真宗全書』六六、四四五頁）

龍護『清流紀談』「寛永六年本山学校を創建し、河州光善寺准勝を以て学頭とす」（『真宗叢書』史伝編一〇、三一六頁）

未詳『古徳事蹟伝』卷二「寛永六年、本山学校ヲ創建シ、河州光善寺准勝を以て学頭とす」（『真宗全書』六六、三六八頁）

前田恵雲『本願寺派学事史』「寛永十六年十一月、講堂の慶讃会を行ひ、河内出口の光善寺准玄を以つて講主に任じて、能化職と称せり」（『新編真宗全書』史伝編一〇所収、五二六頁）

鈴木法琛『真宗学史』「十一月十四日良如上人臨場ありて慶讃の式を行ふ。上人河内国出口光善寺准玄を擢て能化職を命じ一派の学事を掌握せしめ」（『新編真宗全書』教義編二〇所収、六四四頁）

井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』「寛永一七年には准玄が能化職に命ぜられた」（『真宗本派学僧逸伝』一一五頁）
准玄の名前については、『龍谷講主伝』に「河州出口光善寺准勝領衆」とある。同書をうける『浄土真宗僧宝伝』

にも同じ記述がみられる。これらを受ける『清流紀談』『古徳事蹟伝』には、「河州光善寺准勝を以て学頭とす」とあるが、准勝は准玄の父の名であるため、いまはこれを取らない。

また、准玄の能化就任時期については、次の二通りの見解に分かれる。

A、寛永一六年（一六三九）学林創建、同年一二月慶讃会、同年准玄能化就任、翌寛永一七年（一六四〇）

准玄和讃開講

B、寛永一六年（一六三九）学林創建、翌寛永一七年（一六四〇）三月慶讃会、同年准玄能化就任、同年准玄和讃開講

いまは『学寮造立事付以後法論次第』及び『大谷本願寺通記』の記述に依り、「A」の立場を採用した。

(12) 祐俊『学寮造立事付以後法論次第』「光善寺は去三月、学寮普請之前、河州出口之私宅へ下り被申候」（『龍谷大学三百五十年史』史料編一、五頁）の記述に依る。

(13) 祐俊『学寮造立事付以後法論次第』「永照寺、正保四年丁亥九月十二日より能化に成り、講談仕り」（『龍谷大学三百五十年史』史料編一、五頁）の記述に依る。

(14) 西吟が定めた法制十二条は、次の通りである。

一、最昏念仏勤行不_レ可_レ退

一、大衆互以三人我_二相罵者随義可_レ出_二罰錢_一若行_レ杖可_レ出_二僧中_一

一、講談時必可_二出座_一

一、大衆各可_レ著_二宗衣_一

一、僧出市中行惡事随宜可増其役重過執衣可出僧中

一、大衆頭巾及綿服各加制

一、大衆各上見下如父愛其子下見上如子事其父

一、有病僧各發慈悲心敢無違逆病人勿憎嫌病人又自貧不能求飯食湯藥等治事告上座司教出常住物随病僧望可与飯食湯藥等

一、各歸_二其国_一調_二諸商人債_一

一、除「剃刀小刀」不_レ可_レ蓄_二劍類_一

一、無符者不_レ可_レ出_二門外_一

一、托鉢可_二如法_一

(15) 『学林沿革史』には、「七月十八日家老上原数馬宗主の命を奉じて帰京し、翌日学寮撤去の令を発す。時に在学六十余名、即日移転し、二十日先ず講堂を毀ち、次に南北所化寮を毀ち二十三日東方川端の長寮を撤し、二十四日表門を毀ち東北二方に葦籬を設けしめ、依て宗主の教を以て京都門末を諭すに撤去の所由を以てし、尋て汎く諸国に及ぶ」(『学林沿革史』一丁左・一二丁右)とある。

(16) 『学林沿革志』「時に議者往々月感の法難を以て吟の奉聴無狀を尤むる者あり。吟、之を知る故に嫌を避るの意あり」(二三丁右)の記述に依る。

(17) 西吟の没年は、諸誌の記述に若干の差異がみられる。

祐俊『学寮造立事付以後法論次第』「寛文三年癸卯…(中略)…西吟、七月十五日死去 時五十九歳」(『龍谷大学三百五十年史』史料編一、四六頁)

宗朗『龍谷講主伝』「寛文四年八月十四日、告衆曰、我明日当逝。今与汝等訣」(『真宗全書』六六、四一四頁)

玄智『大谷本願寺通紀』卷三「寛文…(中略)…三年…(中略)…七月十五日、講主西吟歿」(『真宗全書』六八、六一頁)

玄智『大谷本願寺通紀』卷八「寛文…(中略)…三年八月十五日、於永照寺、端座合掌向西念仏而化。年五十九歳」(『真宗全書』六八、一八五頁)

海蔵『浄土真宗僧宝伝』卷二「寛文四年八月…(中略)…十五日正午沐浴著新浄衣、端坐合掌、向西念仏、庵然遷化。歳五十九」(『真宗全書』六六、四四六頁)

龍護『清流紀談』卷上「寛文四年八月…(中略)…十五日午の尅、沐浴し浄衣を著し端坐念仏して往生せらる。世寿五十九歳」(『真宗叢書』史伝編一〇、三一六頁)

未詳『古徳事蹟伝』「寛文四年八月…(中略)…十五日午の尅、沐浴し浄衣を著し、端坐念仏して往生せらる。世寿五十九歳」(『真宗全書』六六、三六八頁)

(18) 西吟にみられる自性唯心の思想に関わる問題としてこのことに言及する先行研究は次の通りである。

西谷順誓『真宗教義及宗学之大系』（興教書院、一九二一）二〇二頁

鈴木法琛『真宗学史』（『新編真宗全書』教義編二〇、一九九四、原著一九二〇）五二二頁

日高達善『宗学史上に於ける行信論』（『龍谷大学論叢』二五三、一九二三）八三頁

普賢大円『原始宗学に於ける聖浄論の展開』（『宗学院論集』八、一九三二）一二七頁

普賢大円『真宗行信論の組織的研究』（興教書院、一九三五）一二三頁

神子上恵龍『真宗仏性論の諸説と批判』（『真宗学』一三・一四、一九五五）一〇二頁

普賢大円『良如上人時代の宗学』（『龍谷大学論集』三七〇、一九六二）三二頁

瓜生津隆雄『良如上人時代の本派宗学と願生帰命』（『龍谷大学論集』三七〇、一九六二）六六頁

普賢大円『真宗教学の発達』（永田文昌堂、一九六三）一二三頁

村上速水『真宗教学史における仏性論議の回顧と問題点』（『龍谷大学論集』四〇四、一九七四）七四頁

平田厚志『西吟教学の思想的意義』（『伝道院紀要』二二・二三、一九七九）五八頁

平田厚志『承応闘牆』考―承応・明暦期の西本願寺教団をめぐる問題状況―（二葉憲香編『国家と仏教』

近世・近代編所収、一九八〇）一五・一六頁

広瀬南雄『真宗学史稿』（法藏館、一九八〇）三二頁

藤田真証『西吟における真如理解について』（『印度学仏教学研究』五六―一、二〇〇七）六二頁

藤田真証『西吟教学に関する一試論』（『真宗学』一一八、二〇〇八）八六・八七頁

(19) 普賢大円『原始宗学に於ける聖浄論の展開』（『宗学院論集』八、一九三一）一二七頁

(20) 神子上恵龍『真宗仏性論の諸説と批判』（『真宗学』一三・一四、一九五五）一〇二頁

(21) 西谷順誓『真宗教義及宗学之大系』（興教書院、一九二一）二〇一・二〇二頁

(22) 鈴木法琛『真宗学史』（『新編真宗全書』教義編二〇、一九九四、原著一九二〇）五二二頁

神子上恵龍『真宗仏性論の諸説と批判』（『真宗学』一三・一四、一九五五）一〇二頁

瓜生津隆雄『良如上人時代の本派宗学と願生帰命』（『龍谷大学論集』三七〇、一九六二）六六頁

(23) 西吟における行信論の問題としてこのことに言及する先行研究は次の通りである。

西谷順誓『真宗教義及宗学之大系』（興教書院、一九二一）二〇〇・二〇一頁

鈴木法琛『真宗学史』（『新編真宗全書』教義編二〇、一九九四、原著一九二〇）五二三頁

日高達善『宗学史上に於ける行信論』（『龍谷大学論叢』二五三、一九二三）八八・八九頁

普賢大円『真宗行信論の組織的研究』（興教書院、一九三五）二二頁

(24) 拙著『西吟の行信論研究』（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』四一、二〇一九）一九〇・二二頁

(25) 西吟における三業惑乱の思想的由来としてこのことに言及する先行研究は次の通りである。

大原性実『願生帰命説並に三業歸命説の起源とその伝統』（『龍谷大学論叢』二六三、一九二五）五五頁

(26) 梅原真隆『西吟と信願論』（『顕真学报』一六、一九三六）三〇・三五頁

(27) 西吟における仏性論の問題としてこのことに言及する先行研究は次の通りである。

普賢大円『原始宗学に於ける聖浄論の開展』（『宗学院論輯』八、一九三二）一二六・一二七頁

神子上恵龍『真宗仏性論の諸説と批判』（『真宗学』一三・一四、一九五五）一〇三・一〇四頁

普賢大円『真宗教学の發達』（永田文昌堂、一九六三）一一一・一一三頁

村上速水『真宗教学史における仏性論議の回顧と問題点』（『龍谷大学論集』四〇四、一九七四）七三・七四頁

頁

(28) 普賢大円『原始宗学に於ける聖浄論の開展』（『宗学院論輯』八、一九三二）一二七頁

普賢大円『良如上人時代の宗学』（『龍谷大学論集』三七〇、一九六二）三三頁

普賢大円『真宗教学の發達』（永田文昌堂、一九六三）一一一・一一三頁

(29) 西吟における仏身仏土論の問題としてこのことに言及する先行研究は次の通りである。

普賢大円『原始宗学に於ける聖浄論の開展』（『宗学院論輯』八、一九三二）一二八頁

普賢大円『真宗教学の發達』（永田文昌堂、一九六三）一一四頁

(30) 西吟の往生論としてこのことに言及する先行研究は次の通りである。

普賢大円『原始宗学に於ける聖浄論の開展』（『宗学院論輯』八、一九三二）一二八・一二九頁

普賢大円「良如上人時代の宗学」(『龍谷大学論集』三七〇、一九六二) 三二頁

普賢大円『真宗教学の発達』(永田文昌堂、一九六三) 一一四頁

- (31) 問う、凡夫かしこに到りて速疾に等覺を成じて、最後品を斷じて妙覺を証するや。答う、これは本願の利益の次を述して未だ速疾の義を言わず。ただ具惑の常人、信仏の因縁をもつてすなわち不退の土に到れば、必ず三界に流転して生を受くることなきが故に、ついに畢竟成仏の果を得ることを取る。

- (32) 普賢大円「原始宗学に於ける聖淨論の開展」(『宗学院論輯』八、一九三一) 一二九頁
(『正信念仏偈要解』二、二九丁右・左)

- (33) 日高達善「宗学史上に於ける行信論」(『龍谷大学論叢』二五三、一九二三) 八九頁

- (34) 飯島憲彬「知空の文献引用手法の特色」(『印度学仏教学研究』六二―二、二〇一四)

三浦真証「戦国期真宗教学の研究―慶秀『正信偈私記』を通して―」(内藤知康編『親鸞教義の諸問題』永田文昌堂、二〇一七)

- (35) 『大正』四七、三二八中

- (36) 『大正』四七、三二八下

- (37) 『大正』五四、一一一下

- (38) 『淨聖全』一、三二

- (39) 『大正』一二、五七五下

『大正』一二、八二二下

『淨聖全』二、二〇六

- (40) 『大正』三四、二二八中

- (41) いま西吟は、智顗『法華文句』を取意して引用するが、その文言は延寿集『宗鏡録』(『大正』四八、九〇二下)に殆ど一致する。したがって、今は『宗鏡録』からの孫引きと考えられる。

- (42) 『大正』三四、一二七中

- (43) 『大正』四四、二〇三中

- (44) 『大正』四六、一一中
- (45) 『大正』三七、一〇二下
- (46) 『大正』三七、一八六中
- (47) 『大正』三七、三五六下・三五七上
- (48) 『大正』五四、一一六七上・一一八一中
- (49) 『大正』四四、二八六下
- (50) 『大正』三七、二三〇下
- (51) 『大正』五七、六七七中・下
- (52) 『大正』四七、七九中
- (53) 『大正』一二、三三〇中
- (54) 『大正』四七、七九中
- (55) 『大正』四七、七九中
- (56) 『大正』四七、七九中
- (57) 『浄聖全』一、一〇八
- (58) 『大正』四七、七九中
- (59) 『浄聖全』一、一〇七
- (60) 『大正』三七、三四三上
- (61) 『大正』四七、六一上
- (62) 『正統』八二、二四五上・下
- (63) 『大正』三三、五八〇下
- (64) 『大正』三三、五八〇下
- (65) 『大正』三三、五八〇下
- (66) 『浄聖全』一、四四一

- (67) 『浄聖全』一、四四一・四四二
 (68) 『浄聖全』一、四四二
 (69) 『大正』一二、五三八下
 (70) 『大正』一六、四九六上
 (71) 『大正』四五、一五七中・下
 (72) 『大正』三三、五五四中
 (73) 西吟は「成等覚証大涅槃」の「大涅槃」を釈す上で、『涅槃經』、『楞伽經』、僧肇『肇論』、法蔵『般若波羅蜜多心経略疏』を引用する。こうした引用文のならばは、法雲編『翻訳名義集』（『大正』五四、一二二八下）に準ずるものであり、また文言も殆ど一致する。したがって、今は『翻訳名義集』からの孫引きと考えられる。

- (74) 『大正』一〇、八四六下
 (75) 『大正』三七、二八〇中
 (76) 『大正』九、五四中・下
 (77) 『大正』四七、一四五下
 (78) 『大正』一九、一二八上・中
 (79) 『浄聖全』一、三三
 (80) 延寿『宗鏡録』（『大正』四八、四八〇下）の『大智度論』引用文に文言の一致がみられる。したがって、いまは『宗鏡録』からの孫引きと考えられる。

- (81) 『大正』一四、五三九下
 (82) 『大正』二六、二三六中
 (83) 『大正』五四、一〇八二中
 (84) 『大正』五四、一〇六一中
 (85) 『大正』四四、二五五下
 (86) 『正統』一〇八、一〇一〇上

- (87) 『大正』三七、一〇九中
- (88) 『大正』九、四三三上
- (89) 『大正』一〇、七二中
『大正』三七、一一一下～一二二上
『浄聖全』一、六三五
- (90) 『大正』五四、一一三四下
- (91) いま西吟は『唯識論』として引用するが、その文言は道誠集『釈氏要覽』（『大正』五四、二九四下）に一致する。
したがって、今は『釈氏要覽』からの孫引きと考えられる。
- (92) 『大正』四六、六八五中
- (93) 『大正』三一、二九中
- (94) 『浄聖全』一、七九一
- (95) 『大正』九、六二中
- (96) 『大正』九、三三三中
『大正』九、一六八上
- (97) 『大正』九、一〇上
『大正』九、一四三上
- (98) 『大正』三〇、三一七中・下
- (99) 『大正』五三、八一七下
- (100) 『大正』二九、二一中
- (101) 『正統』八六、九二下・九三上
- (102) 『大正』三七、一一六中
- (103) 『大正』三七、三六三下
『浄聖全』二、九二

- (104) 『大正』三一、二九中
- (105) 『正統』八二、二四五上
- (106) いまは功德施造地婆訶羅訳『金剛般若波羅蜜經破取著不壞仮名論』の引用と考えられる。
- (107) 『大正』二五、八九二下
- (108) 龍谷大学蔵刊本『大唐西域記』二、一丁右～二丁右
- (109) 『大正』五一、二一〇上
- (110) 『日本書紀纂疏』一、一丁左～四丁右
- (111) 『大正』一六、六二七下
- (112) 『大正』五〇、一八五中
- (113) 『大正』五一、二一〇上・中
- (114) 西吟は「釈迦如来楞伽山」の「釈迦」を釈す上で、『披華』、『発軫』を引用する。こうした引用文のならば、法雲編『翻訳名義集』（『大正』五四、一〇五九上・中）に準ずるものであり、また文言も殆ど一致する。したがって、今は『翻訳名義集』からの孫引きと考えられる。
- (115) 延寿集『宗鏡録』（『大正』四八、七四一下）および法雲編『翻訳名義集』（『大正』五四、一一五一下）に殆ど文言の一致する『華嚴論』の引用文がある。したがって、今は『宗鏡録』あるいは『翻訳名義集』からの孫引きと考えられる。
- (116) 『大正』五四、二六一中
- (117) 『大正』四八、四七七中
- (118) 智顗『法華玄義』（『大正』三三、七七九中）に文言の一致する『唯識論』の引用文がある。したがって、今は『法華玄義』からの孫引きと考えられる。
- (119) 子璿録『起信論疏筆削記』（『大正』四四、三二三上・中）に「大乘」の解釈として包含・運載の文言がみられる。一方、法蔵『大乘起信論義記』（『大正』四四、二四五中）に文言の一致がみられるため、いまは『大乘起信論義記』の取意とみるのが妥当ではなからうか。

- (120) 『大正』一九、一四二下
- (121) 『正統』一二、七六八下
- (122) 『正統』一七、八四一下
- (123) 『大正』三四、一一八上
- (124) 『大正』三五、七一二中
- (125) 『大正』四七、一七七中
- (126) 『大正』五〇、一八八中～一九一上
- (127) 『大正』三八、三二八中
- (128) 『大正』三三、五五二下
- (129) 西吟は「天親菩薩造論説」の「菩薩」を釈す上で、僧肇『注維摩詰經』、湛然の釈、法蔵『般若波羅蜜多心經略疏』を引用する。「菩薩」を釈す上でのこれらの引用文のならばは、法雲編『翻訳名義集』（『大正』五四、一〇六〇中～下）に準じることから、今は『翻訳名義集』からの孫引きと考えられる。

- (130) 『大正』四五、八六二下
- (131) 『大正』一二、三三四中
- (132) 『大正』一〇、三九上
- (133) 『大正』三五、五七八下
- (134) 『大正』三三、一二三七下
- (135) 『大正』四四、二四七下
- (136) 浄影寺慧遠『地持論義記』卷一の引用と思われるが、同書は卷三下、四上および五下のみ現存する。
- (137) 『浄全』五、六五二下

(138) 西吟は「遊煩惱林現神通」の「神通」を釈す上で、『周易』、『瓔珞經』を引用する。「神通」を釈す上でのこうした引用文のならばは、法雲編『翻訳名義集』（『大正』五四、一一七七上）に準じることから、今は『翻訳名義集』からの孫引きと考えられる。

- (139) 『大正』五〇、四七〇上、下
 (140) 『大正』四七、九七下
 (141) 『大正』五〇、四二八上
 (142) 『大正』四九、二七三中
 (143) 『大正』四九、二七三中
 (144) 『大正』五〇、八九〇下・八九一上
 (145) いま西吟は葛洪『抱朴子』、および『宋高僧伝』を引用する。こうした引用文のならばは、法雲編『翻訳名義集』『大正』五四、一〇八〇中・下)に準じ、またその間の文言も殆ど一致する。したがって、今は『翻訳名義集』からの孫引きと考えられる。

(146) 『正統』一〇八、四七一上・下

『正統』一〇七、七四〇下・七四一上

(147) 『大正』三三、八九二上

(148) 『大正』三三、八九二上

(149) 『大正』三五、五五八下

(150) 義寂『無量寿経述義記』は散逸しているため、今は良忠『観経疏伝通記』(『大正』五七、六二一中)からの孫引きと考えられる。

(151) 『大正』四九、二七六中取意

『大正』五〇、九八四中取意

(152) 『大正』五一、一三〇中取意

(153) 『大正』三七、二一五下

(154) 『大正』三九、五二九中

(155) 『大正』三三、二二八上

(156) 『大正』三四、二五下

- (157) 『大正』三四、一八八上
(158) 『大正』一二、一〇三五下
(159) 『大正』二五、一一〇上・中
(160) 『大正』二五、一一〇上・中
(161) 『大正』三〇、三一三
(162) 『大正』三五、七八七中・下
(163) 『大正』三一、七九七上
(164) 『大正』三九、五〇五下
(165) 『大正』四六、一四四上
(166) 『大正』三三、五五二中取意
(167) 『大正』三九、五二七上
(168) 『大正』四四、二四五中
(169) 『正統』三三、三五八上
(170) 『正統』一〇二、一二下